成寿

SEIJU

2002年

第33巻

謹啓

春寒の候

仏一統様には益々仏清祥お慶び申し上げます

「成壽」第三十三号をお届けいたします。

この度は「清水寺と瑩山禪師」をたゝえる報恩

顕彰の碑建立」の特集号とさせて頂きました

仏言覚悟致しますれば幸甚です。

余寒尚厳き折仏身仏法愛を祈り上げ

今後共何卒よろしくお願い申し上げます。

合掌

善光寺住職 黒田武志拝白

清水寺に結ばれた深いえにし

瑩山禅師の碑除幕式

既に前号で、また、本号巻頭の特集でもご紹介されているように、京都音羽山清水寺に曹洞宗の太祖瑩山禅師と観音様の深いえにしに因んだ報恩顕彰碑が黒田倫子夫人によって建立され、去る十一月十五日に、曹洞宗大本山總持寺貫首板橋興宗大禅師猊下、北法相宗大本山清水寺貫主森清範大僧正猊下にご臨席いただき、除幕式が行われました。

折からの晴天。秋晴れの空にまっかな紅葉が映える清水寺。三重塔をバックにした堂々の顕彰碑を前に、式は厳粛な中にも華やいだ雰囲気に包まれました。これからこの場所が私たちの新しい、そして、もう一つの心のよりどころとして、さまざまな出会いを生み、深く記憶に刻まれていくことでしょう。

❶清水寺寺務所前で曹洞宗大本山總持寺貫首板橋興宗猊下をお迎えする黒田老師。❷大講堂の一室で清水寺貫主森清範猊下が板橋猊下にご挨拶。❸「曹洞宗のみなさまとご縁ができることは誠にありがたいことです」と森猊下。❹両猊下のご挨拶を終えて黒田老師と進行役の善光寺育英会新美事務局長は除幕式会場の準備を入念にチェック。右は大西真興清水寺執事長。

❶❷除幕式にあたって大講堂内の会議室で式の流れや引き続いて成就院の客殿で行なわれる祝賀会について、黒田老師の説明。

❷

❸黒田老師の説明に耳を傾けるご臨席のご老師様。❹檀信徒のみなさんもひときわ真剣なまなざしで。

❸

❹

❺大西真興清水寺執事長を先頭に大講堂から顕彰碑に向かう黒田老師とご臨席されるみなさん。

❶除幕式会場。❷音羽の山に厳かに響き渡った観音経。❸宗教関係だけでなく、地元のテレビ局からも取材。❹発願主の啓白文に続いて、清水寺森貫主猊下からのご祝辞。❺顕彰碑にお筆をいただいた板橋猊下から温かいお言葉を。❻喜びにあふれた発願主黒田倫子夫人のご挨拶❼黒田老師は「21世紀は女性の時代」と。

❶❷除幕された顕彰碑は板橋貫首猊下の読経によってお導きいただきました。

❸発願主黒田倫子夫人による啓白文奉読。顕彰碑建立の意味とその思いを、もう一度、噛みしめるように、朗々と述べられました。

❹顕彰碑のご撰文をいただいた東隆眞先生のご名代、ご長男東眞人様がご臨席。黒田老師からご紹介がありました。

❺除幕式を滞りなく終え、手を取りあって喜ぶ黒田老師と清水寺大西真興執事長、森法務部長。安堵の表情が伺えます。

❶曹洞宗貫首板橋大禅師猊下と北法相宗清水寺貫主森大僧正猊下が並ばれるようすは、まるでこの日の意味を象徴するかのようです。

❷萩野映明老師のご発声による乾杯。次第に宴も盛り上がってきます。❸ご来賓からいただくありがたいご祝辞も、美しい成就院の庭の景色を背景に。

❹温かいご祝辞に耳を傾ける黒田老師と倫子夫人。

❶地元から曹洞宗京都府宗務所長村上俊鳳老師のご祝辞。❷善光寺檀信徒を代表して熊谷豊太郎様がご挨拶。❸衆議院議員田中慶秋様からもエールが。❺中締めは黒田俊雄老師。❻板橋大禅師と成就院の庭をバックに記念撮影をする檀信徒のみなさん。

参拝路に沿って建てられた顕彰碑を示す石碑。

駒沢女子大学学長・東隆眞先生の撰文、曹洞宗大本山總持寺貫首板橋興宗禅師猊下の敬書による堂々の顕彰碑。清水寺の風景の一つとして、お参りする人々に親しまれることでしょう。

除幕式にご臨席いただいたみなさんの記念写真。

カラー■清水寺に結ばれた深いえにし　瑩山禅師の碑除幕式……1
特集●瑩山禅師顕彰碑建立　瑩山禅師に導かれて　ただひたすら夢に生きる…黒田　武志……14
●清水寺に瑩山禅師顕彰碑建立―黒田倫子夫人により発願……33
●清水の観音さまと曹洞宗……東　隆眞……35
除幕式に出席して……東郷　敏……41
●それぞれの夢と思いのインタビュー　―成就院で行われた喜びの席から―……50
カラー■清水寺……61
特別読物●「ほとけ」考―日本人の死者観について―……佐々木宏幹……65
カラー■黒田武志住職に曹洞宗特別奨励賞……72
詩●受賞を祝して……錦戸　節子……80
特別寄稿●戦場と聖地―イスラエルを歩きながら―……久保田展弘……82
育英生論文●世界の交流のための仏教……マルク・W・スターヘル・圓成……92
●留学僧として私の学ばんとすること……マシュランコフスキー・ジェルミ・観禅……100
●仏教・文学・その他―異文化の中で仏教を学ぶ……陸　晩霞……108
●世界平和と仏教徒の誓願……孟　東燮……114
●育英生派遣先集計……118
●ワットパクナム日本別院　建築進むタイ式本堂―棟上げ相当儀式厳修―……124
●大教師補任……126
カラー■豆を撒いて邪気を払う　善光寺節分会……133
詩●「不思議」「祈る」……安藤　康哉……162
参禅会のご案内130　永平寺団参案内138　声140　読者のたより147　留学育英生からのたより168

題字・イラスト　伊藤三喜庵

巻頭言

善光寺住職　黒田武志

「仁者は人を愛し　礼ある者は人を敬す　人を愛する者は　人恒に之を愛し。人を敬する者は　人恒に之を敬す。」

なんとも美しく、響きをもつ詩です。ご皇室の慶事、新宮様のご誕生の命名の儀でご称号（敬宮さま）とお名前（愛子さま）が、中国古典孟子の離婁（りろう）章よりお授けになったことは皆様ご承知のとおりです。昨今忘れてしまいそうな大事な人の生き方に尊い「徳目（とくもく）」が降（くだ）されたような思いがいたします。非常にわかり易く

親しみ易いことば、されどその心を行い続けることは、まことに至難。その人（人間）に「仁」（おもいやり）があればいつでも人を愛することが続けて出来るし、「礼」いわゆる縦の系統・伝統である親・祖先を大事に思う心があれば、人を敬うということがいつでも続いて出来る。またその人（自分）が人を愛する心があれば、他の人も自分を愛するようになるし、自分が人を敬えば他の人も自分を敬うようになるという自然の摂理。人間の最も美しく尊い心のあり方を示唆しているところであります。お釈迦様の慈悲、キリストの愛、孔子の仁。いずれも聖人、神、仏の導きは一貫共通しており、人間の心のあり方や生き方についてその真髄を教えております。人としての生き方はこの一語に尽きるわけで、これが人間の最も大事な基本であり、根本なのであります。お釈迦様の教えは億万あろうとも、ひとことに集約すれば「慈悲」、おもいやりということになります。このところを

道元禅師様は「生を明らめ、死を明らめるは仏家一大事の因縁」だと謂い、この四苦を理解することが衆妙（しゅうみょう）の門なのだと教えております。

昨今、もろもろ未曾有の現象を見まするに世界も、国も、企業も、個人もなにか人間としてその生き方について決定的なものを失いつつあることに危惧しております。これは真理に対する人間の基本的理解と解決に至っていない憂うべきことでございます。当然にして私たち宗教界にも新たな異文化宗教の理解を含めて、課題を突きつけられていることも少なくありません。今こそ基本と根本を確かにして真理に違わぬように歩を進めてまいります。その信念は、原点「祖師を通して釈尊に還る」「身を削り人に尽くさんスリコギのその味知れる人ぞ尊し」

初一念　私はこの心に違（たが）うものではありません。

昨年は新世紀元年、横浜善光寺と私にとりましては、忘れ得ぬ浄福の一年でし

た。発願成就、京都清水寺の境内に瑩山禅師さま顕彰碑建立。さらには曹洞宗特別奨励賞受賞。

なお、さらには曹洞宗大教師を拝命させていただくという、まこと仏種縁に従い身に余る栄誉を賜わることができました。おかげさまでと申し上げるべきか唯々感恩万謝。この上は、賦与されたわたくしの名分に従い実を行うべく精進して参ります。

いよいよ横浜善光寺も開創三十五周年を間近に、一〇〇年の計を見据えてさらに世界仏教の興隆と国家社会の進運に寄与しうる有為の人材育成、檀信徒の方々の幸福と安らぎのために限りを尽くして参りたいと念じております。

特集□瑩山禅師顕彰碑建立

瑩山禅師に導かれて

ただひたすら夢に生きる

善光寺住職　黒田武志

深いえにしをふたたび

平成十三年十一月十五日は、私と、家内倫子にとって、生涯忘れることのできない尊い日となりました。

紅葉たけなわ、錦に彩られた音羽の山。心あらわれるように遠く澄み渡る碧空…行く秋を惜しむかの様なそんなひととき、私たち夫婦は感無量の面持ち、大旱に雲霓を望む（ひでり続きに雨を乞う）が如く天下の名刹・京都東山清水寺の境内に待ち受けておりました。

開創は奈良時代、世界遺産にも登録されております清水寺、山号は音羽山、千二百余年前にさかのぼります。その昔延鎮上人が夢のお告げに導かれ白雲たなびく音羽山、いつしか麓の滝にたどりつきました。そこに出会った行叡居士

より授けられた霊木。それに千手観音像を彫り、滝の上の草庵に祀ったのが清水寺の始まりといわれます。まもなく、高子妻室の安産を乞い、鹿狩りのため上山した坂上田村麻呂というお方、延鎮上人に出会うことになります。殺生の不正を説かれる上人の教えに深く感動した坂上田村麻呂は、観音さまに帰依し、仏殿を建立、ご本尊十一面観音像を崇めて以来、清水寺は鎮護国家の道場となりました。

奥深く歴史あるこの清水寺、北法相宗のご本山でございますが、実は我が曹洞宗とも、たいへん深い関わりをもっており、不思議な縁起を観ずることができます。

禅という、ひとつの宗教思想を確立した曹洞宗の高祖。みなさまもよくご存知の通り、道元禅師です。禅師の、「尊いけれども高度で難解の教え」を衆生にもわかりやすく説き広めたのが、太祖瑩山禅師です。(瑩山禅師がどれほどの偉業を成し遂げたお方だったのか…詳しくは、後ほど特筆いたしますが) この瑩山禅師と清水の観音さまは、実は、大層深いご縁で結ばれておりました。

瑩山禅師は、今から六七七年前、鎌倉時代の末、越前(現在の福井県)に御降誕されました。禅師の御祖母さまに当たられるお方を明智優婆夷(みょうちうばい)さまと申しますが、禅師は、母君の懐観(えかん)大姉とともに、幼少の頃から仏の心を学び、深く愛され育まれたそうです。

明智さまは、高祖道元禅師さまが大陸仏法の伝燈をになって無事中国留学から帰国した最初の、在家女人の修行者であったろうといわれています。この明智さまがおられなかったら、瑩山禅師は、道元禅師とのご縁をもつことができなかったのではないか…と思われるほど、瑩山禅師の生涯に大いなる影響を与え、人生の道しるべとなり光となったお方でした。

まだ、瑩山禅師がご誕生になっていないその何十年か前のこと、この明智さまがなぜか肉親の前から忽然と姿を消し、行方知れずになられたことがあった、その間七・八年、ひと昔という時間になります。のちに、瑩山禅師の母君懐観さまは、その消息を探し尋ね歩かれたという。

その時分、懐観さまが日参なされましたのが、清水の観音さまでした。観音さまに願をかけられた懐観さまは、明日満願という六日目、路上に小さな観音さまの頭部を見つけハッとしてそれを拾い上げ、大切に両手で包み込み、「もしも御母上さまのご様子がわかるものならば、この観音さまの頭部にお体を与え、永く、深く崇めたい…」と一心不乱に祈ります。そうするとこの、願いは忽ち叶えられ、探しても見つからなかった明智さまと遂に巡り合うことができたといいます。

懐観さまの、明智さまを想う熱き祈りは、音羽の観音さまに通じ、聞き届けて下さったのですね。

また、なかなかご懐妊の兆しのなかった懐観さまは数え三十七歳の年、輝く光をのむような夢をごらんになられ、まもなくご懐妊、のちの瑩山禅師を身ごもられていることにお気づきになりました。三十七歳といえば、ちょうど今の、雅子妃殿下が新宮さまをお産みになったときとたいへん似たお年頃です。現代のように近代医学が発達した時代でさえも、慎重になる年齢ですから、今から七百年近くも前のことでは、それはもう、命がけの出産を覚悟せねばならぬ大事であったと思います。

しかし、何としても、呱呱の声を聞きたい。そして、命に代えても産まれ出でたこの子を世に送り出さなければならない！「大善知識となるような、世の光となるよう立派な子を無事産ませいただきたい！」と…。

そう願う懐観さま、越前・多禰（たね）の観音さまに毎日詣でて『観音経』を読誦し、三千三百三十三拝という礼拝をつとめ死をも決意しての壮絶な祈り、命がけの誓願でした。

この三千三百三十三拝という礼拝は、三十三体に化身した衆生を済度（心をもつすべての存在を苦しみ・迷いから救い、悟りを得させること）する観世音菩薩の大慈悲にちなんだものです。

こうして毎日祈願して七ケ月たち、またその日もいつものように多禰の観音堂への道すがら、懐観さまはにわかに赤子が産まれそうな気配におそわれる。そして、歩きながら間もなく安らかに赤子をお産みになられたといいます。境内を歩きながらのご出産であったので、幼名を「行生」と名づけられ、のちの瑩山禅師さまのご誕生となったのであります。瑩山禅師は懐観さまの子であり、そして同時に観世音菩薩の申し子でもありました。

それからは尊い御祖母・明智さま、御母・懐観さまの深い観音信仰に育まれ立派にご成長になり、出家、学文・修道・住持・檀信徒の接得…すべてにわたって観世音菩薩（ここでいう観世音菩薩というのは、祖母・明智さまと清水寺にちなむ、あの十一面観音さまです）に祈誓し蘊奥（うんのう）を授ってゆかれたのです。

やがて禅師は、能登（石川県）に洞谷山永光（ようこう）寺（じ）を開かれますが、その開基は弟子・祖忍尼。このお方は瑩山禅師にとって祖母・明智さまの再来かと思わせるほどの信仰心深くして慈愛に満ち、あたたかな存在でありました。永光寺山内には、かの十一面観音さまを奉納、それを安置する円通院をお建てになりましたのも、明智さまの誓願。また、母君懐観さまの素志を生かして、「すべての女性の悲しみ（この時代、たとえば妊娠・出産においても幼子を育てていく生育環境はきびしく夙にむごい運命を背負う人が

多かったのです）から何とか救ってさしあげたい」という祈願を成就するためであり、「女流済度の菩薩」になろうという誓願を発願なされたのです。まさに、この円通院観音堂こそは、祖母明智さま・母懐観さまの悲願を実現するための女性の道場であり、それはとりもなおさず、瑩山禅師における仏法宣布誓願成就のための道場でもありました。

禅師はこの永光寺を一生偃息安楽の地になそうと思われましたが瑞夢（たいへん縁起のよい夢）に導かれ、やがて、諸嶽山總持寺となる諸嶽寺の門に入り、辺りを仰ぎ見渡しましたところ、かの清水寺を彷彿させる、霊験あらたかな聖地であり、魂が清められるがごとくまことに壮観で、こここそは、仏法の縁が熟した空間であると直感、山門建立を発願されたといいます。

果たして、仏祖正伝の法は、禅師とその門流によって飛躍的・爆発的に伸展することとなりました。観音信仰の篤い禅師は、「放光菩薩」（放光菩薩は、観音・地蔵、二菩薩の徳を備え、これを一体とした菩薩さまです。観音は円通の徳、地蔵は慈悲の徳…というように、慈悲救済を本願として、すべてのものに利益を与える菩薩さまなのです）を置かれて、遍く寺檀の教化、庶民…ことに哀れな悲しみに包まれた女性に慈悲の光と、安堵の仏法を説いてゆきました。

このように思いを馳せてまいりますと、瑩山禅師さまをとりまく方々のご誓願をして、後世にまで脈々と受け継がれてきたその感化力に感嘆せずにはおられません。この尊いお二方なくしては瑩山禅師を語ることはできない…と申し上げても過言ではありません。

清水寺さまとのご縁を報恩顕彰する碑

倫子と私は、かねてよりこの尊い軌跡を尋ね学んでまいりましたが、ことに倫子は、瑩山禅

師ご生誕の地であります処の越前に生を受け成長したという巡り合わせ、このご縁を篤く思い瑩山禅師さまを、深く学べば学ぶほどに御祖母・明智さま、御母・懐観さま、さらには、我が曹洞宗高祖さまと瑩山禅師さま三代に亘る清水の観音さまの深い仏縁、この奇跡を広く世の人々に知っていただきそして永くその恩徳に感謝し讃えてゆきたいと、なにかしない訳に参りませず、これが碑建立の発願に至ったのでございます。

そして…。

一昨年（平成十二年）清水寺ご本尊十一面千手観音　三十三年目の歴史的ご開帳と時を同じくして、曹洞宗高祖道元禅師さま降誕八百年、さらには昨年、道元禅師七百五十回忌大遠忌を翌年（今年）に迎えるという、まこと不思議な仏縁重なる千載一遇に、大本山清水寺さまのご理解と總持寺さまのご庇護のもと、この祈願は聞き届けられ、『曹洞宗太祖瑩山禅師と清水の観音さまとの深いえにしを報恩顕彰する碑』として建立することができたのです。

この記念すべき誓願は清水の舞台を展望する一等地、参詣者で溢れ、混雑のなか、ぶじ除幕の式典を、執行させていただくことができました。

除幕式には、大本山總持寺貫首板橋興宗大禅師猊下、北法相宗大本山音羽山清水寺貫主森清範大僧正猊下にご臨席いただきまして、心あたたかいお言葉も頂戴するという、身に余る光栄をいただくこととなりました。

まずは、板橋曹洞宗貫首猊下お導きの尊い読経。「願わくばこの功徳をもってあまねく一切におよぼし、我らと衆生を皆ともに仏道を成ぜんことを…」朗朗と響き渡るなか、除幕の式を順々とすすめさせていただくことができました。

発願主・倫子は、観音さま、瑩山禅師さまへの言上。『啓白文』を奉読。

『謹んで三世十方の諸仏　諸菩薩に奉言し、

諸法の諸天の冥祐を敬仰し奉る。

観音経に示したまいて、

観世音清聖は苦悩厄死に於て、能く為めに依怙と作れり、一切の功徳を具して、慈眼をもって衆生を視たもう、福寿の海　無量なり、と。

虔も惟るに、昨年は（平成十三年に読んだものなので、ここでいう昨年とは平成十二年のこと）清水寺御本尊十一面観世音菩薩　三十三年目の御開帳の歳にあたり、また昨年（平成十二年）は曹洞宗高祖道元禅師さま降誕八百年、来年（平成十四年）は道元禅師さま七百五十回大遠忌の歳にあたる。

この佳き千載一遇の仏縁の重なる本年（平成十三年）ここに音羽山清水寺さまの御理解と諸嶽山總持寺さまの御庇護のもと、曹洞宗太祖常済大師瑩山禅師さま、ならびに御祖母、母君三代にわたる清水の観音さまとの奇しきゆかりをしるす報恩顕彰碑を建立し、除幕の式典を執行す。

ここに、ひたすら大恩教主釈迦牟尼仏、歴代の祖師の証明を仰ぎ奉る。

伏して冀くは、みなともに仰いでみ仏の教えを信じ、慇懃に供養するゆえんなり。

ねがわくは、うけ給え。

平成十三年十一月十五日

発願主　黒田倫子

謹んで白す』

音羽山清水寺貫主森清範大僧正猊下には、

「本日は錦秋に垂（なんな）んといたします、この清水寺におかれまして、瑩山禅師さまの記念の供養碑が建立されまして除幕されましたこと、まことにおめでとうございます。

また、施主黒田さま、そして今日は、大本山總持寺板橋興宗猊下のもと、本当に大勢の方々にこうした供養をご随喜たまわりましたこと、

まことにありがたいことと存じております。
うかがいますと、瑩山禅師さま、たいへん当山の観音さまとのご縁が深こうございますようで…さらにこの記念碑が、この当山と曹洞宗とのご縁を篤く深めていただけますものと思っております」
とまことにありがたい、温かいお言葉を頂戴し、そしてまた、大本山總持寺貫首板橋興宗猊下からは、
「まさに千秋万劫というか、秋晴れの良き日に、この天下の名刹清水寺さまで瑩山禅師顕彰の碑を開眼されたというのは、まこと喜ばしいことであります。天下の清水寺と我が宗門は、深いご因縁が結ばれておりますが、今後ますます深められていくということは、法のためにも喜ばしい限りでございます。
ここに至るまで、いろいろと御理解をいただいた清水寺貫主猊下のご厚情ならびにお世話の方々…そしてまた、これを発願し奉納された横浜善光寺さまならびにそのご寺族の方々には、深く、感謝の念でいっぱいであります。
また、本日は、全国から馳せ参じられた我が宗門のお寺さま方、さらに、ご参詣の方々にも深く感謝申し上げます。
今後とも、よろしく清水寺さまと我が宗門との繁栄を祈念し、ここに祝福を申し上げたいと思っております」
と、ありがたいお言葉、尊い教えを頂戴いたしました。
発願主・倫子も、感極まった様子、
「本日は清水寺さまの破格のご好意で、清水寺の森清範貫主さま、總持寺の板橋禅師さまにお出ましいただきまして、このようなりっぱな除幕式を執り行うことができましたこと…本当に身にあまる…身にあまりすぎる光栄を感じております。今日ほど、生まれてきてよかったと

いう悦びと幸せを感じたことはございません。本当にみなさま、ありがとうございました」

と感謝と感激の謝意を述べさせていただきました。

そして私もまことに感激、はげしく心は高揚し、押さえることができませんでした。

「高いところから大変僭越ではございますが、ただ今家内のお礼の挨拶に、一言、二言、付け加えさせていただきたく、お時間頂戴したいと申し上げ、重ねて皆様…ことに清水寺の森清範猊下、大本山總持寺板橋猊下、また大西真興執事長さま、森孝忍法務・庶務部長さまに唯々ありがたく心より厚くお礼を申し上げます。

顕彰の碑にも書かれておりますように、このたび建立についてお骨折りいただきましたお方は、駒沢女子大学学長東隆眞先生でございます。本日はどうしても、公務にてこちらの方にはお出ましいただけませんでしたが、皆様にくれぐれもよろしくお伝えいただきたいとの伝言を頂戴いたしております、まずもってお伝えし謹んでご報告申し上げます。その名代として、学長のご長男さまにおいでいただき、ありがとうございます。

さて…ただいま、倫子も申し上げましたが、この、日本一の清水寺にこのような大事をさせていただいたことは、ですぎたことではなかったろうかと、また、境内の一等地をお借りして建立させていただいたことにつき…ちょっと大きすぎましたか…と恐縮しながらお尋ねいたしましたが、管長さまにも快く許していただき、瑩山禅師さまのご遺徳に免じて諸々お許しをいただいたものであろうと思う次第でございます。

瑩山禅師さまのお母君は、ご存知のように、この清水寺観音さまをたいへん深くご信仰になりました。東隆眞先生からいつの日だったか「瑩山禅師さまも随分お参りなさったことでしょう

ねー」とおっしゃるので、私も「ええ、もちろん、曹洞宗高祖道元禅師さまも親しくここの観音さまにお参りなさったんじゃないでしょうか」と、七百年も八百年もの昔に思いを馳せながら申し上げました。その同じ地にこうして立っておりますといまにもそこに禅師さま、居ますが如くに観じられ感無量でございます。

瑩山禅師さまは、お祖母さま、お母君さまの遺志を受け継ぎ、女性の救済に努めたお方でもあります。現代ではあたりまえのことですが、昔は考え方が少し違っていたのです。いささか古き悪しき女性蔑視の状況を目の当たりにして大層お悲しみになっていた、そのご意志を継がれた瑩山禅師は、「女性を尊重せよ」という教えをも、私たちに残してくださいました。

私も今日から改めて、女房をはじめ、日本中のまた、世界中の女性を大事にしていきたいと堅く心に誓わせていただきました。そしてこのようなことを両猊下にもお願い申しあげております（笑）。二十一世紀は女性の時代だと言われておりますから…瑩山禅師の教え通りになってゆくかと思われます。

もう一つ、瑩山禅師さまは、檀信徒の方々は本当に尊い宝であり、み仏のごとく接せよ、と、教えてくださっております。

そういう意味からも清水寺さまは、まさに、そうした方々を大切にしておられ、朝は六時に門をお開きになる、そして、閉門は、夕方六時…。朝早く目覚めた方も、仕事が終わった方でもお参りに立ち寄れる。日本全国から年間七・八百万人もの、参詣の方であふれかえるご隆昌は、日本中見渡してもなかなかあるものではありません。

そんなすばらしい清水寺様と、この度のご縁を結ばせていただきましたこと…さきほど板橋禅師さまにもお喜びでいらっしゃいましたが、

宗旨・宗派を超えて結ばれた尊いご縁にさらに感謝申し上げ、私も今後ない力をふりしぼって仏法に照し日本のため、そして世界のために尽くしていきたいと思っております。

清水寺さまの観音信仰がさらに世界にまで広がりますように…また曹洞宗もその徳にあやかり、お釈迦さまに感謝申し上げ、歴代祖師の方々にも厚く御礼申し上げたい。そして、このお導きに感謝し応えて全力を尽くすことをかたく心に誓いまして、皆様への御礼の言葉に代えさせていただきたいと思います。本当に本日はありがとうございました。」

お礼を言い終え、万感胸に迫るものがあり、震える思いを致しました。

除幕式ののち成就院で行われました祝宴では、ご来賓各位代表さまのおことばもあり、殊に京都府下四百カ寺代表宗務所長村上俊鳳老師さまより、

「今日この音羽のそよ風ふく青空の下、とどこおりなく除幕の式を終えられまして、発願主黒田倫子夫人、横浜善光寺黒田武志ご住職にも心よりお祝い申し上げたいと思います。観音さまと善光寺の仏縁も深まり、私たちもそのご縁と、観音さまの大きなお徳、大きな法悦を頂戴いたしましたこと御礼申し上げます。名刹清水寺さまと、曹洞宗ご本山總持寺さまとのご縁がこうして深く結ばれ、そして今日のような盛大な除幕式が清水寺で行われましたことは、地元といたしましても光栄に存ずるわけでございます。これまで遠いところにあるように感じておりました大本山總持寺さま、そして瑩山禅師さまと京都の清水寺さまとにこのような深いご縁があることを改めて認識いたしました。今後京都府管内四百カ寺檀信徒の皆さまはじめたくさんの方々にも、これを契機といたしまして、ご参詣いただきたいと思いますし、清水寺さま曹

洞宗さまとの絆がより強くなるためにも、この顕彰碑建立にはまことに深い意義がありこれを機に皆様に広く知っていただくことが大切だと思いますし、感謝し申し上げる次第でございます。

本日は、発願なさいました横浜善光寺のご内室ならびに善光寺ご住職さま、ありがとうございました。今後とも、京都府管内関西管内につきましてもよろしくご導愛いただきたいと存じます。

板橋興宗、森清範両猊下に感謝いたしますとともに、観音様のご慈悲によってご縁をいただいて、世界の宗教が手を携えて一つになる糸口ではなかろうかと感激しております。」

と、温かく胸にしみいるお言葉をいただきました。

夢に生きた瑩山禅師のお導き

さて、私たちを導いてくださった瑩山禅師さま…ご生誕前後の不思議な観音さまとのご縁はおわかりいただいたかと思いますので、その後、どの様にご成長なされたか瑩山禅師さまのお姿をお話いたしましょう。

幼名を「行生」。元気でたいへん聡明なお子様でしたが、やはりふつうではありません。遊びよりも、土を練って仏像を作ったり幼少より経典を開いたり、また非常に感受性が強く、短気だったといわれますが、ある時期より仏の心が強く芽生え始めます。数え六歳のとき。母君に連れられ観音さまにお参りし、その慈悲あふれる観音さまのお姿を見て、

「この菩薩さまはどこにいらっしゃるのですか、どうしてこのようにみなに尊敬されているのですか」

と尋ねられたそうです。母君は、「まだ豆と麦との区別もつかないような幼子がこのような！」

と、大層驚かれましたが、気をとりなおして、

「行生や、観音さまは、慈悲深い心をもって、多くの難儀を救う菩薩さまです。むずかしい道理や因縁を説くことは私にはできないが、ただ、この大慈悲の心をたよりに、唯々あなたの成長を願い、我が家の幸せを望んでいます。だからこの観音さまを深く信仰し、毎日礼拝しては、ひたすらにお経を読誦することが大切なのですよ」

とお答えになりました。この言葉は行生の心に響き、観音さまに帰依して出家求道の大志を駆り立てていったと残されております。

以来、日常生活では読み書きに通じ、ひとたび見聞するやすべて記憶し、経文も独学でその意味を理解されるなど、三宝（仏・法・僧）を敬い、お経読誦する修養の毎日が続きました。この卓越したお姿を見て人々は、「観音さまの生まれ変わり」だと言うほどになっておいででした。曹洞宗の高祖である道元禅師もまた、四歳のときから中国古代の難解な詩やお経を読み理解したという天才児であったことから、そのあたりもたいへん似ていらっしゃいます。

さて、八歳にして出家の志をご両親に申し出られた行生さまは許されて、永平寺（道元禅師開創）の第三代住職を継がれた義介禅師のもとで修行を始めます。十三歳のときには、義介禅師の師である懐奘禅師に就いて菩薩戒を受け、正式な僧侶となりました。まもなくご高齢のため懐奘禅師は入滅され、遺命を受けた義介禅師のもとで再び真剣な禅修行が行われることとなりましたが、ともあれ仏弟子となって、道元禅師の優れた高弟お二人から深い仏縁を結ぶことができたというすばらしい環境に恵まれました。

そののち、求道心はさらに深まり、五年ほどたちいわゆる青春時代ともいえる若き日々、宝慶寺の寂円師の元へ、さらに京都に上って万寿

笠
黒衣(ごきょう)
手
衣(白)
鈴
箇枝但し導師が持つ
脚絆
わらじ

寺、東福寺で臨済禅を学びのち、比叡山にのぼり天台教学を、そして紀州由良の西方寺（後の興国寺）へ…禅師自らこれらを述べる記述が充分でないので、はっきりとしたことは申せませんが、ともかく、あまた他山にものぼり、他宗の善知識にも師事、さまざまなご体験と学びを深くして視野を広げ大いなるご修行をなされたと想像できます。

このように、西へ東へ、野へ川へ…師を尋ね道を学ぼうとする禅僧を「雲水」と申しますが、僧侶を志す者にとって、自ら体験し、修行して越えねばならない欠くべからざるプロセス、私も若き日々、とてつもなくきびしかった全国行脚そんな雲水時代を経験させていただきましたので、この頃の青年僧瑩山禅師の心境を、恐れ多いこととは思いますが、僅かでも感じとることができるような気がいたします。

各地を巡りながらやがて二十一歳の秋。永平寺に戻られた禅師は、翌年、大乗寺を開創し、義介禅師に師事され、加賀の地に移られました。

義介禅師のもとで厳しい修行を積みながら、二十七歳のとき、「深く真の仏法に達した」と、師から認められるに至ります。

「平常心是道」。これは、中国唐代の僧　趙州従諗禅師が、その師・南泉普願禅師との問答によく用いられる言葉です。「道とは何です」との問いに、「平常心」と応え、その奥深い意味を趙州禅師は一瞬にしてとらえ、悟りを開いたという法話です。

これがいったいどういう意味のことなのか…義介禅師もまた弟子たちに問われたとき、瑩山禅師ただ一人、「わかりました！」と応える、

「黒い玉が暗闇の中を飛んでゆくようなものです」

義介禅師が静かに微笑んでさらに意味を問うと、瑩山は、

「お茶を飲むときはお茶を、ご飯をいただくときはご飯をおいしくいただくこと…あたりまえの日常のことを素直にあたりまえに実行することです」

とお答えになったという。これこそ「平常心是道」の極意。この答えを聞いた七十七歳の義介禅師は大層によろこび瑩山に向い、

「なんじはもう私を超えている。我が永平祖師の宗風を継承するがよい」

と正式に許可されたというのです。

平常心…私たちは、毎日の多忙な生活の中で、「日常茶飯事」の一つ一つにとらわれたりこだわりにふり回され、なにか自ら窮屈な常識や標準や規範をつくって縛られたり、身動きできなくなっているのではないでしょうか。仏教や禅は、そんな窮屈な思いせずとも、人間はもっと自由であり、解放されていると教えています。また或る禅師が「禅とはなにか」と問われたとき「眠くなれば眠る、腹が減れば飯を喰う」と答えたという。ともすれば眠くないのに眠ろうとしたり、空腹でないのに食べようとする、これなどは、平常心是道に従っていないことになる。申し上げますように、勝手に自分の規範にふり回されていることになりはしませんか。私の女房など『ああ眠れない』などと寝言を言うことがあります。実に可愛ゆくて罪がない、どうでしょう。

坐禅…これは、「悟り」を得るための真髄ともいえます、が、坐禅のかたちにとらわれない禅を日常生活の中においても、実践してゆくことができる…瑩山禅師さまは宗風を大衆化されたといわれておりますのも、このようにむづかしい仏教の教えを広くわかりやすく衆生に教えてくださったことがあげられると思います。

「平常心」の悟りによって禅師は、人々を教化する資格を得、以後、道元禅師の「正伝の仏

法」を世に広め、曹洞宗発展の原動力として精力的な活動が展開されていくこととなりました。

曹洞宗高祖道元禅師さまがご在世だった鎌倉時代は、殊に戦乱や政治の乱れにより人々の不安が大きくなっていた時代でした。それだけに人々は強く心の救いを求め、そんな人々に応えるべく衆生の救済というお立場から、すべての人は仏であり、すべての人は仏になりうるとして大いなる救いの手を差しのべられ、仏の教えを一般の人々にわかるものにしようとお努めになったのが瑩山禅師さまなのであります。さてその師道元禅師さまはまず自分を磨き、「仏教の真髄とは何か」「永遠不変の本当に正しいものとは何か」をご自分の内に向かって問いてゆき、「本当に正しいことを理解する〝眼〟、つまり〝智慧〟を持て」と、後進の弟子たちを指導していきました。瑩山禅師は、その尊い教え「正法眼蔵」を、僧だけでなく、救いを求めるすべての衆生に伝えそれを普及するという夢を実現されたのです。

そしてその夢…誓願は、次々に成就、道元禅師の蒔いた尊い種に、水をやり育み花開かせるに至りました。どちらの祖が欠けても、今の曹洞宗はあり得なかったでしょう。

我が曹洞宗では、仏教の開祖、お釈迦さまをご本尊として礼拝し、お釈迦さまのご慈悲の心を日本に正しくお伝えになった道元禅師を「父」、瑩山禅師を「母」とし、(これは、父のように厳しく、母のように優しいという意味ではありません。両祖あって宗門ということです)、また道元禅師を「高祖」、瑩山禅師を「太祖」として、両祖大師を崇めて奉る、他宗にはない「宗祖にあたる方が二人」という特色を持つに至ったのです。ですから、両祖大師とならんで、奥深い永平寺、海をひかえた街に近い總持寺という、二つの大本山があるのです。

瑩山禅師は入滅なさるまで半世紀を、ただひたすらに道元禅師の仏法を花開かせることに身を投じ夢をもって駆け抜けました。そして、二十世紀最後の年となる地球の節目ともなる一昨年（平成十二年）、瑩山禅師が生涯を賭けた師、高祖道元禅師ご生誕八百年を迎え、二十一世紀が始まろうとする今年（平成十四年）に七百五十回遠忌を迎えることになります。

私には、「現代社会をよく見渡せよ。道元禅師さまの教えを今一度真剣に学ぶことが必要な時代に入っているんじゃないかい？」という、瑩山禅師のお声のようにも感じられてならないのです。

また、ちょうどご生誕と大遠忌法要を迎える年のはざまにあたる昨年（平成十三年）、先にも申しましたように、「仏心とは大慈悲心これなり」と説いた瑩山禅師さまの心の芽を息吹かせた御祖母明智さま、御母懐観さまとのゆかりを記す報恩顕彰碑を、深いえにしで結ばれた清水寺さまに建立させていただくことができました。このうえは仏弟子として、私共夫婦そして関わる皆様とともにさらに精進致しまして、道元禅師の真の仏法を未来永劫脈々と世界の隅々まで届けられるよう粉骨砕身、さらには私の信念を継承して伝えていってくれる仏教者の育成こそ、私に課せられた永遠の課題と受けとめ、これに徹することが瑩山禅師の心を継ぐ者の使命だと思っております。

生涯私利私欲を捨て、ただひたすらに夢に生きた瑩山禅師。私たちもいつか必ず夢を実現する、という信念さえもっていれば、やがて高祖さま太祖さまの余徳をして必ずみ仏のお導きはあると信じています。私にも、今後どのような困難が待ち受けましょうとも普遍的に法灯を燃やし続け夢に生き、誓願に生きる人生を駆け抜けてまいりたいと思っております。

特集□瑩山禅師顕彰碑建立

清水寺に瑩山禅師顕彰碑建立

――黒田倫子夫人により発願――

京都東山の名刹、音羽山清水寺（森清範貫主）に於て、大本山總持寺貫首板橋興宗禅師御親修のもと「曹洞宗太祖瑩山禅師と清水の観音さまとの深いえにしを報恩顕彰する碑」の除幕式が営まれた。これは神奈川県横浜市・善光寺（黒田武志住職）の寺族、黒田倫子夫人により発願されたもの。

瑩山禅師は祖母明智優婆夷と生母懐観大姉により深い観音信仰の中で育まれ、瑩山禅師自身も能登に永光寺を開き、十一面観音を奉安する円通院を建立するなど、三代に亘り清水の観音様と深い仏縁であった事が知られている。その仏縁を顕彰し恩徳を讃える為に今回、清水寺境内に建立した。

顕彰碑の規模は、台座を含め縦二・五メートル、横三メートル。碑文は東隆眞駒沢女子大学学長により撰

文された。

午前十一時からの式典では、板橋禅師と森貫主を始め、宗門からは村上俊鳳京都府宗務所長らが参列。また清水寺からは大西真興執事長、森法務部長らを始め、関係者ら約五十人が出席した。顕彰碑は板橋禅師、森貫主、倫子夫人により除幕され、ここに両宗派の縁が結ばれた。

倫子夫人による啓白文が奉読された後、板橋禅師は「清水寺とわが宗門とが深い御縁で結ばれ、ますます深められていく事は喜ばしい限りである。ここに至るまでの関係者に対して、感謝の念で一杯である。今後とも清水寺と我が宗門の発展を願っている」と語り感謝の意を表した。

また森貫主は「記念碑建立により更に、当山との御縁が深まっていく事を願っている」と両宗派の益々の繁栄を祈念した。

これを受け倫子夫人は「両猊下御親修のもとに、このような立派な除幕式を行うことが出来て身に余りすぎる光栄を感じています」と謝辞を述べていた。

黒田住職は「瑩山禅師はもとより道元禅師も親しく清水の観音様にお参りになったと思うが、七～八百年前の事と思うと感無量である。また瑩山禅師は女性を大切になさった。二十一世紀は女性の時代であるとも言え、今後大事にしていきたい。清水寺に於ては早朝から夕方まで開けておられ、日本中からお参りに来られる。そのような場所に尊い御縁を結ばせて貰い、感謝すると共に清水寺の観音信仰が世界へ広がると同時に曹洞宗もその徳をあやかれば。お釈迦様に感謝して歴代祖師方に厚く御礼する」と集まった関係者に感謝を表した。

特集□瑩山禅師顕彰碑建立

清水の観音さまと曹洞宗

駒沢女子大学学長　東　隆眞

いたるところに観音さまの霊場

東京に浅草寺（浅草の観音さま）があれば、西に清水寺（清水の観音さま）がある。東に坂東三十三か所、秩父三十四か所の観音霊場があれば、西に西国三十三か所の観音霊場がある。わが国には、いたるところに観音さまの霊場がある。

いま、秘仏十一面千手観世音菩薩を奉安する京都、東山三六峰のうち、音羽山清水寺と曹洞宗とのえにしは、永く、深いのである。

曹洞宗の高祖・道元禅師（一二〇〇―一二五三。大本山永平寺開山）は、京都に生まれ、京都で示寂した。道元には、清水寺に関してしるすところはないが、郷里の代表的名刹・清水寺に、その生涯で一度も杖を曳くことがなかった

とは、とうてい考えられないであろう。中国留学からの帰路、船が暴風で荒れたので、道元が観音経を読誦すると、観音さまが蓮華に乗って海上に浮かび、波風がおさまった「一葉観音」の伝承があり、代表的撰述『正法眼蔵』九五巻のうちに「観音」の巻があり、永平寺の法堂の本尊は聖観世音菩薩である。

祖母と母
観音信仰で育った瑩山

曹洞宗の太祖・瑩山禅師（一二六八―一三二五・大本山總持寺開山・洞谷山永光寺開山）は、観音さまの申し子である。

瑩山の母（のちに懐観大姉という）は、三十七歳のとき、越前・多禰（福井県武生市と丸岡町の両説がある）の観音堂に日参して、毎日三三三三拝の礼拝をつとめて安産を祈念し、境内を歩行中に、にわかに産気づいて生まれたのが瑩山である。七カ月であった。三十七歳の高齢出産は、医学技術の進んだ今日ならばともかく、およそ七百年前のむかしにあっては、奇跡に近いだろう。以来、母は、ことあるごとに観音さまに祈り、仏法のお役に立ってくれるように願い、瑩山は母が手を合わせるうしろすがたを見て育った。

母の母、すなわち瑩山にとって祖母は、明智（妙智）優婆夷という。帰朝して京都の建仁寺に仮寓していたころの道元に聞法し、参禅した。瑩山は、この祖母を介して道元とつながるのである。瑩山は、幼少時代、祖母の感化をえた。

明智優婆夷は、そのむかし、七、八年間も行方が不明であった。娘（のちの瑩山の母）は八方手をつくしてさがしたが不明であった。そこで、清水の観音さまにおまいりし、明日は満願という六日めに、路上に小さな十一面観音の頭部を見つけた。これを拾いあげて、もし母の様

十一面観音像

子がわかれば、この観音像を修補したいと祈ったところ、果たしてその願いは叶えられ、ふたりは再会できたのであった。

祖母、母の熱烈な観音信仰による家庭教育、宗教教育のなかではぐくまれた瑩山は、やがて、能登の羽咋に永光寺を開いた。開基は「平のうちの女」すなわち黙譜祖忍尼といい、瑩山にとって明智優婆夷の再来であった。永光寺には、もと勝運寺とよぶ観音堂があったらしい。

清水の繁栄ぶり実見

――夢見た瑩山――

放光菩薩に霊験

永光寺の境内に勝運峯円通院を建てた。円通院は、祖母の追善供養のため、母の女流済度の悲願を実現するための道場であった。円通院の本尊は祖母、母ゆかりのあの十一面観音で、現存する。身の丈五、六チセンのこの小像は、気品があって優しい。

さらに、瑩山は、能登の櫛比（門前町）に諸嶽山總持寺を開く。もとは、諸岳観音堂と名づける真言系の古寺であったのを定賢権律師から寄進されたのである。

大本山總持寺に瑩山の真筆という『總持寺中興縁起』（『諸岳観音堂之記』ともいう）が伝わる（重文指定）。

このなかに、門に入って、諸堂棟を廻顧すれば、並ぶこと清水寺のごとしという一語がある。總持寺とその門風の将来の繁栄を予想したさまを、夢のなかで、瑩山が感得した。これによってみれば、瑩山は、七堂伽藍のたちならぶ清水の観音さまに参詣の善男善女が絶えることのない繁栄ぶりをすでに実見していたのである。

また、このなかで、瑩山はしるしている。總持寺に山門を建てたい。山門には放光菩薩を奉

安する。放光菩薩とは、僧形の観音さまと地蔵さまのことである。この両尊を一体として、放光菩薩とよぶ。妊婦は、この放光菩薩に祈願するがよい。霊験は必ずあらわれる、と。

このくだりに至って、瑩山の母の観音信仰による瑩山出産の始終を想起するのである。

曹洞宗は観音宗のおもむき

ひるがえっておもえば、清水の観音さまには、子安の塔（三重塔）があり、泰産寺があり、産寧坂がある。

伝え聞けば、清水寺開創のまえ、八世紀の前半、聖武天皇、光明皇后が安産を祈願して、孝謙天皇が無事に生まれたことから塔が建てられたという。

いよいよ、えにしの深いものをおぼえる。

道元の仏祖正伝の法は、瑩山およびその門流が、日本で最大の寺院数を擁する曹洞宗として発展する原動力となった。

瑩山の孫弟子として名高い通幻寂霊（一三二二―一三九一）は、その母が清水の観音さまに祈誓して生まれたという伝承がある。

清水寺の本堂に向かう轟門には、「普門閣」の扁額がかかる。金沢市の古刹、曹洞宗大乗寺第二十六世中興・月舟宗胡（一六一八―一六九六）の書である。堂々として、安定感がある筆蹟で、轟門にふさわしい。月舟は、弟子の卍山道白（一六三六―一七一五）とともに、曹洞宗中興の祖とあがめられている。六十歳を過ぎて、大乗寺を辞し、宇治田原に禅定寺を復興する。月舟は、能書家でもあった。諸方面から揮毫の依頼が殺到したという。

曹洞宗は、毎日、観音経を読み、大悲心陀羅尼を読み、僧堂のうち衆寮には観音さまを安置し、十八日には観音懺法を修行する。さながら観音宗のおもむきなしとはしない。

さて、また、昭和五十八年、涅槃会の二月十五日、百九歳の清水寺貫主大西良慶和上は遷化された。明治、大正、昭和にわたる日本仏教の至宝であり、清水寺の中興の祖である。

葬儀の導師は、ときの大本山永平寺貫首秦慧玉禅師であった。他宗の管長さまの葬儀をつとめるとは、異例中の異例であろう。

瑩山三代と仏縁しるした巨碑が清水寺内に建立

前後するが、瑩山、その祖母と母の三代と清水の観音さまとの仏縁をしるした石碑が、十一重石塔のもとに建てられた。優雅な重厚感にみちた巨碑である。横浜市、曹洞宗・善光寺の寺族・黒田倫子夫人の発願である。婦人は、太祖とおなじ越前の出身である。十一月十五日、その除幕式が行なわれた。もとより清水寺当局の破格の理解と英断による。

平成十二年は、清水寺秘仏が三十三年に一度のご開帳されたとしであった。これよりさき、平成六年、清水寺はユネスコの世界遺産に登録された。

平成十二年は、道元生誕八〇〇年、平成十四年は道元七五〇回大遠忌のとしである。このときにあたり、あらためて清水の観音さまとわが曹洞宗との永く深いえにしをふりかえり、新しい建碑の意義をかみしめることは、まさに難値難遇の勝縁というべきであろう。

東（あずま）　隆眞（りゅうしん）　昭和十年、京都府生まれ。同二十八年、阿波（徳島県）の曹洞宗城満寺で出家得度し、總持寺僧堂に掛錫。駒澤大学仏教学部禅学科を卒業後同大学院修士課程終了。現在、駒沢女子大学学長、日本文化研究所長。文学博士。著書に『道元小事典』『太祖瑩山禅師』『禅と女性たち』などがある。

除幕式に出席して

東郷敏

成寿32号に、「京都清水寺瑩山禅師さまへの報恩顕彰の碑、発願者黒田倫子夫人」

この記事を観て私は思ったのです。なんでまた京都清水寺でなければならないのか、どういう意味なのか、突拍子もない発願。（お断りしておきます、私の表現は拙く不遜。）

それにしても千三百年の名刹、清水の舞台にそんなことが簡単に許されるものなのか。環境は世界文化遺産、国宝、重文オンパレードの地、景観を損ってはならない国の宝。しかも横浜善光寺ひとり発願そんなことが叶えられるものなのか、たとえば、わが庭に余所の碑が建つようなもの。方丈さまはいつでも桁外れ、これまで途轍もないことに驚かされている。少々のことには馴れっこになっているつもりだが何か違う。段々と拝見して参りますと、ようやく納得。時

代は八〇〇年前にさかのぼる、曹洞宗高祖道元禅師さま、太祖瑩山禅師さまが、清水寺の観音さまを篤くご信仰なされ、深い深いご因縁のあることを承知する。しかしまたなぜ倫子夫人の発願発想であり、夫人が私財を投じてまで建立せねばならぬのか、これもわかりにくい。その意味するところは、駒沢女子大学東学長も詳しく述べていられるが、のちお尋ねし此処に至った動機と経緯を承るとき、一朝一夕のものでないことがようやくわかる。

ときあたかも開祖ご生誕八〇〇年、没後七五〇年の大遠忌を期に、また世紀的にも、二〇〇一年という大きな節目、理法に従い縁りて起った因縁なのか夫人が無心にして発願。それに相応するかの様に事は諄々と不思議もなく実現してしまった、単に思いつきではなく実に久しい間の悲願、実に禅語に謂う、啐啄の妙、「啐啄同時」のタイミング。歴史的瞬間のときである。全山紅葉に燃える清水の舞台、私はこの世紀的瑩山禅師さま顕彰の碑、除幕の様子を、心ならずもご出席できなかった横浜善光寺檀信徒ご関係者の皆様に具に伝えたく書かせていただく。

この碑の建立は、ただ単に顕彰し、建立したということではない、世界観に立脚する黒田方丈夫人が是非も建立せざるを得なかった御信条を知るとき、知ると知らないでは天地ほどの相違あることに心底気づかせていただいた。発願し、ここに至るまでの過程は並のご苦労ではなかった。まさに道元さまの「仏道をならふというは、自己をならふなり、自己をならふというは自己をわするるなり」の教えに従っている。自己犠牲によって実現したこの報恩行。夫人は謂う、

「私は北陸越前の地に生をうけ、生まれながらに仏道にご縁を深くした。とりわけ瑩山禅師さ

まと、同じ景色、同じ環境、同じ空気のなかに生かされてきたこと、まことにありがたく感じ入っております。かねてよりコツコツと用意させていただいた資財によって、瑩山禅師さまと、清水の観音さまとの、えにしを印した顕彰の碑を建立し、報恩のまことが捧げ得られるならこれ以上の至福はなく、捧げても捧げても捧げ足りぬ気持で、檀信徒の皆様ともどもに仏法への、ご縁をさらに深くしたいと念願しています。」まことこの碑に懸ける夫人のご信念を伺い知ることができました。

ささやかなひとりの発願は、大きなうねりとなり、除幕の式で沸騰、思いもかけない、曹洞と清水の絆を一気に引き寄せ、強固にしてしまいました。み仏さまと、観音さまのなさることはまことに美しい。ご臨席の方々は実に多様、京都府下寺院四百カ寺を代表する宗務所長をはじめ、各宗派代々お歴々、曹洞宗檀信徒を代表する田中慶秋衆議院議員、また宗界各報道機関数十社がこの慶事を取材しようと詰めかけている。その賑わいのなかに、清水寺森清範猊下とご関係者、曹洞宗大本山總持寺板橋興宗猊下並びに全国曹洞宗各ご代表、さらには横浜善光寺檀信徒各ご代表など約百名のご列席のもと、板橋猊下ご親修による、大読経と共に音羽の山に顕彰の幕は美事開かれ、三重の塔を背に瑩山禅師さまのご遺徳を偲ぶことができました。これよりいく世紀にも亘り、両宗派の絆は固く結ばれ、大勢の人たちに影響を与えるであろう印として建ちつづけてゆくことになりましょう。

そのことは両猊下の祝辞にも表わされ、大僧正森猊下は、「錦秋の清水寺に、瑩山禅師さま顕彰の碑を建立されたこと、まことにめでたい。本日は施主の黒田さまとご関係者のご臨席のもと、ほんとうに大勢の方々がご随喜賜わりあり

がたい。瑩山禅師さまと清水の観音さまとのご縁は夙に深く、それを銘記するこの碑の建立は、曹洞宗と清水寺のえにしをさらに深く篤くする表徴である。」とのお祝辞。

また板橋猊下は、「天下の名刹音羽山清水寺で、わが宗門と深いご縁で結ばれたことは、宗門にとってまことによろこばしい。此処に至るまで、清水寺貫主森猊下のご理解と、施主並びに横浜善光寺檀信徒の皆様に深く感謝の念申し上げたい。殊に黒田住職夫人には感謝一杯。全国より馳せ参じたわが宗門とご参詣いただいた方々にも深く感謝したい。合わせてこれから、わが宗門と清水寺さまの隆昌と繁栄を祈念する。」

両宗猊下のおことばは、異口にして同音、瑩山禅師さまのお徳を偲びつつ、両宗の固い絆を結び直し、永遠の契りを確認することとなりました。

清水のご詠歌『松風や音羽の滝の清水を結ぶ心は涼しかるらん』西国三十三ケ所巡り、第十六番札所、その真ん中にしてバランスの要所、清水の観音さまと親しまれ、門前町は四季も折々大賑わい。人の波は吸い込まれるように流れつく観音さまのお膝許。変幻自在、救いを求める人々を願いに応じて救うてくださる。まことに慈母慈愛の象徴。道元禅師さまの謂う「自未得度先度他の心」倫子夫人もまたこのご威光に導かれ、四枚の般若・薩埵の行願ここに成就。道元さまの詠う、『春は花　夏ほととぎす秋は月　冬雪冴えて涼しかるらん』なぜか清水のご詠歌と音色が類似するいかにもトーンオン・トーン。

式もたけなわ緊張の中にも安堵の色、倫子夫人の謝辞は続く。「こん年は道元禅師さまご生誕祭に続き、大回忌祀の重なる大事に合わせて清水寺さまの破格のご厚意により念願叶い、本日はまた両猊下さまのご臨席のもと、まことに盛大且つ賑々しく除幕の式執り行うことができま

したことは、私にとって生涯忘れ得ぬ尊きこと、身に余る、否身に余り過ぎる光栄を感じています。いまは唯々、生まれて来てよかったとそのよろこびと感謝の念に浸っております。」と頬も紅潮。

いよいよ式典もエピローグ。しかしながらここで終らないのが横浜善光寺の流儀。

女房倫子の挨拶に足りぬところ、一言ふたこと、みこと御礼のことば重ねたいとの黒田武志方丈。「大本山清水寺大僧正猊下並びに、曹洞宗大本山總持寺板橋猊下のご臨席を賜わり、本当にありがたく、述べて尽して心より厚く御礼を申し上げます。また建立に多大のお力添えをいただいた駒沢女子大学東隆眞学長に深い感謝を申し上げたい。学長は本日公務多忙につきご出席叶わず、その代理としてご子息ご長男がご出席下さいました。堂々たる男ぶり本日の顕彰碑除幕、まこと空は遠く澄み雲一点もない、全山紅葉に染まり絵にも言えぬ美しき清水の舞台、身に余る光栄とは申せ、処は世界文化遺産の景勝と名所清水寺の一等地、出過ぎた感が致します。その上碑があまりに大きすぎて、当寺宗務部長さんもはじめは驚いておいででした。私は『瑩山禅師さまのご遺徳、いまは大きくても、やがて周りの樹が大きくなれば、小さくなります』と申し上げました。そんなことで心よくお許しいただきました。遠く八〇〇年の昔曹洞宗ご開創のころ道元さま、瑩山さまも、きっと親しくこの地観音さまにお参りなさったであろうことを思い偲ぶとき、まことに感無量。殊に瑩山さまは、観音さまの影響を受けられたのでしょうか『女性を大事にしろ、尊くして敬いなされ』と仰せでした。さらには檀信徒の方々を大事にしろとの教え、これは即観自在・観世音・観音さまと同意。私の女房倫子が執着したのもお解りいただけることと思います。これからは女性

の時代、それだけに、この碑は二十一世紀にふさわしい慈愛の象徴、まことにありがたいことです。ここ清水寺は、京都で唯一、朝六時開門、夕方六時に閉門、これは清水さんだけの特権。世界中の旅人が京都に居て、どこにも行けない、そんなとき期せずして『清水に行こう』となる。年間平常参拝者は七、八〇〇万人にもなる名刹、世界のため、日本のためいよいよ清水の観音信仰のお力が、世界平和に大いなる影響を及ぼすとき、曹洞宗もこのお徳に肖り、お釈迦さま、観音さまに感謝申し上げて、また歴代祖師方に厚く厚く御礼と感謝の誠を捧げつつ私も仏道に身を尽くし、限り尽くして精進したいと誓っております。」と黒田方丈らしい精一杯のご挨拶。かくして顕彰除幕の式は無事終了した。

――あとがき――

清水寺の境内は広大、私に観光案内をするつもりはありません。しかしいったい清水寺のどの位置に顕彰の碑が建立されているのかのちのちご参詣なさる御方のためにと思いつ、チョッとだけです。

清水寺は「古都京都文化財」の要。東山添いを歩いていると、どの道のぼっても、行き着くところは清水寺。清水の舞台は一三九本の束柱に支えられ組み上げられている舞台造りの代表。「清水の舞台からとび下りる」はあまりに有名。現在の本堂は三代将軍家光公によって再建されたという、建物全体が国宝。ご本尊は、十一面観世音菩薩。創建は七八二年というからおよそ千三百年の歴史をもつ。参詣には、五条坂、清水坂、八坂道、二年坂、三年坂、ま坂とお思いでしょうがどの道通っても門前で合流する。

門前町の坂を上りつめると、仁王門、その右に八脚朱塗りの西門、左前に馬駐や鐘楼があり、さらに入口左側第一番目の辻堂に標札、「清水善

光寺」という建屋。なぜ清水寺の境内に善光寺なのか、伺っていない。その昔、もしもお参り微(すくな)きとき、牛の鼻でも借りたいとの観音さまの手立てだったのか、承知していない。ただそこに善光寺があるだけで、私にとっては横浜善光寺と直結されるから不思議でない。入口正面左側に清水善光寺。右側入口に横浜善光寺瑩山禅師さま顕彰の碑。これでは手前味噌。さて正門を入ると三重の塔、進むに従い経堂をはじめ多くの堂が並ぶ。さらには奥の院まで十五棟の伽藍・堂が並びそのすべては、国宝であったり、重文の文化財。本堂より舞台を抜け仁王門前より右へ回ると、三筋で名高い音羽の滝に出る、さらに舞台を見上げながら三重の塔を真上にのぞむところに茶店があり、ここで一服する、その真前に十一重石塔がそびえ立つ。道を挟んで右側は池、この石塔の真下が顕彰の碑建立の地であります。

さて式典が終って一週間ののち、突然方丈ご夫妻が京都に舞い戻って来られた。私は地元、京都の隣・高槻に住む。連絡を受け、女房は御髪の手入れもままならぬ侭にご夫妻を出迎え、案内役を買って出る。用向きは清水寺に御礼詣りにとのこと、到着は昼下がり、さてまずは何処にと伺えば、指示は名刹建仁寺。しかし私は全く知らない。かつて道元禅師さまが、中国天童山より帰国して間もなく此処建仁寺に過ごしたという由緒ある寺らしい。さらには瑩山禅師さまも過し、この地ではじめてお茶を日本に広められた有名な寺だという。周りは茶の原木に敷きつめられ、さながら茶園の中のお寺。瑩山禅師さまを偲んでお茶発祥の地なる顕彰の碑が建っていた。当然にして国宝重文の文化財に埋もれた国の史跡、名勝の庭園に坐して過ごす。夕方六時ようやく清水寺へとのぼった。お礼参りにしては悠長すぎている。六時は閉門のはず、

ところが参道門前は数百㍍に亘り人垣がつづく、おそらく数千名の人たちが手に手に入場券をもって震えながら佇んでいる。この時期、夜の紅葉と、月の庭などで有名な成就院庭園の特別公開がなされていることを方丈夫妻は知っていた。地元の私は全く知らないでいる。参道に待つこと三十分、ようやく人並が揺れ動き出し押しつ押されつ十五分。成就院の庭園にたどり着く。私は尋ねてみる。「方丈いったい猊下さまへの御礼詣りはどの様に」と。方丈は謂う、「此処に坐していることが、私の感謝報恩の在り方」。冷えびえとした月の庭園に過すこと二時間、私の趣味を越え忍耐と我慢の観賞をさせていただました。ようやく坐を移し建立したばかりの夜の顕彰の碑を拝しながら読経合掌低頭して山をくだる。「あらためて参ります」とひとりごとを呟きながら山を仰いでいる方丈、やはり私は仙人とは過ごしにくい。さて山を下りるとあわただしい、どうしても最終列車にと、21時33分発のぞみ98号鴨の背中に飛び乗って、ピューと方丈夫妻は東の彼方へと消えてしまわれた。風か嵐か知らねども。

京都に僅か数時間の滞在ながら精一杯、道元禅師さま、瑩山禅師さまに思いを致し、清水寺大僧正猊下さまへの御礼と報恩の旅、さぞかし、倫子夫人もお疲れになったことであろう。私も疲れました。方丈さまおひとり、なぜか、益々盛ん。やはり並のお方ではないことをいやという程知らされました。私の躰はつめたく冷えきっているのに方丈のお顔は紅潮しほてほてと蒸気を発している、いかにも機関車だ!! ひとときながらいい勉強をさせていただきました。ありがとうございます。

特集□瑩山禅師顕彰碑建立

それぞれの夢と思いのインタビュー

――成就院で行われた喜びの席から――

さまざまな経緯を経て「瑩山禅師の碑」は建立され、無事除幕式を終えました。

折から、米国中枢同時テロやパレスチナ紛争の激化など、宗教に起因する事態に世界は揺れ、また、急激な生命科学（クローン問題）や情報技術（ＩＴ）の進展により、グローバリゼーションの下、宗教に突きつけられた課題は少なくありません。こうした時代に宗派を超えてつくられた顕彰碑の意味には図り知れない重さがあります。そして、この顕彰碑はこれから善光寺の檀信徒だけでなく、曹洞宗の、また、清水にお参りに足を運ぶ多くの人々の心のよりどころとして、永遠にその役割を担って行くことになるでしょう。

ここでは除幕式の後に行なわれた祝宴の中から、ご挨拶やインタビューを通じて、顕彰碑に対するみなさまのさまざまな思いを伺ってみました。

これからの精進努力を胸に

発願主黒田倫子夫人

私は、寺に生まれ育ち仏飯を頂いて日々幸せに生かさせて頂いておりますので、何か感謝報恩の気持ちを表現出来ることがあればと常々考えておりましたところ、たまたま「こんなことはどうか（顕彰碑建立）」と、東先生からのお言葉をいただいたものですから、出過ぎたことだとは思ったのですが、今日の日を迎えることになりました。お声をかけて下さいました東学長先生には本当に感謝しております。

（除幕式では）謝辞を述べるようにと言われ、方丈には「唯々ありがとうございます」って言えばいいって言われたものですから、そのつもりでおりましたけれど、昨夜「それだけでは、申し訳ないかな」と思ったりして、目が冴えて眠れなかったんです。もともと無口で口べた、かなりそれらしく「何にも言わないほうがいいかな」と思って簡単にさせていただきました。

最高のお天気に恵まれ、その上両猊下にご臨席を賜わり、ほんとうに身に余る光栄です。分不相応なことで。ありがたく感じております。

刻まれた名前が永遠に残ると思うと身が引き締まる思いで、これから精進努力が必要だなと自分に言い聞かせております。

あの場所はまた特別なところ、最高です。写真を撮っても最高です。顕彰碑の後ろに三重の塔がありますし、四季折々美しく、殊に、春には桜の見事さは表現できぬ程でございます。

立地に当たり執事長さんにいい場所を何カ所かご案内いただいたんです。五カ所か六カ所ご案内いただいて、ぐるーっと回って最後にここはどうですかとおっしゃったんですね。あーここがということで、決まりました。いい場所を

快く提供していただいた清水寺さんにはほんとうに感謝の気持ちで一杯です。

私の大学生活も京都でしたから、この京都という場所はとても縁の深いところでございます。お檀家のみなさまも京都に来る楽しみが一つ増えたと言ってくださったので、ホッとしました。

ありがとうございました。

蒔かれた種は必ず実を結ぶ

北法相宗大本山清水寺貫主

森清範大僧正猊下

瑩山禅師様のご縁が、今日、一つのカタチとして当山に除幕されましたことは、ほんとうにありがたいご縁です。もちろん目には見えないんですけれども、縁というものの種は必ず実が成ると、なくならない。三百年、四百年、七百年、八百年であったとしても、そのときに蒔かれた種は必ず花咲く時がある。それが今日、こうして関係者の方々が集まって、黒田様によって花開く。ほんとうにありがたいことです。今度はまた、これをご縁に我々が次にまた新しい種を蒔いて、いい結果を出せるように精進させていただきたい。

南苑の浄域に建てていただいたことはほんとうにありがたいことです。(碑が大きすぎるのではという話がでましたけれども) 決して大きいことはありません。ちょうどいい大きさです。これをご縁にますます曹洞宗の方々とあるいはご施主くださいました善光寺様のご縁ができます。ありがとうございます。

日本の文化を象徴するもの

曹洞宗大本山總持寺貫首

板橋興宗大禅師猊下

世の中いろいろお金持ちのお寺もありますし、いろいろな事業をなさっている人もいますけど

もね、やはり外国からの留学生たちに、資金を援助したり、留学僧育英資金とか、そういう事業にお金を捧げる、情熱を捧げる、（善光寺さんの）その精神は他に類を見ないんじゃないんですか。敬服します。

ご依頼いただいたので筆をとりましたがまさかあんなにりっぱなものができるとは思いませんでした。

今、宗教が戦争の紛争の種になっているでしょう。各宗地域紛争の底には、文化の違い、民族の違いがあって、その底に宗教が流れているんです。ところが、日本は神道があって、八百万の神があって、万（よろず）の仏さんがもう渾然としてますね。それが日本の宗教の特色です。

我々の心の中に八百万の神、八百万の仏様がいつでもいっしょになっているのではないですか。これが日本のすばらしさだと思いますよ。日本中、至るところ、緑したたる、自然に溶け込む宗教が必然的に生まれるんですね。だから宗教も縄張り根性ださないですね。日本の場合、お宮さんもいっしょでしょう。仏教は後から来たんですから。それがみんな融合してしまうのです。私はそこが日本の文化と宗教の特色だと思うんです。これは今後、見直されますよ。

曹洞宗とか北法相宗の教え云々でなく…。今日はその一つの象徴ですね。他だったらそちらの宗派とこちらの宗派は結婚もできないではないですか。その辺が日本の緑したたる自然に融合している文化、風土に育まれた宗教であり、文化だと私は思います。

地元関西地区を代表して
曹洞宗京都府宗務所長村上俊鳳老師のご祝辞

私ごときがご祝辞を申し上げるのはおこがましいことでございますが、地元なるが故にということで、管内の寺院を代表いたしまして、お

祝いを申し上げたいと思います。

本日は善光寺様のご発願によります瑩山禅師様にご縁の顕彰碑が除幕されまして、ほんとうにおめでとうございます。尚、本日は清水寺の貫主森猊下、並びに總持寺貫首板橋大禅師猊下ご臨席のもとに開眼除幕の法要が営まれたことはほんとうにおめでたいことでございまして、名刹清水寺とご本山總持寺様との深いえにしが再びここに結ばれまして、そして清水寺で今日のような盛大な除幕が行なわれましたということは地元といたしましても光栄に存じます。

私たち、ご本山とのご関係は、もっと遠いところにあった感じが致したわけでございますが、この京都府の清水様に瑩山禅師様のご縁があったということも改めて認識いたしまして、今後宗務所管内四百か寺の檀信徒のみなさま方、また、管区のセンター統監老師もおいでございますが、これを契機と致しまして、たくさんの檀信徒の方にご参詣していただきまして、さらに深い縁を結ばせていただきたいと思います。

特に板橋猊下におかれましては、本年は四月に舞鶴の桂林寺さま、そして今月の三日、四日とお弟子さんがご晋山をなさいました二十三教区八坂町にもご臨席を賜ったわけでございますが、また、今回こうして大禅師猊下にはお出ましをいただき、三回も京都にお出向きなられましたことは、たいへんありがたいことで、これを機にますます大禅師様が京都にお足を運びになられますことを、我々もお願いいたします。そして清水さんと曹洞宗とのよりいっそうの絆、関係が密接になっていきまして、この顕彰碑の意味を知っていただくことが大切だと思うもの

であります。ほんとうに本日は発願なさいました善光寺のご内室並びにご方丈様ありがとうございます。今後ともひとつ関西管内につきましてよろしくご法愛をいただきたいと思います。ありがとうございました。

大本山總持寺全国嶽山会会長
横浜西有寺横山敏明老師のご祝辞

ほんとうに秋晴れの下で、瑩山禅師の顕彰碑の除幕式にお招きいただいたことに心から感謝いたしております。

そして、先程来、森猊下、板橋猊下、黒田夫人、黒田住職の言葉にあったように、ここに集う私ども、また、すべてが観音様のお導きがあったということを深く肝に銘じております。この縁、この集まり、そして、この日というものを大事にしまして、さらなる発展を念じて参りたいと思います。

本日はほんとうにおめでとうございました。

善光寺檀家を代表してご挨拶
檀家総代熊谷豊太郎様

本日の瑩山禅師報恩顕彰碑除幕式には光栄にも北法相宗森大僧正猊下、並びに曹洞宗大本山總持寺板橋貫首猊下にご臨席賜りまして、また、本日は曹洞宗永平寺並びに總持寺関係者のみなさま並びに衆議院議員田中慶秋先生をはじめとして、大勢のご来賓のみなさまにお出でいただき、またたいへんご多忙の所、遠方からご参加いただきまして、感激をもって厚く御礼申しあげる次第でございます。

顕彰碑につきましては、曹洞宗との清水寺との仏縁がいろいろ深うございまして、三代にわ

たって観音様のお恵みをいただきました。瑩山禅師さまも同郷であります発願主は観音様のお恵みに対して報恩の誠を捧げたいとの思いで発願したわけでございます。建立に際しましては、清水寺の格別のご理解とご高配をいただき、また、大本山總持寺のご庇護もあり、さらに駒沢女子大学学長東隆眞先生のりっぱな献文も頂戴し、世界遺産の清水寺に立派に完成させていただきましたことは、善光寺と、私ども檀信徒三千五百軒、さらには善光寺育英会、海外留学僧百余名の心と気持ちを込めまして厚く感謝し御礼申し上げる次第でございます。また、念願叶い、今日この音羽の風に吹かれる青空の下、滞りなく除幕を垂れましてくださいました発願主黒田倫子夫人並びに善光寺の黒田武志住職に対し檀信徒を代表して心よりお祝いを申します。

今日の建立により清水寺観音様と曹洞宗門並びに横浜善光寺の仏縁もいよいよ深まりますことはなによりの喜びでございます。今、騒がしい時代でございますが、観音様の大きな慈悲を頂戴すれば現世安穏の合一をいただけるのではないかと思いまして、それもお願いしながら、簡単ではございますが、私の御祝いの言葉にかえさせていただきます。ありがとうございました。

来賓であり曹洞宗檀信徒の代表として
衆議院議員田中慶秋様のご祝辞

高い所から失礼いたします。本日はこの清水さんの一角にすばらしい顕彰碑が建立されましたことを心からお祝い申し上げます。また、こうして観音様のご縁で森猊下をはじめ、板橋猊下ともども同席できます慶び、これも観音様のお導きの賜物と深く感謝を申し上げたいと存じます。

今日は天気もよく、この京都のまちの隅々ま

で見下ろすようなすばらしい場所に建立されたわけでありますけれど、私も善光寺さんの檀家のひとりとして日頃お世話になっておりますし、黒田夫妻は先ほどのご挨拶にもありましたけれど、生涯の思い出として慶びを二人で分かちあって、これからは奥様を大切にするということのお誓いをなされたもので、おそらく善光寺様をはじめとする宗門のみなさまがご繁栄されるものと信じています。

この建立碑が曹洞宗並びに清水さんとより深い、ますますのご縁とともにご発展されますことを心から祈念申し上げ、お祝いのご挨拶に代えさせていただきます。

「当山としても嬉しいことです」

清水寺執事長大西真興様

木は時間が経てば腐りますけど、こういう石は何百年も何千年も不変です。ということは永久に残ることですし、總持寺様にとっては非常に歴史的な意義のあることになります。ですからそれは、清水寺だけの納得ではなくて、曹洞宗様、また總持寺様のご納得いただける場所に作りませんと、何百年、清水がつまらないところを指示したということになります。そういう意味でも、清水として可能な限りの場所をご提示して、そこで善光寺様に選んでいただいたのでございます。

境内は見栄えの問題もありますし、いろいろございますが、全体のバランスもありますので、その（石碑建立の）ご希望をみな受けるということは不可能なんです。木のものは何百年か経つとなくなりますが、石はなくならないんですよ。ですから、基本的には石のものは原則とし

て受けないことなっているんです。今回は、そういうご縁の下で例外中の、例外ということでうちの管長が決断しました。

もちろん知っている人は知っていますけれども、これを縁に、多くの方がご宗派とのご縁を、また深くしていただいて、清水寺に、お観音様にお参りいただくことになれば、当山にとりましてもそれはたいへんな喜びでありますし、ご縁が深まるということはありがたいことだと存じております。そう、どこのお寺でもそうでしょうけれど、やはりご本堂様にお参りがたくさんあるということは、お守りさせて、お給仕させていただく者とすれば嬉しいことですから。

埼玉県能仁寺萩野映明老師の乾杯のご発声

ご指名をいただきまして恐縮でございます。私は黒田老師とは私的な付き合いです。曹洞宗の中でも最も敬意を表する方です。奥様の倫子さんもすごいパワーですね。驚きました。碑が大きすぎるような感じもしましたけれど、それは私の勝手な感想かも知れません。ほんとうに清水さんご迷惑をおかけしました。（笑）

ほんとうに素晴らしい。今まで観光でしかお参りしなかった清水さんですが、この建立によりわが宗とのご縁で非常に身近に感じまして、お参りに気持ちが入ります。

清水さん、大本山總持寺さんのいやさかを祈念し、またみなさま方のご健康を祝しまして、乾杯！

黒田老師実兄、光真寺の黒田俊雄老師中締めのご挨拶

瑩山禅師にまつわる観音碑の建立ができましたことを、縁につながるものとして、心から御礼を申し上げる次第でございます。また、板橋猊下にはこちらに御出でを賜りましたことに関しまして、特に御礼を申し述べさせていただく次第です。

おかげさまで、両大猊下の下に無事、観音碑の建立ができましたことを心から御礼を申し上げる次第でございます。

ここの先住さんである大西良慶師は非常にご立派な人格者であると同時に、世界の和平に関して、お互いに手を繋いでいかなくてはいけないとお考えになり、世界宗教者会議などにも深くご理解をいただいておりました。今般、森猊下にはこのような温かいご配慮をいただきまして、この顕彰碑の建立ができましたことを心から喜び、これをご縁に、限りなく、世界平和のために心を尽くさなければならないのではないかと思いをさせていただいております。

今、世界はアフガンの問題に見られますように、宗教に起因する戦争が云々されておりますが、それはやはり、我々宗教者同志が方向を共有し真理をしっかりとわきまえて宗教の和を大事にさせていただく、ということを思いますとき、やはりこういうご縁を頂戴させていただいたことに大きな意義を感ずる次第でございます。

このたびの顕彰碑建立につきましては、心から感銘をし、森猊下並びに板橋猊下のこのご慈慮に対し、厚く御礼を申し上げますとともに、観音様のお力をいただいて世界の宗教がお互いに手を結ぶような何か一つの糸口にさせていただければ、こんなありがたいことはないと思うわけでございます。ここにご来会のみなさま方

に対しまして心から御礼を申し上げまして、挨拶にかえさせていただきます。

ありがとうございました。

「心が洗われたような気がします」

善光寺檀信徒伊藤初枝様

もう、「ほんとうにすばらしかった」のひと言ですけれども、なんとも心が洗われました。やはり宗教は、とり違えたり、履き違えると混乱と問題を起こします。今世の中でなんというか履き違えによって、そういう争いがありますでしょう。だけど、ここへ来て、それが絶対にいけないことなんだということを特に感じました。こうでなくてはいけない。

今この時期ですから、なおさら感じました。

私自身も心を洗われました、今日は。おかげさまで。善光寺檀信徒の一人として改めて方丈さんご夫婦の立派さを再認識いたしました。こんなにもいいことをなさっていただいて、檀信徒の私どもの誇りでありほんとうに嬉しゅうございます。

清水寺

音羽山清水寺は、奈良時代の末、宝亀9年（778）、奈良子島寺の延鎮上人が霊夢をうけ、音羽山麓の滝のほとりに草庵をむすんで、霊木から彫作した千手観音像を祀ったことが起源とされます。金色水とも延命水ともよばれる音羽の滝に因んで「清水寺」の名がつけられました。

宗派は、北法相宗（きたほっそうしゅう）で、単立の一寺一宗です。

法相宗は、唯識（ゆいしき）宗ともいって、四～五世紀のインドの仏教学者、弥勒（みろく）・無着・世親が開立した瑜伽（ゆが）派の教理を戒賢論師らが整理し、それを学んだ中国・唐の玄奘三蔵の弟子、慈恩大師が『成（じょう）唯識論』を基礎として開宗したものです。

日本では奈良時代に唐に留学した奈良・元興寺の道昭が初めて伝え（南寺の伝）、さらに興福寺の玄昉もこれに続きました（北寺の伝）。開創以来、清水寺は北伝の法相宗を伝統してきましたが、1965年「北法相宗」として独立。「北」には、北寺の伝

に立脚するとともに、南都・奈良に対して北の京都に立地するという意味も込められています。

宗旨は、「万法唯識」「三界唯一心。心のほかに別の法はなく、心と仏および衆生、この三つは差別なし」、即ち、あらゆる現象(相)は唯(ただ)人間の心のはたらきの反映であるとしています。

西国三十三所観音霊場「第十六番」でもある清水寺は1994年ユネスコから世界遺産に指定されました。

本尊は十一面(四十二臂)千手観音で本堂内々陣の厨子(国宝)内に秘仏として祀られています。そのために、厨子前に本尊の姿を写したお前立ち仏像を安置しています。一般の四十臂千手観音とは違って二臂多く、その最上の左右二臂を頭上高く挙げて小如来像を捧戴する「清水型」観音と呼ばれる独特の姿が特徴です。また、地蔵菩薩・毘沙門天を両脇侍として左右厨子内に従え、二十八部衆・風神・雷神を眷族(けんぞく、従者)としています。

清水寺略年表

年号	西暦	内　　容
宝亀9	778	大和子島寺の賢心、寺を創建。
宝亀11	780	坂上田村麻呂、練行中の賢心に遭い、観音に帰依して十一面千手観世音菩薩を安置。
弘仁1	810	鎮護国家の道場となり、「北観音寺」の法号を賜い、「清水寺」の額を掲げる。
承知14	847	嵯峨天皇・皇子誕生祈願により葛井親王、三重の塔を創建。
承平7	937	轟門に多聞天・持国天を奉祀する。
永延2	988	花山法皇、西国三十三所観音霊場の巡礼再興に出発(現在、清水寺は第十六番札所)
		○南都・興福寺と北嶺・延暦寺の抗争によって、興福寺の最前線に立たされ続ける。
康平6	1063	8月、火災に遭い堂宇焼失。願文は藤原明衡の起草(「清水寺縁起」を記述す)。
寛治4	1090	白河上皇・てい子内親王行幸、7日間参詣される。翌年、本堂以下全焼。
		○「今昔物語」に清水寺観音の霊験物語十話が載る。
		○藤原成通が本堂舞台の欄干上を蹴鞠で往復する。
永万1	1165	比叡山僧兵が大挙来襲、本堂以下ことごとく焼き討ちす。
承久2	1220	3月、本堂・釈迦堂・三重塔が焼失。
		○「平治物語」「平家物語」に清水寺信仰が記述される。
正元1	1259	4月、火災の為、本願堂・塔二基・中門・西門・地蔵堂・二社など焼失。
文永11	1274	12月、火災により本願堂・塔二基・大門・西門・車寄など焼失。
		○この頃、ほぼ現在に近い堂塔伽藍が出来ていた。
文明1	1469	7月、本堂・塔以下の諸堂、応仁の乱の兵火に遭い焼失。
永正14	1517	「清水寺縁起絵巻」制作さる(土佐光信画、中御門宣胤ら筆)
天文17	1548	4月、三重塔落慶供養。
天正17	1589	豊臣秀吉、寺領寄進、門前境内地子免除の朱印状を下す。
寛永6	1629	9月、本堂以下焼失、春日社・鐘楼・仁王門・馬駐ら残る。
寛永8	1631	2月、徳川家光、清水寺の再建を発願、西門・釈迦堂再建され、翌年、三重塔も再建。
寛永10	1633	11月、本堂・奥の院その他の諸堂も再建さる。
		○扁額絵馬「末吉船図」「角倉船図」ら奉納される。
寛永16	1639	成就院が再建され、庭園も修築される。
元禄4	1691	オランダ商館員ケンペル来山。
文政9	1826	シーボルト来山、岸駒「虎の図」石灯篭奉納。
明治1	1868	神仏分離令が出され鎮守の地主権現社が「地主神社」として分離独立する。
明治3	1870	寺社領上地令によって境内地が1/4(約13万㎡)に縮小される。
明治18	1885	法相宗へ復帰。
明治30	1897	本堂(舞台を含む)、特別保護建造物(国宝)に指定される。
昭和9	1934	9月、室戸台風により音羽山全山の樹木が倒れ、本堂西回廊倒壊。
昭和18	1943	成就院・庭園、名勝に指定される。
昭和25	1950	本堂舞台大修理完成。
昭和40	1965	北法相宗を立宗。大西良慶和上、初代管長に就任。
昭和62	1987	三重塔解体修理・彩色復元落慶。
平成1	1989	開創1200年記念「京都・清水寺展」全国10会場で開催。
平成4	1992	春季・夜の特別拝観を開始
平成5	1993	千日詣り・宵参り復活。
平成12	2000	経堂解体修理落慶。御本尊御開帳(3/3～12/3)。

「ほとけ」考—日本人の死者観について—

佐々木　宏　幹

一　はじめに

十年ほど前のことになるが、主婦連合会がこの国の主婦たちの意識調査を行なったことがある。そのなかに「葬祭はどの宗教によって行なうか」との質問があって、得られた回答によると約九五％が仏式によって行なっている（いた）ことが明らかになった（「主婦の意識調査」一九八〇）。

葬祭を他の宗教に依頼せず、仏教に依頼した人たちが九割を超えたからといって、ただちに日本人の九割が「仏教徒」であると短絡することはできまい。九割には及ばないにせよ、かなり多くの人びとが結婚式を神式で行なっているだろうからである。

それでは葬祭を仏教によって営んだ人たちは「仏教徒」ではないかとなると答えは決して容易ではあるまい。事は「仏教徒」の定義に関わる問題である。

いま葬祭と結婚式を例に、日本人の多くが仏教と神道の両者に関わる事実を指摘したが、重要なのは「関わり方」である。

日本人は葬祭＝仏教と結婚式＝神道のうち、どちらに永続的に関わるか、そしてどちらの行

事・儀礼により熱心かを考えると、データ的にもそれは葬祭＝仏教であるということになろう。

結婚式を神社で行なったからといって、その夫婦が永続的に神社に関わる訳ではない。

一過性という意味では病気＝病院の関係とよく似ていると言えよう。

これにたいして葬祭＝仏教の方は、一度寺と僧に死者の弔いを依頼すると、その関係は三十年、五十年と続き、地域にもよるが百年以上に及ぶことも少なくない。

かくして僧の教化力にもよるが、人びとは自分を「仏教徒」であると自覚し、寺参り、墓参りが持続するにつれて、この自覚は強化されるにいたる。生者が洗礼を受けることにより、自分はキリスト教徒であることを自覚するという「入信」の文化は、この国にはまだ十分に育っていない。

生者が「得度」（式）を受けて仏教徒になるというルールはこの国では広く一般化していないからだ。

多くの日本人は、身内に死者が出たとき、寺と僧に依頼し、葬祭を営んだことを機縁に死者も生者も「仏教徒」になるのである。

実は、葬祭は死者にたいして行なわれる得度（式）であり、「得度」の度は渡と同じでこの世（此岸）から仏の世（彼岸）に渡す（渡る）ことを意味するのである。

得度はこのように、人が仏の元に行くことであるが、日本では概して得度を生者にではなく死者に行なうという慣行をつくりだした。そして他の仏教国には見られないような「ほとけ」という観念・思想を生みだした。

二　「ほとけ」とは何か

日本で最も代表的な国語辞典とされる『広辞苑』の「ほとけ」の項を引いてみよう。そこに

は「仏（ぶつ）」の転「ほと」に「け」を付したもの、また「浮屠（ふと）家」…とあり、さらに「①悟りを得た者。仏陀。釈迦牟尼仏。」、また「④死者またはその霊。」としている（第四版）。

「ほとけ」の語源については後述するとして、ここで重要なのは「ほとけ」は一方では仏陀（悟りを得た者）、釈迦牟尼仏を意味し、他方では死者と死霊を指すという点である。

つまり「ほとけ」の概念は、仏陀釈尊と死者・死霊を含んでいる複合的な概念なのである。日本では釈尊も「ほとけ」、死者も「ほとけ」と呼んで平気でいるが、たとえば南方仏教の人たちに釈尊も死者（死霊）も等しくbuddha（仏陀）であると説明したら、彼らは一瞬言葉を失うのではあるまいか。

「ほとけ」はどうやら日本独特の仏教語であるということになろう。

この「ほとけ」をめぐって研究者たちの考え方も決して一筋縄にはいかない。

一般に仏教学者や仏教教理に関心をもつ人は「ほとけ」に「仏」を当てようとする。他方民俗学者や日本の民俗宗教を学ぶ人は「ほとけ」を「ホトケ」と表記し、専ら死者と死霊を意味するものとする。たとえば「八丁堀の旦那、川から二体のホトケが上りましたぜ」と語るときのホトケは直接仏＝覚者には結びつかない。庶民用語の「ホトケ」はこのように死者・死霊の代名詞なのである。

かくして現行の日本語HOTOKEの表記には「仏」「ほとけ」「ホトケ」の三通りがあるということになる。

これら三通りのHOTOKEの語は、現代においてはきわめて恣意的かつアトランダムに使用されている観があり、このことが場合によっては日本の仏教を分かり難くさせ、誤解を生じさせる一因にもなっている。

これら三通りの表記＝用語をどう整理したらよいか、これは大きな問題である。

ここでは短絡的との批判を怖れず、私見を述べてみよう。

有賀喜左衛門によると「仏」を「ホトケ」と呼ぶ呼び方は奈良時代中期には成立しており、のちに仏像や氏の先祖も「ホトケ」と呼ばれるにいたったという（「ホトケという言葉について―日本仏教史の一側面―」一九七四）。

仏像は別として氏の先祖を「ホトケ」と呼んだことは、仏教＝僧が先祖儀礼すなわち葬祭に古くから関与したことを意味するだろう。そして仏教の葬祭への関与が全国規模に拡ったとき、つまり江戸中期以降、「ホトケ」の語は仏教が扱わない一般の死者・死霊にも適用されるにいたったのであろう。そこで私は同じくHOTOKEと呼ばれる対象のうち教理上のHOTOKEは「仏」、「仏」と儀礼的に関係づけられない死者・死霊を「ホトケ」、そして葬祭儀礼により「仏」に結びつけられた「ホトケ」が「ほとけ」であると捉える方が、「仏」―「ほとけ」―「ホトケ」の関係がよりすっきりするのではないかと仮説してみたのである（拙著『〈ほとけ〉と力―日本仏教文化の実像―』二〇〇二）。

「ほとけ」は僧により「仏＝覚者」の性格を具えるにいたるが、「ホトケ＝死者（霊）」の性質を全く失った訳ではない。だから「ほとけ」は「仏の子」「仏弟子」などと呼ばれると同時に「先祖（霊）」「死者（霊）」などとも称される。「ほとけ」は実に「仏」と「霊」との特性を併わせもつ特異な存在である。

「ほとけ」は覚路を歩み、「仏」に接近している存在であるとともに、墓や位牌に宿る霊的存在でもある。

このように「ほとけ」は「仏」と「霊」を包みこんでいる両義的存在であるから、仏教と民

俗宗教とを見事に媒介・結合せしめえたのではないか。

三　ほとけ・ホトケの語源について

日本人はいったいいつ頃から「仏」を「ほとけ・ホトケ」と訓ずるようになったのであろうか。いろいろな説のなかで最も注目したいのは、前述の有賀の説と柳田国男の説である。有賀は柳田の説を批判して自説を展開したという経緯があるので、柳田説から始める。

柳田は仏教が好きでなかったらしい。彼の学問的姿勢には、仏教が日本に定着する以前の宗教文化こそ日本本来の宗教であると考え、意識的に仏教的要素を除外しようとしたところがあった。

「ホトケ」の語源についても柳田は、この語は仏教に由来するものではなく、死者を祭るときに用いた行器をホトギ（缶）と呼んだことに起源すると主張した（『先祖の話』定本柳田国男集第十巻）。この柳田説に疑念を抱いたのが有賀であり、彼は『後漢書』の楚王英伝の注に出てくる「浮屠仏也」や「浮図、今仏也」の記述から、「浮屠」「浮図」の語こそが「ホトケ＝仏」の語源であろうと仮説した（有賀前掲論文）。ただし彼は「浮屠（フト）・浮図（フト）」が「ホト」となったとしても「ケ」が「ホト」に付いたいきさつはなお不明であるとしている。

四　「ほとけ」と日本仏教

いずれにせよ、「ほとけ」の概念がわが国において広く庶民大衆化したという事実は、日本仏教にとって画期的な出来事であったと言えよう。

なぜならこの「ほとけ」の語によって、本来は結びつくのが難しい「仏」と「死者」とが連結し、複合化することとなったからである。「仏」は一切存在の無常・無我を説き、究極の涅槃寂

静を実現された。他方「死者」は先祖霊つまり「ほとけ」となって、恒久的な一族の守護神的な存在と化す。それは仏教学から見ると、無我と霊魂という相容れない矛盾した存在同士の野合もどきのこととされる。

ところがこの国では、僧が縁起・無自性・空を説きながら、同時に「死者＝ホトケ」を「仏」に近づけるとともに「先祖＝ほとけ」として安定させる役割を現にはたしている。

これが可能になったのは、「仏」も「死者」も等しく「ほとけ」と呼ぶことにより、矛盾するとされる両者が巧みに関係づけられたからである。

「ほとけ」の語の出現により、「霊＝ホトケ」は「ほとけ」という中間領域に位置づけられ、さらに「仏」のレベルに関係づけられるのである。「ほとけ」は「仏」と「霊」を包含するゆえに両義的であり、弾力的かつ曖昧である。

日本において外来の仏教が在来の民俗宗教と衝突・葛藤し、多量の血液を流さずに民衆化しえたのは、「ほとけ」に象徴されるように両者を媒介する中間領域が用意されたからであろう。

「仏」―「ほとけ」―「ホトケ」の連携は、実に日本仏教文化が生みだした傑作と言えるのではなかろうか。

佐々木（ささき） 宏幹（こうかん） 一九三〇年宮城県に生まれる。駒澤大学文学部を経て東京都立大学大学院博士課程修了。

専攻 文化人類学・宗教人類学。文学博士。

現在、駒澤大学名誉教授。日本宗教学会常務理事。国際宗教研究所理事。著書に『宗教人類学』（講談社）、『聖と呪力の人類学』（講談社）、『仏と霊の人類学』（春秋社）『神と仏と日本人』（吉川弘文館）『シャーマニズムの人類学』（弘文堂）ほか。

黒田武志住職に曹洞宗特別奨励賞

――「留学僧育成」で功績――

仏教学・宗学・教化学の中で大きな功績があった人へ贈られる曹洞宗特別奨励賞に昨年度、横浜・善光寺の黒田武志住職が選ばれ、十月三十一日に駒澤大学で賞状・賞金授与の伝達式が執り行なわれた。

同賞は平成元年に元駒澤大学総長の鏡島元隆先生が自らの退職金を基にした特定寄付に、宗務庁が助成を加え基金として設立された曹洞宗学振興助成会が選定する褒章。黒田住職を推薦したのは駒澤大学名誉教授の佐々木宏幹氏、鶴見大学教授の

駒澤大学松田総長から表彰を受ける黒田老師

木村清孝氏の二人で、推薦理由を、駒澤大学の松田文雄総長が概略次のように説明した。

〈横浜善光寺留学僧育英会で、十七期にわたり百二人の若き学徒を国外に派遣し、また国内に受け入れ、仏教研究・修行の機会を与えて、仏教興隆に貢献した〉〈機関誌『成寿』の発行。さらに奈良康明(駒澤大学名誉教授)・東隆眞(駒沢女子大学学長)両氏の編著『道元の二十一世紀』に黒田氏も「道元思想から見た現代社会へのアプローチ―海外留学僧派遣の意義―」と題する論文を寄せて、世界に活眼を開く人材育成こそ最も重要な課題と位置づけた。〉

祝賀会では東隆眞氏が祝辞を述べた。

その中で「鏡島先生はこの育英会を高く評価され曹洞宗奨励賞を黒田老師に受けてほしいと私的に身近な者に漏らしておられた」とのエピソードを紹介。さらに「受賞により黒田老師の偉業が国際的、宗門的に位置づけられた。檀信

徒や夫人の理解と協力の賜物で、幾多の難関を持ち前の明るさと行動力で突破された」と述べ、最初に功績を認めたのがスリランカ・サラナンダ財団で、平成十年に同国挙げて祝われたことを付言した。

最後に「日本仏教は学問的にも思想的にもトップレベルだが、その実践力とくに社会的活動は極めて低調であると指摘されてきた」として、黒田住職の受賞を「日本仏教の現代的証明になる」と讃えた。

受賞後に会場で記念撮影。左から奈良康明所長・黒田住職・松田総長・南澤道人監院

黒田住職は「人生の最高の喜びの一日」と謝意を表し、日本中を托鉢して歩いた若き日々を「その日を許されて生かされたことの恩返しをいつかさせていただきたいと、心につとめてきた」と感涙をもって回顧。同賞の賞金を「若い方の励みとして代わりに預かるだけ」と育英会に回して一人分多く採用することを約して、「世界中で勉強したいと思う方は育英会に応募していただきたい」と呼びかけた。

松田総長が推薦理由を発表

奈良康明所長のご挨拶

賞状

黒田武志殿

曹洞宗教学振興助成会は
あなたの横浜善光寺留学僧
育英会理事長としての業績が
曹洞宗教化の進展に寄与する
こと極めて顕著であると認め
茲に平成十三年度曹洞宗
特別奨励賞として賞金を贈り
これを賞します

平成十三年十月三十一日

駒澤大学総長 松田文雄

この一枚の表彰状は黒田老師だけでなく、横浜善光寺の、そして、もちろん檀信徒のみなさんの誇りです。

◎祝賀会から

御受賞おめでとう

東隆眞（駒沢女子大学学長・文学博士）

このたびの横浜善光寺留学僧育英会理事長黒田武志老師の曹洞宗特別奨励賞受賞おめでとうございます。

どのような意味において、おめでたいのかということでありますが、私は、次の三点から申しあげたいのであります。

第一は、曹洞宗特別奨励賞は、黒田老師にふさわしい賞典であります。

もともと、この曹洞宗特別奨励賞は、平成七年、五〇年に余る長きにわたって駒澤大学の教師として御指導いただいた駒澤大学第二四代総長鏡島元隆先生、先生は本年二月九日、満八八歳でご遷化になりましたが、退職金の金額および曹洞宗からの助成などを合わせた六千万円を宗門、学界に寄附されたものによって成り立っているとうかがっているのであります。それは、ひとえに人材の育成、後進の育成を願ってのことであろうと察しております。

横浜善光寺留学僧育英会は、昭和五九年、善光寺開創一五周年記念事業の一つとしてつくられ、黒田老師が知事長となり、ここにいらっしゃいます奈良康明先生、そして私はその末席をけがして理事として今日に至っております。この育英会は、要するに、規約の第二章第三条にかかげてありますが、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与しうる有為の人材を育成することを目的とするのであります。

鏡島先生は、昭和五九年の創立頭初から、育英会の顧問として御指導、御協力を注いできております。鏡島先生は、この育英会を高く評価されまして、実は曹洞宗特別奨励賞を黒田老師が受けてほしいということを、身近かな者にも

洩らしておられたのであります。鏡島先生は、昭和六一年四月、駒澤大学総長に就任されるまでの五年間にわたって駒澤大学茶道部の部長をつとめられました。黒田老師も駒澤大学茶道部一服会に在籍し、一五年間にもわたって、その会長をつとめていました。

こうして、鏡島先生と黒田老師とは駒澤大学茶道部の部長として会長として名コンビよろしく人事の配置の妙をえて、その発展と興隆に資するところがあったのであります。

第二に、このたびの受賞によって黒田老師の偉業というか苦労というか、宗門的に位置づけられたことを、私はよろこぶものであります。

横浜善光寺留学僧育英会は黒田老師の若いころの修行、修学の辛苦の体験が基因となって発案されましたが、これを倫子夫人と檀信徒の皆さま方の御理解、御協力を得て、今日に至っております。一個人というか一か寺というか、単独のお仕事であります。一七年経った今日では採用総数一〇二件、関係国二〇か国一地域になりましたが、もちろん、ここに至るまでにはたいへんなご苦労があったことを、私は承知しておるのでありますが、黒田老師はもちまえの行動力と慎重な周囲への配慮をめぐらし、幾多の難関を突破し、今日に至ったのであります。これをまず認めていただいたのは仏教国スリランカの政府公認の慈善団体サラナンダ財団であり

ご祝辞を述べられる東先生

ます。育英会の事業を高く評価して栄誉を賞し、ダルマ　ケールティ　スリ　ローカルタ　チャリエ（仏教の発展に寄与し世界人類の幸福と繁栄に尽す）という称号を与えられました。平成一〇年、スリランカ国をあげてのお祝いでありました。そして、その翌年、曹洞宗管長は、賞状と安陀衣一肩をおくり、これをたたえたのであります。

そして、このたびの受賞であります。駒澤大学松田文雄総長は「曹洞宗特別奨励賞は曹洞宗のノーベル賞だ」とおっしゃったと洩れ聞いております。

この度の受賞でそのご苦労が報いられたのは黒田老師の倫子夫人であり、また黒田住職を信頼して全面的に協力してきたことが、それが客観的にも間違いではなかったとよろこんで下さっている善光寺の檀徒の皆さまがたであります。

第三に、日本仏教は、学問的、思想的には世

席上謝辞を述べる黒田老師

界のトップ・レベルをゆくけれども、その実践力とくに社会的活動においては極めて低調であると指摘されていると思われるのでありますが、このような避難、批判をはねかえす証明が、黒田老師の育英事業であり、このたびの受賞であります。私どもの宗門にはシャンティ国際ボランティア会や長野県藤本幸邦老師のいわゆる里親運動をはじめ、いくつかの社会的、現代的、国際的活動や活動体がありますが、人材育成という地味で息の長い事業に黒田老師はとりくんでおります。これは宗門の誇りであり、日本仏教が現代に存在している証明であります。このことが、このたびの受賞によって一層明らかになりました。

黒田老師の育英事業に注目し、人材育成や学術研究の助成を実行していらっしゃる寺院が東京にあります。とてもすばらしいことだとおもいます。このような菩薩の誓願に燃える仏教寺院が、これからも陸続と登場することを願うものであります。

以上、とりいそぎ三点から、黒田老師曹洞宗特別奨励賞受賞をおよろこびしたいのであります。

黒田老師のますますの御健勝と育英会の限りない発展をお祈りして、簡単ではございますが、ひとこと祝辞を申し述べる次第でございます。

（注　鏡島元隆先生の足跡については『成寿』32号にご紹介されています。）

受賞を祝して

錦戸節子

慈しむ　心の灯明りを
今日の日も
育くみ行かんと
今朝の時刻

悲願　心願　念願を
仏の前にて頭足る

心の中を　仏心へ
伏して仰ぎし
その御姿は
我欲　情欲
利欲無く

清力　浄力　尽力へ
今あり力を捧げなん

のぞみ　かなえし
数々を

ちからと　心で光とし
ち（地）球万民救う子（海外留学僧）を

くろうも厭わず
休みなく

だれにも愚痴せぬ
その心情

た（絶）えなる　心血
知るは妻

けさ（今朝）も　夕べも
身の管理

し（私）情を押さえし
夫のため
雨の日晴れの日
嵐の日
全ての心根
夫のため
尽くしし御姿鏡なり
願望成就を
笑顔で援護

身心捧げし　行跡を

受けにし眼にし
諸人は
忘るるなかれ
常なる日

尊き心根　我身（御縁ある方々）とし
失うなかれ
御尊師

身健　心健　合わせつつ
送り行く日の
幸福せを

平成十三年十一月吉日

（、点をつなげると慈悲心の父黒田武志尊いとなります）

戦場と聖地――イスラエルを歩きながら

久保田　展　弘

旅のはじまり

はじめてイスラエルの大地を踏んだのは、一九九四年の秋でした。

アジアの聖地を中心とした私のフィールド・ワークは、西アジアのイスラエルが手つかずの空白地帯としてのこっていたのです。

それまで東アジア、東南アジアから南アジア各地をめぐり、数えきれないほど多くの神や仏の名と、その造形に出会ってきましが、偶像崇拝を厳しく否定してきたユダヤ教の実態が、その対比の中で気になっていたのです。

エジプトのカイロからスエズ運河をわたり、シナイ半島をめぐりながら、シナイ山の麓にとどまって、四千年におよぶ聖山に毎日早暁に登るのが、旅のはじまりでした。

この年の秋、エジプトとイスラエルを結ぶタバ・ボーダー（検問所）を通り、イスラエルのエイラットに入った私の旅は、南の砂漠地帯から北のガリラヤ地方におよぶ、二十日間にわたる、ヒッチハイクに近いものでした。

バス路線網がイスラエル全土をカバーしてい

るといわれますが、各地に点在するパレスチナ自治区へは、バスの便はまったくなく、アラブ人の居住地で乗り合いタクシーを見つけるか、バスの便も少ない北端のガリラヤ地方では、ヒッチハイク以外に移動する方法もありません。むろん、タクシーをチャーターする手もあるのですが、イスラエル人のドライバーは、パレスチナ自治区へはまず行かないのです。

耳や目に入る報道の多くが、イスラム教徒のパレスチナ人と対峙し、ユダヤ教の原理を主張するイスラエル人というイメージが強かったために、私にはイスラエルへの漠然とした警戒心のようなものがありました。

それに、旧約聖書の最初の五章「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」をふくむユダヤ教の根本聖典『トーラー』には、インド文化圏から東南アジア、東アジアにおよんで各地の宗教がもつような霊魂観もなく、木や水を神聖視し、風月に親しむような観念もまったくなかったからです。

イスラエルには、ユダヤ教以外を排除しようとする人ばかりがいるのではないか。こんな懸念は、その後の三度の旅の中ですっかり打ちとけたものになりました。

旅先での人々との出会い、そして多くの方たちの有形無形の援助がなければ、私のフィールド・ワークなど、ほとんど不可能だったにちがいありません。そしてイスラエルとパレスチナとの対峙が、いかに熾烈なものかを実感したのも、旅を通しての私の実感でした。

レバノンとシリアに国境を接する北端の地をめぐっていた早春の三月。私は道路に乗り出して三回も四回も手を上げ、止まってくれる車を三十分も四十分も待ち、ヒッチハイクをくりかえしながら、バニアスへ辿り着きました。

一年のうち三分の二くらいは雪をかぶった頂

が見えるヘルモン山（二八一四m）が、イスラエル、シリア、レバノン三国にまたがり、聳えたって見えます。

エジプトからイスラエル全土におよんで、ほとんど同じような乾燥した岩砂漠がうねる大地を歩いてきた者にとって、雪をいただく山はいかにも新鮮で、神神（こうごう）しくさえ見えます。

イエス・キリストが、十字架刑に処せられるまでの二年くらいのあいだ、少数の弟子を引きつれ、伝道の日々をおくったガリラヤ地方。旧約聖書に「キンネレテの海」の名で登場するガリラヤ湖の東には、ゴラン高原が広がっていますが、このあたりは一九七三年の第四次中東戦争までの長いあいだ、戦場でした。

イスラエルとシリアのあいだで、「ゴラン高原兵力分離協定」が調印されたのは、翌一九七四年の五月のことでした。さらに、それまで占領していたシナイ半島から、イスラエル軍が最終的に撤退したのは、それから八年ものちの一九八二年のことです。

しかしイスラエルがいまも敵対するシリア、レバノンとの戦争が終結したかに見えたこのころから、イスラエル各地にあるウエスト・バンクと呼ばれる、パレスチナ自治区のうちでもっとも大きなガザ地区でインティファーダがはじまったのです。銃で武装したイスラエル軍にたいし、パレスチナ人による、石を投げての抵抗が、以来こんにちにまでおよんで二十年近くもつづいていることになります。

ヘルモン山を間近かにしたバニアスは、国定公園の中にありますが、この地は紀元前二〇年に、ローマ皇帝からヘロデ大王に与えられたもので、ヘロデが皇帝をたたえるために牧羊神パンを祀る大理石の神殿をつくり、さらにゼウスや皇帝を祀る神殿を築いた聖地でした。

一方が台地にへだてられ、いまでは荒れた遺

跡だけしかないそこに、なぜ二千年も前、ギリシアからローマ文化へと伝えられた神々を祀る、壮大な神殿群が造営されたのだろう。そう思いながら、ほとんど礎石しかのこっていない遺跡に立ったとき、私はそれまでのイスラエルの旅では体験することがなかった、水の湧きでる懐しい音を耳にしたのです。

ヘルモン山から伏流する地下水が、台地の下に位置するバニアスで豊かな湧水となっていたのです。バニアスは水の聖地でした。この湧水が、イスラエルの生命線ともいえるヨルダン川の水源になっています。敵対する三国にとって、いまも昔も水源地であることに変わりはない聖山ヘルモン。

なぜ戦争が肯定されるのか

ゴラン高原という戦場につづく水の湧く聖地。イエス・キリスト伝道の北端の地でもあるバニアスはいま、ユダヤ教徒にとっても憧れの湧水地でした。

かつてガリラヤ地方と、シリアのダマスコとを結ぶ交易路上の宿場町でもあったバニアス。園芸植物の原種が多いといわれるイスラエルですが、バニアスの湧水がつくる二キロ余の流れに沿ってイトスギの木立がつづき、水辺にはシクラメンの群生地も見られます。しかし流れを離れ、国境につづくそこには、いまも「地雷注意」の標識が立っているのです。

冬のあいだ、わずかに降る雨を吸いこんだ三月のガリラヤ地方の丘には、真っ赤な大輪のアネモネが一面に咲きそろいます。

一九四八年から一九七三年までの中東戦争のさ中、ゴラン高原につづく上部ガリラヤが戦場であったことなぞ、丘一面をおおう花群を前にどうして想像できるでしょうか。

ユダヤ教、キリスト教、イスラーム三教の聖

地であるシナイ山で、毎日ご来光を仰いでいたときもそうでした。「聖地が戦場になっている」この実感は、同じく三つの唯一神教の聖地とされるエルサレムの神殿の丘に立ったときにもありました。

そしていま、世界中が九月十一日の同時多発テロ事件を機に、大きくゆれ動いています。

事件直後の、アメリカのブッシュ大統領による「これは世界への挑戦である。戦争だ」という声明以来、アメリカ、イギリス軍によるアフガニスタンへの爆撃は、多くのアメリカ人が強調してやまない報復戦争の名のもとに、その実態も明らかにされないくらい多数の民間人の犠牲者をだしています。

どんな理由があろうと、テロ行為を肯定することはできません。しかしここでは、人間の死についての報道が、明らかに偏っています。国家の名のもとに行われた大量殺戮（さつりく）は、この近年だけでもチェチェンに、アフリカに、レバノンに、南米に、バルカン半島におこっているのです。

シナイ山において、神からモーセに授けられた十戒は、旧約聖書「出エジプト記」に明らかですが、ここには「殺してはならない」という戒めがあり、叛く者にたいして報復する神であると記されています。そして十戒を授かった直後、イスラエルの民が、禁じられていた偶像をつくり、礼拝したことから、モーセは神の名のもとに人々に命じ、三千人を殺しているのです。

なぜ「殺してはならない」という戒めが、偶像崇拝をした人々への殺戮につながるのだろうか。この疑問は、旧約聖書をはじめて読んだときに生れたものです。

シナイ半島からイスラエル北端におよぶ旅の間にもこの疑問はつねにあり、私は旧約聖書を重視する聖域者に素朴な疑問を投げかけてもきました。

そこに浮かび上がってきたのは、三千人を殺戮したときのモーセはGovernment（政府）であったという見解です。つまり神の教えに反した者への、政府としての審判（Judgment）が、大量殺戮であったというわけです。

少し言いかえてみましょう。偶像崇拝という民の破戒にたいして、もう一方の「殺してはならない」という戒めは、神の名のもとにある政府、つまり国家の防衛にとっては、まったく意味を為さないということなのです。

しかもこの背後には、紀元前十八世紀のバビロン王朝によって成文法化された「ハンムラビ法典」がもつ復讐法の思想が脈打っているのです。

あらためてブッシュ大統領の声明をたどるとき、報復という名の爆撃、殺戮は、神の名のもとに宣誓されたアメリカ政府、国家にとってなんの矛盾もないことだったのだということが、三千年余の時空を超えてうなづけるのです。

ここに、釈尊の言説をまとめた『スッタニパータ』にある「生きものを殺してはならぬ。また他人をして殺させてはならぬ」（中村元訳、以下同）を対置することはけっして無駄なことではないでしょう。

この言葉は前段に「かれらもわたくしと同様であり、わたくしもかれらと同様である」とありますように、生命の平等観から生れています。『法句経』にある「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」も同じ生命観にたっています。

大乗仏教はこの生命観を、すべての生きものにたいする慈しみへと広げ、日本仏教は草木成仏の思想を深めてきました。

自然崇拝に根ざした日本古来の宗教に、仏教が融合し、意味を与えてきた日本の宗教史をた

どるとき、そこに生命論、人間学としての日本思想の独自性が流れていることに気づきます。

昨年の十月のはじめ、スイスのエラノス会議に招かれ“When Life Meets Life”（「生命が生命に出会うとき」）と題して講演した私の趣旨もここにありました。

シナイ山を辿り、イスラエル北端の地を歩きながら、神が、あるいは宗教が国家を体現するときの恐ろしさを思わないではいられませんでした。

神を超越的な高みにおくか、仏教がそうであるように、ひとりひとりの人間の内に仏を見るか。これは、これからの国際社会に問われていることです。仏教が国家ではなく、人間個の生きようを問いつづけることにはじまっていることを、私は現代の問題として考えたいのです。

すでにインド以来、仏教は善悪や美醜、大小、強弱といった、世界を二元対立の構造においてとらえる価値観を否定してきました。

この数年、とくに話題が多いグローバル・スタンダード（世界標準）という認識が、もし特定の価値をかかげ、物量的な繁栄だけを求める、人間中心の価値観を良しとするなら、私たちは、神の名のもとに言われる、世界そのものの崩壊へと向かってゆくことにならないでしょうか。

久保田展弘（くぼたのぶひろ）　一九四一年東京都生まれ。早稲田大学卒業。専門は比較宗教学・文化論。著書に『日本宗教とは何か』『インド聖地巡礼』『神の名は神』『聖書はどこから来たか』『日本多神教の風土』『狂と遊に生きる～一休・良寛』など多数。日本宗教学会会員、比較思想学会会員、アジア宗教・文化研究所代表。

留学生への支援から絆を深める（『中外日報』一月十二日付）

ことし九十二歳になる長野市篠ノ井の曹洞宗円福寺東堂藤本幸邦氏は、十数年来、アジアからの留学生に図書を送る運動を続けている。信州大学や新潟大学の留学生に毎年、一人一万円相当の希望図書を贈り、また信州大学の図書館に留学生のための特別コーナーを設けて「友愛の図書」と名づけ、年間五十万円を寄付してゼミの教授に選定を依頼し、留学生に必要な図書を購入している。

活動を支えているのは「信州・新潟の留学生に本を贈る会」での募金。協力者は一年一万円の会費を同会あてに振替で送金するしくみである。平成十三年度の実績は信州大学その他で二百八十五人、新潟大学で八十人に贈呈した。この数字からも、アジア各国から日本への留学生の多さがわかる。

希望図書を申し出る際の条件は一つ。「留学生から日本のみなさんへ」と題する短い作文を添付することで、中国や韓国、インド、スリランカ、モンゴル、チベット、ネパール、インドネシアなど、アジア各国からの留学生が、文化も歴史も異なる日本へきて感じたこと、考えたことなどを自由につづっている。

寄せられた作文の一つ一つに藤本氏はコメントをつけ、それを『留学生の想い』と題して本にまとめ、出版している。昨年で第十三集を重ねた。留学生と一方通行の関係ではなく、心の交流を願ってのこと。厳しい条件を乗り越えて

留学した秀才だけに、鋭い比較文化論や文明批判を含んだものもあり、アジアにおける日本の位置、役割、文化的特色について考えさせられることが多い。

たとえば韓国人留学生の目には「日本のテレビは非常に扇情的」と映り、マレーシアからの留学生は「謝り好きな日本人」の行動を「美しい心作りの源」と受けとめ、「大切にしていきたい」という。中国人の留学生は「日本には平和を愛する世界人民と一緒に、いつまでも世界平和を擁護するために努力してもらいたい」と期待を寄せ、他の一人は「歴史教科書には将来の世代のために、その国の達成したことと、過ちと両方が書かれねばならない」と指摘する。

「戦争で人類を支配することはできません。愛が平和を創造するのです。個人の権利は個人では守れません。人類の連帯によって守られるのです」と叫ぶ藤本氏は、まずアジアの連帯を実現したいと願う。

同じ曹洞宗の横浜・善光寺住職黒田武志氏は、十八年前に「横浜善光寺留学僧育英会」を設立し、日本で仏教を学ぶ留学生や世界へ旅立つ日本人留学生への支援を続けている。

留学生たちは帰国後、それぞれの国の発展を担う人材として活躍している。日本での留学体験は人生の上で大きな意味を持っているにちがいない。すなわち地道でも藤本氏や黒田氏の活動が、日本とアジアその他の国との相互理解と交流の絆を深めるものであることは確かであろう。

そう考えれば「アジア連帯」の構想は決して遠い夢のような話ではない。目指すべき理想は、それを手の届くところへ引き寄せる努力と実践、それを支える強い信念によって実現することを証明している。

横浜善光寺留学僧育英会応募論文

世界の交流のための仏教

マルク・W・スターヘル・圓成

A. 序文

禅の修行のために日本の地にブラジルより渡来してから早三年有半が経過した。今に至ってようやく「修行」とか「僧堂生活」の言葉の重要性が理解できるようになった。出家生活に入るべく長年育んできた夢を実現するため、農業技術指導の職を辞そうと決意した七年前から、凡ては始まった。幸いにしてその時、私の禅との出会いが始まったサンパウロの曹洞宗南米別院の仏心寺で、孤圓先生との相見が実現した。

B. 歴史的背景

人口一、七〇〇万のサンパウロ市の東洋地区（バリオ・ダ・リベルダデ）にある仏心寺は、ブラジルの日本人社会に深くかかわっているのであるが、しかし一九六〇年代からブラジルの一般の人々に曹洞禅を弘布すべく重要な活動を行うようになったのである。特筆すべきは最初の総監新宮良範師の努力によって、日本人社会

に寺院が建立されたが、その後禅の学習や摂心のために、仏心寺の門が一般に開放されるようになった。そのときを通じ北米やヨーロッパで禅への関心が急速に増大するようになったと同じ現象が、ブラジルにも興ったのである。寺にも修行僧が入るようになったが指導者も五十嵐、徳田師と継ぎ、特に徳田先生はブラジル人達への積極的布教を開始した。仏心寺の他でも摂心が行われるようになったが、同時にサンパウロ以外のブラジリア、ポルトアレグロ、ベロホリゾンデ、リオデジャネイロ等の地においても新しい禅のグループが活動を開始するに至った。一九九〇年代の終わりころから新しく総監に就任した森山大行老師が日本から渡来して活動を開始し、その指導下で、ブラジルの禅は新しい躍動が始まった。老朽化した寺院は廃され、新しい寺院施設が建立された。老師はきわめて心の広いおおらかな人物であり、また西欧に禅を弘布しようとしていたから、一九九五年にはブラジル人の尼僧クラウディア・デ・孤圓（通称孤圓先生）と夫の村山省三氏が仏心寺に招かれて、そのスタッフに加わるようになった。孤圓先生は出家得度の師である前角老師の下で、一九八一年にかの有名なロサンゼルス禅センター（ZCLA）で禅の修行を開始した。孤圓師は前角老師の膝下で四年間ZCLAで修行し、老師の侍者を一年間勤めた。前角老師の弟子の一人は日本に渡り、僧堂で正規の修行を行ってる。その後孤圓師は愛知尼僧堂の青山老師の下で、修行と法戦式を行っている。尼僧堂には八年以上安居し、師の前角老師の助言により、小田原大雄山の山主余語翠巌老師から嗣法している。新しい寺の竣工後、孤圓師は仏心寺に帰山したが、森山老師は総監の職を辞さなければならなかった。禅についての講話や摂心の組織化、受戒グループの結成とか、孤圓先生の努力により教団

も増大を遂げ、禅も確実に前進を続けている。今では二つの僧団ができている。孤圓先生の流暢なポルトガル語と交流の巧みさによって、今ではブラジル人社会でもその名が知られるようになった。孤圓先生は次第にいろいろな会合に招かれるようになり、メディアでのインタビューも増えている。さらにキリスト教グループも異なる宗教間の壁を越えて交流を行うようになり、坐禅の指導を受けている。

C．初心者の心―仏心寺での修行―

私にとって一九九五年は孤圓師の下で坐禅修行を開始する、重要な機会であった。当時の仏心寺は、日本人社会の年忌供養、葬儀などの要望に応えて、それに従事するという日本的寺院の生活を行うと同時に、坐禅の実習や禅の学習、あるいは受戒や禅のグループの勉強の場でもあった。一般的にブラジルの人々は、禅については鈴木大拙博士やユーゲン・ヘリーゲルやA・ワッツなどの著書からその知識を得ていた。しかしながら坐禅の経験もほとんどなく、禅についてのより深い理解もなかった。禅の祖師達の悟りによる公案や悟りの実現についての興味や関心は極めて一般的なものであり、誤解もあった。時には真の禅の師から認められた悟りを求めて、仏心寺を訪ねる人もいた。仏心寺は、僧侶と日常生活において体験できる機会を提供し、禅へ自然に親しめるように心がけていた。私の仏心寺での修行は、寺の維持管理やあらゆる種類の仕事の手助けを行うことが、基本的なものであった。私たちは日常の坐禅、朝課、作務、典座、接賓及び組織作りなどに深夜まで従事した。週末は数多くの追善供養の法要や土曜の坐禅会などで多忙を極めた。一週を通じて夜にはポルトガル語による提唱があり、初心者の坐禅指導や戒を受けることを希望する人々の受戒グループ

に対する指導が細部にわたって行われた。一年間の修行の後、私は師僧から得度式のための袈裟と座具を縫うことを許可された。

重要なことは仏心寺では私は寺院の日常生活を体験し得たことであって、禅への知的な面からのアプローチと隔たっていたり、一面的なものではなく、常に何かを行っていることが大事なのである。このように仏心寺で僧侶の手伝いや助手的な役割を果たしたことが、正規の修行のために大本山總持寺に安居すべく、日本への長い旅立ちの準備を可能にしたのである。

D. 自分自身の規準を作るべきでない
―大本山での修行―

外国人の一介の僧侶である私にとって、事前の準備も日本語の十分な知識も先輩後輩という長幼の序列についての理解もなしに、日本人の修行者と同じレベルで僧堂において修行を行うことは至難のことと思われた。しかし、僧堂生活での厳しさの中で、無心の喜びの感覚はどのように説明すべきであろうか。現実の生活体験として謙虚の美徳とか「自己を忘れること」について、いかに学ぶべきか。われわれ禅の修行者は「身心脱落」という道元禅師の課題を、いかに追求し実現することが可能か。確かにこの経験は仏法のために仏教徒としての実践に従事する場合に、全身を通してのみ実現されるのである。真実の目標と堅い決断とを持って、修行道場においてこの仏教の原理を発見することができるのである。そしてこれを通して、真の心の平安が得られるのである。総合的な実践や個人的な努力の結果、私と他の人々との距離はしだいに縮まっていったのである。人びととの関係は調和を保ち、私たちは他の人々や周囲のことに気を配る余裕ができてきたのである。

E. 仏法の実現

日本は厚い仏教的伝統を持っているから、何世紀にもわたって固定化してしまい、学ぼうとする人々にとっては必ずしも十分なものではなかった。一方ブラジルは経済的、社会的問題から、人々は現実の理解や心の平安をもたらす宗教的実践を求めつつある。ここ三十年ほど前から、ほとんどキリスト教的背景を持つ多くのブラジル人が、仏教の実践を求めてくるようになった。チベット仏教のグループはいたるところで急激に増大しつつあるが、これに反して禅の教団は浮き沈みが激しい。その主なる理由は、指導者の頻繁なる交替と内部紛糾とである。

今年の初めには、同じような理由から、孤圓先生は仏心寺での不休の六年間にわたる激務を、辞さなければならなくなった。現在先生は新しい禅仏教の会の指導を行いながら、同時にサンパウロ市の禅センターの僧伽設立のための、組織づくりに従事している。孤圓先生はもはや南米別院の支援に従事することができなくなったが、アメリカの法友達の精神的支援を受けつつ、以前より増して前角老師の教えに親近しようと、更なる努力を続けているのである。前角老師の教えは、只一言「耐え忍ぶべし」である。

今現在、私たちはブラジルで新たなるスタートについたのだが、次に、将来にいくつかの希望と目標とを概説してみようと思う。

F. 架け橋

先に観てきたように日本における修行の可能性は無限であり、今も継続している。私は今、現在の仕事と教団の支援のために、ブラジルに帰国する計画を立てている。

具体的には通常の禅の修行と週末の参禅会とか、摂心のためのブラジルの新しい「マウンテ

ン禅センター」の設立計画に従事する機会を得たのである。森林と四部屋の家のある約二〇万坪の農地の寄進を受け、既に第一歩が踏み出されたのである。「セラ・ダ・マンティクウェイラ」山地の頂上一、二〇〇メートルの高地にあるこの土地は、最も近い村「ペドラ・ベラ」から一三キロメートル、サンパウロ市から車で約一時間半の距離にあるが、人家からまったく隔絶している。周囲の一〇キロメートルの道路はまだ舗装されず、あとの五キロメートルは勾配が危険な道である。公共的なサービス機関も電氣も水道も電話の回線もなく、激しい雨の場合はこの土地に行くことは大変な決断を要する。一方では七万坪ほどのエキゾティックな植物が繁茂する原生林があり、狐・アルマジロ・リス・猿などさまざまな鳥類・昆虫などに満ち溢れた、野生の環境そのままが残っている。水は清純な山の水の豊かに湧き出る泉から、供給可能であり、私たちは地平遥かな、絵に描いた様な美しい光景を堪能することができる。

昔から仏教は、たとえかなり人工的なものが加わってきても、常に自然に密着した関係を保ち自然環境に深く配慮して発展してきた。そのことは仏教を理解するための重要な観点なのである。かつてアマゾン地域で仕事をし、二〇年以上も田舎生活を体験してきた一僧侶として、私は特に国際的な地域においては大地や植物や動物たちとともにありながら、さらに自然と密着した関係を得ることと、あらゆる生あるものと相互依存の関係にあるという感覚と、自然に基づいているという精神の実践を発展させることが人びとにとって必要であるという認識を得るに至ったのである。

プロジェクトの第一段階として、私たちは基礎施設と給水及び太陽エネルギーの装置を建設しなければならない。

二五人ほど収容可能な僧堂と修行者の居住家屋も建設しなければならない。さらに新しい野菜やハーブなどが植栽され、そこに居住する人々は総合的な作務を通して、私たちが食べることを許される食物に対する感謝と、ありがたさを発見することができるようになるであろう。

さらに本堂と観音堂と浴場も、建設されることになるであろう。特産物の種子の苗床などの整備や、浸食された地域への再植樹などによる、エコロジー環境の保持なども注意深くなされるであろう。これらのことが、大地や水資源や野生植物の生命の保護、さらには環境に対する意識の向上や、近隣の農民たちとの親交を深めるよい機会や、さらにはもっとも容易にして効果的な仏教の伝導に資することなどを、約束することとなろう。

四年前に計画したこととは相反して、ブラジルに帰国した後、南米別院仏心寺で働くことはもはや不可能であろうし、孤圓先生が述べているように、自らの足で歩まなければいけない時が来たのである。

私たちの法友や支援してくださる人々の援助を仰いで、本年末ブラジルに帰国するや直ちに、このプロジェクトの実現に取り組む所存である。

G. 私の希望

テロリズムの悲惨さに関連する世界を巡る最近の政治的問題によって、人々はこの地球上の貧富の差のあまりにも大きなことに気づき始めた。すべての地域で、人びとは人道的支援のための積極的活動の必要性を痛感している。

福祉は以前にも増して、他者の問題に関連しているのである。より広い立場から見れば、全地球的に大きな意識の変革が、いまや進行しつつあるのである。

これからは、観音様のお力をお借りして、私

マルク・W・スターヘル圓成　MARC・W・STAHEL・ENJO

ふりがな	まるく・W・スターヘル・エンジョー
生年月日	1964年３月２日　満37歳
国　　籍	SWISS／BRAZIL　スイス系ブラジル
現住所	東京都品川区　桐ヶ谷寺
学歴・職歴	
1982.12	R.スタイナー校卒業（サンパウロ／ブラジル）
1986.12	ブラジルのピンハルにおいて農業工学士学位
1993.95	ブラジル／シティオ・ポルタオにおいて宗教的共同生活体験
1995.98	曹洞宗南米別院において出家得度　仏心寺にて孤圓先生に就く
1998.00	桐ヶ谷寺から大本山に安居　總持寺にて修行
2000.01	仏国寺　原田湛玄老師に就き修行
2001.01	桐ヶ谷寺にて法戦式（法憧師　黒田純夫老師）
特　　技	語学（英語・ドイツ語・ポルトガル語・スペイン語）ガーデニング・有機農業

が修行期間を通じて日本で学びえたことを伝えるべく、ブラジルの人々にとって役立つ人間になりたいと念願している。

謙虚さと慈悲と知足という禅仏教の理念は、世界の真の平和と、全人類の救済のために宣揚されるべきである。

ご慈慮に深謝いたします。合掌

（福田孝雄　訳）

横浜善光寺留学僧育英会応募論文

留学僧として私の学ばんとすること

マシュランコフスキー・ジェルミ・観禅

仏法との出会い

まず初めに私が仏法に関心を持ち始めた頃の、約二五年から三〇年前のポーランドの状況について二、三語らなければならない。

非仏教国において仏教の学修や実践を始める際、私たちが遭遇した諸々の問題を検討することは重要なことである。当時のポーランドは、共産党政権下の旧ソ連の支配下にあったし冷戦の真っ只中であったので、宗教研究の自由はなく、基本的には仏教研究は不可能であったのである。この不幸な状況の根本的理由は、まったく政治的なものであった。それは、精神的な事柄に関する自由な探究を含む、凡ての分野における自由な交流を疎外するものであったのである。当然のことであるが、自由に旅行することは許されなかったから、何人も日本やインドに往くこともできなかったし、その資金もなかったのである。私たちが仏教について学びうる方法は、ひそかにポーランドに持ち込まれた数少

ない書物による他はなかったのである。この地区に収蔵されているポーランド語の図書は二冊しかなく、しかもそれを借りることは出来なかった。その本の一冊は、ポーランド語の「四句誓願文」に関するものであった。この書がいかにしてインドからポーランドにもたらされたかは、この論文の主題ではなく、もっと大切なことを述べなければならない。端的にいうと一般社会ではまったく自由が拘束されているから、この観点からすると、西欧諸国とはまったく異なっていたのである。特に宗教に関してはポーランドは他の強力な権威、つまりカトリック教会の支配下にあったし、今なおその状況は変わらない。そしてそれが、さらに状況を悪くしていたのである。その当時仏法に関して学ぼうとする者は、皆変わり者か常軌を逸した者とみなされていた。一九七三年に少数の人が集まって仏教を学ぼうとし、ようやく英語の図書を入手することができた。しかしながら当時のポーランドの教育事情は、ヨーロッパ諸語の学修において、きわめて貧しいものであったので、入手した仏教図書の講読、翻訳、解釈に重大な問題や支障をきたした。しかも来訪のための資金不足から、仏教の教師はポーランドにまったく来ることはなかった。

最初に来訪した教師たちは次のようなものである。

一、約十年間日本で坐禅修行したというアメリカ人であるが、師家でもなかったし、日本語も堪能でなかったから、ただ坐禅の仕方とか彼独自の哲学を教えるだけであった。

二、韓国人の僧侶であるが、強い国家意識を強調し、それをもってポーランドの弟子を感化した。

三、デンマーク人であるが、チベット仏教を教授したが、真正のラマではなかった。

ともかく以上三人の仏教者がポーランドに来たのであるが、真実の仏法を教示するものではなく、唯その教説は個人的見解によって、強く影響されたものであったのである。

学道の主題

私が「妙法蓮華経」のような経典を学び読み解く過程で、気づいたことは、仏法をめぐる理解や解釈のレベルにおける多様性についてである。つまりそれはわれわれ人間の一般的限界を、はるかに超えたものであった。それ故テーラヴァーダと大乗、経典解釈学の伝統、毘婆沙論や瑜伽唯識や中観論の仏教、また戒律のさまざまな伝統、さらにチベット、中国、韓国、日本、スリランカそのほかの強い民族的伝統などは、たとえいずれの仏教がより良きものであるかとかの、人間的領域の問題や大乗間の論争や大乗内においても瑜伽行派と中観派との対立など、純粋に仏法内の領域の問題など凡ての範囲について理解するための十分な時間があるにしても、我々を惑わすものであった。

それ故に何年かの研究の結果一つの目的を設定する必要があったが、それが様々な仏法の共通の基本的立場を見出そうとする願望となったのである。そしてそれを通じて難しいポーランドの状況があったが、異なる諸伝統の間における国民的誤解に対処することが可能となったのである。日本の仏教者や他のアジア諸国の仏教者にとっては、何か不思議な、不必要なことと思われるかもしれないが、非仏教国にとって仏教が定着する以前の様々な伝統の相違点が、明確にされるべきであるということを理解しなければならない。例えば日本では、中国やチベット仏教の教説についてあれこれ考える必要はないかもしれないが、ポーランドでは存在する様々な仏教の表現は凡てを難しくしているのである。

つまりそれぞれ異なる教説が、法を説く人によって述べられているからである。もしわれわれが仏法の正しい理解をなすことができれば、ポーランドの未来のまじめな仏教徒の時代のために、大きな貢献となるであろう。そしてそれは、この国に調和と平和と幸福とをもたらすこととなろう。そうなることによって、仏陀とその正しい後継者たちによる適切なる法の教えを回復し、凡ての相異を克服すべきなのである。そしてわれわれは、まさに輪廻の苦縛から人間を解放すべく、救済と真実の法の伝達に努力した祖師方を敬愛するために、様々な仏教国における仏法の歴史的発展（それは他方では人間的要素と名づけるべきであろうが）の更なる理解に努力しなければならない。

いろいろな歩みの中で、その一つは仏教図書館の開設と仏教研究部門（DBS）の設立という方法によって、実行に移されている。公共図書館の一部分で、シュチェチンのポメラニアン・ライブラリーと呼ばれているものである。ポメラニアというのは、ポーランドのある地域の名称である。DBS（仏教研究部門）は「仏教図書プロジェクト」と称される計画から始まった。計画そのものは、すでに存在している仏教教団の助言と指導に基づいて、世界との交流を通じて、様々な計画や方策が検討され、その実現を目指したものである。努力の結果我々は大正大蔵経、チベット仏教書、中国撰述の図書およびヨーロッパ諸語に翻訳された図書など、多岐にわたる図書を網羅する膨大な図書を収蔵するに至ったのである。われわれはさらに多くの図書が、将来されることを希望している。この図書館は、すでに収蔵された資料を用いて、仏教学に関するマスター（修士）論文の課題に取り組み始めた若き仏教学者を含む、多くの人たちによって利用されているのである。高価なたくさ

んの図書を寄贈して下さったインドのロケシ・チャンドラ教授のような、著名な学者の支援も得ることができたのである。それはインド大使のお祝いを頂き、シュチェチン市のこの式典には、公式訪問を取り計らって下さったのである。

この図書館の公式設立は、二〇〇〇年五月にダライ・ラマによってなされたことは、特筆に価するものである。ダライ・ラマはシュチェチンの城で数千人の聴衆に向かって講演されたが、さらに多くの聴衆が入場することができず、場外に溢れていた。この二〇～三〇年以来の大きな転換について書くのであるが、まさにわれわれが一〇～一五人位の友人たちが集い、敵意と不満足な環境の中で仏教の探究を始めた時期であった。

このすべての背景の裏には、結局個人的な要素が存在するのである。即ち仏教の教説にまったく無知なポーランド人は、どのような方向に進んでいくのであろうか。先に私が述べたようなポーランドでは、法の真実の意味の誤解と誤った解釈のために大きな危険があるのである。すでに私は私自身の多くの被害について見てきた。幾世紀幾世代にわたる仏教徒たちの中で生活することは、自らの古い習慣（それは仏法に対立するものであるかもしれないが）を脱ぎ捨てるに、あづかって大きな助けとなるのである。しかしその過程は、時として苦痛に満ちたものである。仏教を単に知的に理解するだけでは誤った方向に進んでしまうだろうし、それは如何に多くの時間を瞑想やその他の実践に費やしても何も役にも立たないのである。まさに真実の法が、現実に生きる人びとの発展に寄与したかを観ることは、ポーランド人に内省のための国家的背景を知らしめ、また自己中心的な考え方を捨て去るのに役立つであろう。

私の強く望むところは、坐禅の実践によって

生ずる慧眼によって瑜伽行派や中観派の教説を正しく理解し、その教説を正しく援用することと、正しく認識することなのである。偉大な道元禅師のような著名な祖師達は、明確にその道程を提示されている。しかしながらポーランド人の精神的混迷にとっては、その過ちを除去するためには、われわれの精神活動がその変更の中で、いかなる方法があるかについて正しく理解することが必要である。道元禅師でさえ、八正道を含む四諦の妥当性を肯定している。八正道は正しい見解を最初に設定している。正しい見解なしに、いかにして仏陀の説く道を正しく探究し得るであろうか。

述べられるべき凡ての背景には仏教教団の働きがある。それは私の古き法友達の支援によって設立されたのであるが、その教団の活動状況を鮮明にするためには、その活動をまず紹介することが必要である。

ポーランドにおける仏教教団は、非宗教的仏教徒の組織体である。それには二つの目的がある。

第一は仏教諸国におけるポーランド僧尼の教育と奨励と支援である。教団はすべての宗派に解放されている。仏教の僧尼になろうと希望する何人もそれぞれの機会によって、如何なる既成の宗派においても得度することが許されるのである。教団の活動は釈迦牟尼仏陀の教説に基づいているが、宗派的な相違の形態や抗争は受容されることはない。

第二の教団の目的はポーランドにおいて、一般の人々でも理解できるように釈迦牟尼仏の教説を弘布することである。しかしながら仏教思想のポーランド社会への紹介には、何か異常なセクトやカルト的である仏教の多くの非仏教国の一般的絵画などは敢えて除外される。

教団はアジア諸国のさまざまな仏教教団の主

なる人々との交流は、維持してゆきたいと考えているし、適当な寺院や道場を探し出すことによって、そこで推薦された者は得度を受け、そしてその研究や実践の進展をはかることができるのである。教団の目的はポーランドにセンターの設立をはかり、正しく修行した僧尼がそこに居住し精神の修練を継続して行えるようにすることである。そこは仏教に関する情報を提供する、センターとして機能する。サンガの会員は在家の人々の宗教的な要望を支援し、そこで在家の人々はサンガの活動を理解し、仏教徒の社会で活動を行うことになるのである。実践と研究に関しては、凡ての会員は夫々の伝統に基づいて自らの責務を履行しなければならない。

先述の教団の目的に追加することは、以下の如きである。

(1) 古典あるいは現代の師家または教師の作品を含む仏教書と同じく宗教、文化、社会に関する仏教誌の編集と出版。

(2) アジアの仏教諸国の現代語あるいは古典語をマスターした翻訳者の養成。

(3) 仏教全宗派の経典の翻訳、編集および出版。

(4) 師家あるいは教師との組織的相見を通じて正しい仏教の教説、見解および実践において正当なる指導を行う。

(5) 宗教的実践の諸種の形態の組織化を可能にすること。

(6) 青少年の教育、家庭生活、貧者の救済、地域社会の老人、病人のための福祉活動の促進および仏教思想に基づく環境に対する関心の高揚を図る。

ポーランドの仏教教団は、ポーランド政府によって宗教法人として認可(認可番号No.A/97)を受けた。仏教教団は、ポーランドにおいて発生する新しい宗教的活動によるあらゆる問題の

観禅マシュランコフスキー　KANZEN MASLANKOWSKI

ふりがな	マシュランコフスキー・ジェルミ・カンゼン
生年月日	1958年10月18日　満43歳
国　　籍	POLISH　ポーランド
現 住 所	東京都品川区　桐ヶ谷寺
学歴・職歴	
1978.10	シュチェチン大学ポーランド哲学文学部入学
1982.01	同大学中退
1975.07	坐禅実習・仏教学研究開始
1987.10	仏国寺原田湛玄老師の下で坐禅修行
1987.10	桐ヶ谷寺で得度。2000.02嗣法、2000.10瑞世
1992.08	仏教教団創設　以後、同教団にて活動（ポーランド）
2000.05	ダライラマ、ポーランドに図書館開設。シュチェチン市にて仏教研究
1990、1998、2001　大雄山最乗寺　余語翠巌老師、石附周行老師の下で安居	
特　　技	語学（英語・日本語・ドイツ語・ロシア語・スラブ語）

分析において、ポーランド政府や議会と連携して活動している。ポーランドにおいて仏教が正当なる宗教であると認知されるであろう法律を整備するには、長い時間を要する。この法律が成立すれば、ポーランドにおける仏教の発展を擁護することになるであろう。

以上述べてきたことの結論として、日本に滞在して学道に精進している一僧侶としての私は、如何にして自身と他の人々の法の発展をはかるべきか、また全人類の永遠なる幸福と苦からの解脱のための最善の方法に寄与すべく、この論文において掲げた凡ての目標に如何にして到達し得るかを学びたいと念願している。

（福田孝雄　訳）

横浜善光寺留学僧育英会応募論文

仏教・文学・その他—異文化の中で仏教を学ぶ

陸　晩霞

子供の頃、長い間祖母の家に厄介になっていた。祖母が家事の合間に「心経」をよく読んでいるのをしばしば耳にした。独り言みたいに、いったい何を言っているのか、幼い私にはさっぱり分からないわりに、あのリズム感に富んだ調子が印象深かった。そして、やさしい祖母が、一心不乱に読経しているのを私達子供に邪魔されると、いつも怒り出したのもまだはっきり覚えている。それは、文化大革命が終ってまだ間もなく、あらゆる宗教が封建的かつ迷信的なものとして扱いされる時期のことだった。

再び「心経」と出会ったのは大学院時代の短期日本留学中であった。夏のゼミ合宿で京都に行き、泉涌寺附近の悲田院に泊まった。その翌朝、早く起こされた学生皆は本堂のほうへ集まってから、院主の唱導について朝課を開始。いくつかの真言と般若心経をあげた。日本語読みに慣れていないため、私の口から読まれた経文は恐らく途切れ途切れだったが、配られた冊子に漢文で書かれた「色不異空、空不異色、色即是

空、空即是色」等の文句は深く脳裏に残った。つい思い出されたのは、七十年代のある台湾歌手が書いた歌にもああいう歌詞のあることである。ポップソングにまで仏教経文が引用されたとはやや意外であったが、仏教と文学ひいては文芸とはそもそも縁の遠いものではないだろう。このことに開眼したのは確か日本の古典を勉強した後のことである。

大学の後半から大学院時代にかけて、私は日本の中世隠者文学を専攻としていた。『方丈記』や『徒然草』を読んで、それを理解するために、仏教書や仏教関係の知識に触れなければならないことになった。例えば、無常観について。人間として自然生得の部分もあるが、無常観は基本的に仏教原理の一つであることが分ったのである。「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人と栖と、またかくの如し」とは『方丈記』の書き出しで、従来無常観を表す名句とされている。これと同様に、『徒然草』では、「人はただ、無常の身に迫りぬる事を心にひしとかけて、束の間も忘るまじきなり」などが注目される。ただ、鴨長明の詠嘆的無常観（ある意味では、消極的とも言える）と違って、兼好の無常観がむしろ自覚的（積極的）と目されるのは学界内の定説になっているようである。それは、両出家者の存命していた歴史時代背景の違いに関わっていることはいうまでもないが、基本的には両者とも「無常迅速」という仏教の理に一致している。

「大般涅槃経」の聖行品に「無常の偈」が見える。「諸行無常、是生滅法。生滅々已、寂滅為楽」という。中世文学の中では、この偈を具象化・文学化したのは『平家物語』にほかならないといわれる。確かに、「祇園精舎の鐘の声、諸

行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす」があるように、この有名な序章から既に仏教的無常の基調が定められている。

無論、無常観だけで中世文学を眺めるのでは視野が狭すぎる。現に、中世におびただしく現れた仏教説話集には多様な仏教の教えが示されているほか、信念の文学といえば、源信の『往生要集』、親鸞の『歎異抄』、道元の『正法眼蔵』、日蓮の『開目抄』など、まことに枚挙にいとまがない。但し、これら日本仏教各宗開祖たる人物の著した典籍が文学ではなく哲学であると主張する者もいる。それはそれでも結構だが、室町時代の五山文学については、その名の通り、文学視されるのにもはや異存がなかろう。平安時代の漢詩文が姿を消した中世に日本の漢文学を支えたのは主に禅林の僧侶であるとされる。来日宋僧の影響も当然無視できないが、義堂周信、絶海中津らの存在は中世漢文学の空白を埋めたといわねばならぬ。更に広い意味では、それを仏教が日本文学に寄与したものと見てもよかろうか。

そこで、私は思う。何故日本文学に仏教はこれほど深く参与しているのであろう。

この疑問を他日、ある思想史の先生に持ちかけたら、「それは特に日本の問題じゃない。キリスト教やユダヤ教などの世界だって宗教文学というのがよくある現象だし、むしろ中国にそれが稀薄であること自体がおかしいんだ。恐らく儒教思想が長く深く影響してきたからじゃないかな」と、逆に中国が問題の対象とされた。そう言われれば、そのとおりかもしれない。

ところで、考えてみると、中国文学、特に古典文学がまったく仏教に無干渉とは決していえない。それどころか、仏道に精通する古代の中国文人が少なからずいたのである。

盛唐の詩人王維は詩歌・書画・音楽三拍子揃って長じていた、いわゆる風流人である。その「詩中に画あり、画中に詩あり」と後世が高く評価している原因の一つは、彼の作品に潜んだ禅的境地であろう。

木末芙蓉花、　木末芙蓉の花、
山中發紅萼。　山中紅萼を発く。
澗戸寂無人、　澗戸寂として人無く、
紛紛開且落。　紛紛として開き且つ落つ。

（「辛征夷塢」）

人のいない「空」の世界が描かれている。そして、山中で辛征が誰もいないのに全然かまわず、ただ自然に花を咲かせ、花を散らすのである。このように、よく「空」や「自然」を詩や画で表現した王維は、実は詩仏と呼ばれるほど仏道に関心を寄せていた。彼の字は摩詰。言うまでも無く、インドの維摩居士に因んだものである。

また、中唐に下ると、白楽天がいる。中国の古典にはさることながら、日本文学にも多大な影響を与えた白氏はまさに儒仏道三種の思想を貫通融合して一身に具えた典型である。ことに、彼が最初に提唱した「狂言綺語の過ちを以て転じて将来世世讃仏乗の因、転法輪の縁とな」す文芸観は平安朝以降の文学にどれだけ受容されたか。このように、歴史を辿っていくならば、仏教と中国文学とのつながりを発見するのも難くない。

室町時代の禅僧天隠龍沢が曰く「詩ノ外ニ禅無く、禅の外ニ詩無し」とある（『錦繍段』序）。これは「詩禅同一」の見解そのものであるが、一方では仏教と文学が必ずしも両立不可能ではないことを示した。事実、このような観念のみに止まらず、日中両国の歴史上、詩僧や画僧などと称された仏道修行者が輩出している。これによっても、仏教は東洋文化の構築に対して如何に貢献してきたかを知らされよう。

釈尊が仏教を創立した目的は人々を解脱の道へ導くことであろう。ところで、二十一世紀に入った今日では、仏教のその役割はどのように果たしていくべきかというと、やはり人々に心豊かに生きることを教えなければならぬと思う。つまり、傷ついた心を癒して、枯れ果てた心を潤して、怠惰な心を奮い起こしてあげるのに努めることだ。一方、東洋伝統文化の多くには、ゆとりのある心を養う効果のあることがよく知られる。詩を吟じれば、胸中のわだかまりが消えうせ、琴を繰れば、高山流水の雄大浩然たる想いに浸る。その世界では、現代人がよく口にする「切れる」とか「むかつく」などの言葉はどこにも存しないのであろう。言い換えれば、文芸には坐禅と同じ様に人の心を静める力があるのである。したがって、若し仏教の大前提が衆生を利益することならば、伝統文化を守ることは仏教徒にとって精進の一方便にもなるのではなかろうか。この点に関しては、今日でも日本の寺院に茶・華・香などの古い日本文化がまだ息づいていることはまことに喜ばしい。これに対して、清浄たる地と思われる寺院でも市場経済の影響を受けてややもすれば文化離れになりかねない中国の仏教界は、日本に学ばなければならないことが多いと痛感する。これは、恐らく異文化環境に身を置きながら、中日両民族とも信仰する仏教を学ぶ中、私の最も深く悟ったものであろう。

ある仏縁により、私はある若い中国のお坊さんと知り合った。中国南のある名も知らぬ山にこもって、かつてそこで栄えた唐代の廃寺の復興作業に取り組んでいるその方の仏道修行には、悠久たる中国文化の伝統を引き継ぎ、そして広めようとする内容が伴っているように感じられる。再建のお寺には今度琴苑、画苑のほかに、渡日宋僧東皐心越の研究会も附設されるという

青写真。その建設途上の困難と辛苦はさぞ並々ならぬものであろう。

ところが、私にそう質問されたら、次にような漢詩を送ってくださった。

遺棄塵労観舞鶴、　塵労を遺し棄てて舞う鶴を観、
遠離俗事想超然。　俗事を遠く離れて超然たることを想う。
若知精進多苦処、　若し精進に苦しき処多きを知らんば、
何不携琴柳下眠。　何ぞ琴を携えて柳の下に眠らざらんや。

艱難辛苦にもめげずに精進していく決心がよく読み取れた。この詩を以て私自身への励ましにもしたい。そして、その方の悲願が一日も早く成就され、仏教が人類文化への新たな貢献を見るのを期待してやまない。

陸　晩霞　LU WANXIA

ふりがな	りく　ばんか
生年月日	1973年04月12日　満28歳
国　　籍	中華人民共和国　浙江省
現 住 所	東京都世田谷区
学歴・職歴	
1991.08	中国　浙江省滸山中学高校部　卒業
1996.08	〃　北京大学日本語学科　卒業
1996.09	〃　北京大学大学院に進学
1997.09	日本　大東文化大学大学院にて国費留学
1998.10	帰国　北京大学大学院修士過程を継続
1999.07	中国　北京大学大学院修士過程終了　学位取得
1999.08	中国浙江省海外観光局に入局　勤務
2000.09	留学のため同局辞職
2000.10	日本　東京大学大学院研究生として入学
特記事項	1994.95年の二回日本語で書いたエッセイ「夕暮れ」と「家路」が日本国際文学奨励基金随筆募集で優秀賞を受賞
免許・資格	中国全国観光ガイド資格取得（2000.01）

横浜善光寺留学僧育英会応募論文

世界平和と仏教徒の誓願

孟　東　燮（宗黙）

今の世界の現状を人々はよく激動の時期であると言われている。最近、五十年の間に世界は農耕社会から産業化社会へ、産業化社会から情報化社会へ急に変わってきたからである。今もなお「ＩＴ革命」と呼ばれているように革命と言うべき出来事がどんどん起こっているわけである。数千年の間にあまり変わらなかった農耕社会の大家族制度と自然環境は、産業化時代に入ってから今まで人々が経験したことがなかった色々な問題を生み出されるようになった。特に、大家族制度の崩壊と自然環境の破壊はその代表的な変化である。世界第二次戦争の終戦と共に始まった本格的な産業化は、自然と人間と社会に対する根本的な変化をもたされた。人々はだんだん自然から離れ、産業化の中心である大都会へ移動を始めるようになった。人々の大都市中心への移動は、家族や個人、都市と農村の間に様々の問題が露呈されるようになった。人々の便利さと安楽さへの物質的追求は、知らない内にだんだん自然の破壊、資源の枯渇、大

気の汚染、産業廃棄物の処理問題などが、自分自身の身の回りの問題として肉迫されたことに人々が気付くのにはそんなに時間を要しなかった。こんな産業化の否定的側面の出現は、西洋の二分法的であり、機械論的世界観がその背景であると言われている。物質的豊饒と便利さが必ずしも人々に幸せと喜びをもたらすとは言い切れない。人々は今まで味わったことがない不安と孤独を感じ始まった。それはまた違う産業化の贈りものである。

産業現場の生産性増大と効率化のため登場したコンピュータと自動化システムは、社会構造の枠を変えてしまった。さらにインターネットの普及は本格的な情報化時代を開くことだけではなく、世界観やパラダイムも変えてしまった。つまり、機械論的世界観から有機体的世界観への変化である。

農耕社会を背景にして誕生、成長した世界宗教らは、短い期間の間に生産構造が急変することによって、政治、経済、文化社会構造がその根底から揺られることに従い、社会に対する宗教の役割が何かを問い直されるようになった。二度にわたる世界大戦による大量殺傷と大量破壊は、農耕社会が持っていた素朴な幸福と平和をねこそぎ奪ってしまった。世界は前例がない不安と恐怖へ落ちられたのである。宗教と宗教人は二度に亘って凄絶な世界的殺傷劇を経験しながら、なぜこのような悲劇を停止することができなかったのであろうか。その後も愚かな人間は、殺傷の道具を放さずにもっと強力な武器を生み出した。核兵器の開発と拡散である。

両大世界戦争が局地的破壊と殺傷であるのに対して核兵器は地球全体を破壊して全人類を殺す地球全面戦なのである。今、人間は地球全体をただ一度で破壊することができる可恐るべき手段を持っている。しかも憤怒と欲望に従って、

どんな行動もできるがんぜない子供みたいな人々にその鍵を握られている。世界の至るところで絶えず起きている戦争は、もうこれ以上生産力と資源確保のための戦いだけではないようである。最近のアメリカの「同時多発テロ」とアフガニスタンへの報復攻撃は、湾岸戦争のような強大国と石油資源国との資源争奪戦ではない。端的に言えば、宗教戦争であり、「文明の衝突」である。この報復戦争で果たして世界のテロが終息され、平和がもたらされるか？　今までアメリカが世界の至るところで平和維持の名目でやってきた戦争によって、人々は本当に平和と幸福を味わうようになったのであろうか。アフガニスタンの罪もない民間人の子供たちが犠牲にされ、飢えと寒さに震えている姿を見ながら、アメリカが言う世界平和のための政策と行動がどれほど幼稚であり、欺瞞的なことは明らかである。

情報化時代のネットというのは、『華厳経』のインドラ網の重々無盡世界とよく似ている。世界はだんだん仏教の縁起的世界の実相を人々に悟らせるように変化している。まさに世界は固定不変の実体がない縁起の世界たるものを証明しているようである。重層的であり、多元的な関係の連続が世界の実相である。しかしながら、まだ世界は排他的な唯一神的宗教が根強く紛争と葛藤を生み出し、人類は滅亡の危機に瀕しさせている。

キリスト教の唯一神思想とその世界観は世界文明の発展をもたらした。しかし今回のアメリカのアフガニスタン報復戦争を見ると、その唯一神思想が決して人類救済と平和の代案ではないことがなおさら明らかになってしまった。新しい世紀のまた違う危機に向かっている世界のため仏教徒が何をどういうふうにしなければならないかは明らかである。今は神と人間、精神

孟　東燮（宗黙）

ふりがな	メン・ドンソプ
生年月日	1948年08月23日　満52歳
国　　籍	大韓民国　ソウル市
現住所	京都府京都市南区
学歴・職歴	
1979.01	海印寺へ出家
1980.01	海印寺で沙彌戒受戒
1980.03	海印寺で比丘戒・菩薩戒受戒
1984.01	海印寺僧伽大学大教師終了
1996.08	日本　花園大学大学院修士過程終了
1996.09	高麗大蔵経研究所研究員
1997.01	アメリカ　カルフォルニア州立大学修学（1.6年間）
1999.02	中国　北京大学中文科修学（１年間）
2000.04	日本　花園大学大学院博士後期課程入学
2001.06	同上　二年次在学中

と物質、国家と国家、自と他というのは、固体不変の実体ではなく、ただ関係そのものであることを悟るよき機会かもしれない。

戦争の不安と飢えと寒さに震えている人々を助けるための積極的であり、実質的な活動をまずしなければならない。これに対して仏教徒としては、もっとも根本的な変化と誓願が必要となる。まず仏教徒は少なくともこれ一つの誓願を起こさなければならない。これ以上地球上の一切の生命あるものを殺さないことを誓い、他の人々が一切の生命あるものを殺さないように限りない大誓願を発しなければならない。なぜならば、この誓願があるからこそ他の四弘誓願も成り立つし、世界の平和も叶うからである。

横浜善光寺留学僧育英会　育英生派遣先集計

2002．01 現在

106件（全91名　継続15名　再1名）

関係国　20ケ国及び1地域

派遣国　14ケ国（含日本）及び1地域

		新規	継続	合計
タイ	ワットパクナム	14	2	16
	ワットサラディーン	1		1
	マハチュラロンコン仏教大学	1		1
インド	カルカッタ大学・大学院	3	3	6
	マイソール大学大学院	1		1
	プーナ大学大学院	1		1
	マドラス大学	1		1
スリランカ	ケラニア大学・客員教授	2	1	3
	オプン大学大学院	1		1
カンボジア	ナロム寺院	1		1
ブラジル	参玄禅堂	1		1
	新禅センター	1		1
アメリカ	ロサンゼルス禅センター	9	2	11
	ミネソタ禅センター	1	1	2
	ニューヨーク禅センター	1		1
	バレー禅堂	1		1
	禅マウンテンセンター	1		1
	スタンフォード大学	1		1
イギリス	ケンブリッジ大学大学院	1	1	2
	ウォルソン大学大学院	1		1
	オックスフォード大学大学院	1		1
	ロンドン大学大学院	1		1

ドイツ	ライプチヒ大学大学院	1		1
	ハンブルグ大学	1		1
オランダ	ライデン大学大学院	1		1
イタリア		1		1
スイス	ローザンヌ大学大学院	1		1
オーストリア	ウィーン大学大学院	1		1
韓国	東国大学大学院	1		1
台湾	ファクワング研究所	1		1
日本	駒澤大学・大学院	8	1	9
	愛知学院大学・大学院	7		7
	東京大学・大学院	4	1	5
	立正大学・大学院	5		5
	花園大学・大学院	3		3
	大正大学・大学院	2	1	3
	東洋大学大学院	1	1	2
	大菩薩禅堂	1	1	2
	龍谷大学大学院	1		1
	仏教大学大学院	1		1
	東北大学大学院	1		1
	大阪教育大学大学院	1		1
	大雄山最乗寺	1		1
	心月庵	1		1
合計件数		91	15	106

受入元（留学僧国籍）14ケ国（含日本）及び1地域

アメリカ　フランス　イギリス　ドイツ　ポーランド　ブラジル　タイ　スリランカ　ベトナム　バングラディッシュ　インドネシア　韓国　台湾　中国　日本

〔目的〕

佛教を修学する者のうち、学業操業ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1．Zen Center of Los Angeles（ＬＡ禅センター）
“923 S.Normandie Ave LA. CA.90006 197SA”

2．Zen Mountain Center of New York（ＮＹ禅センター）
“Box 197,Mt.Tremper,NY 12547 USA”

3．Wat Paknam（ワットパクナム）
“Bhasichareon Bangkok 10160 Thailand”

4．理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内佛教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成15年４月より１年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1．論文（次項による）
○論題
①これからの国際興隆と仏教の役割
②世界平和と仏教徒の誓願
③留学僧として私はこれを学びたい
④異文化の中で仏教を学ぶ
いずれか一題を選ぶこと　400字詰原稿用紙５枚以上（Ａ４版タテ書き）

2．保証人と連署した願書　3．卒業証明書
4．履歴書　5．推薦書　6．健康診断書

〔募集人数〕

平成15年度２～３名

平成14年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

平成15年１月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会
〒234-0053　横浜市港南区日野中央１丁目12番９号
TEL.045-845-1371　FAX.045-846-2000

第19回生

横浜善光寺留学僧募集

平成15年度・2003

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。
ご希望の方はご応募ください。
詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。

ZENKŌJI
YOKOHAMA

ワットパクナム日本別院

建築進むタイ式本堂

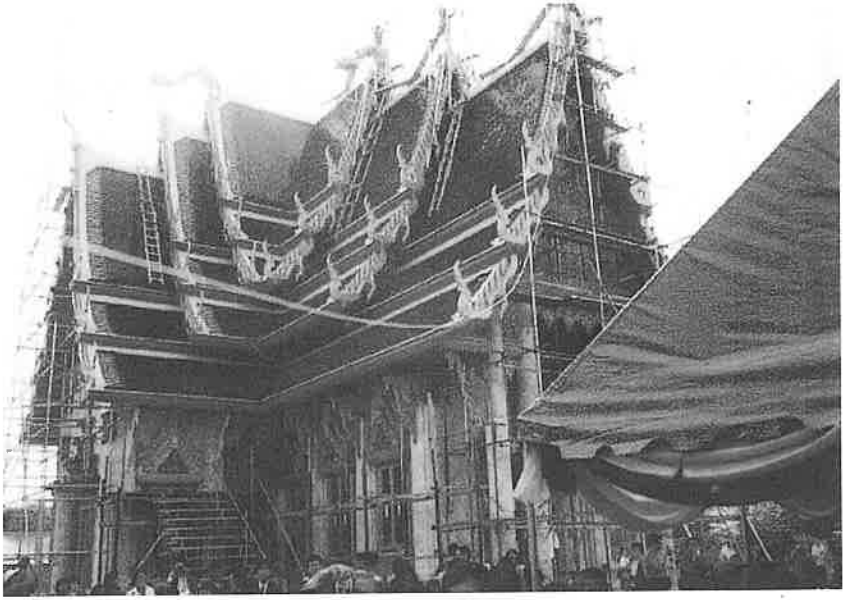
―― 棟上げ相当儀式厳修 ――

二千人を超す在日タイ人が参列

千葉県成田市郊外にあるタイ国ワットパクナムの日本別院で十月二十一日午前十時から、雨安居明けの供養会と併せて、建設中の本堂屋根に〝鬼瓦〟を取り付ける「ヨック・チョーファー」と呼ばれる儀式が執り行なわれ、サクティップ・グライラーク在日タイ王国特命全権大使夫妻をはじめ、二千人を超す在日タイ人らが参列した。

ワットパクナムは、日本人の安居修行僧を多数受け入れ、日本と縁が深いタイの古刹。同別院は航空関係企業の社員寮跡地を篤信者が購入・寄進し、初の在外タイ王室寺院として一昨年秋に開創されたもので、境内地は約五千坪（一六、五〇〇平方メートル）の広さ。現在、大講堂前にタイ式の本堂を建設中で、工事は本年秋頃に完成する。

タイでは三カ月に及ぶ安居明けの「カオ・パ

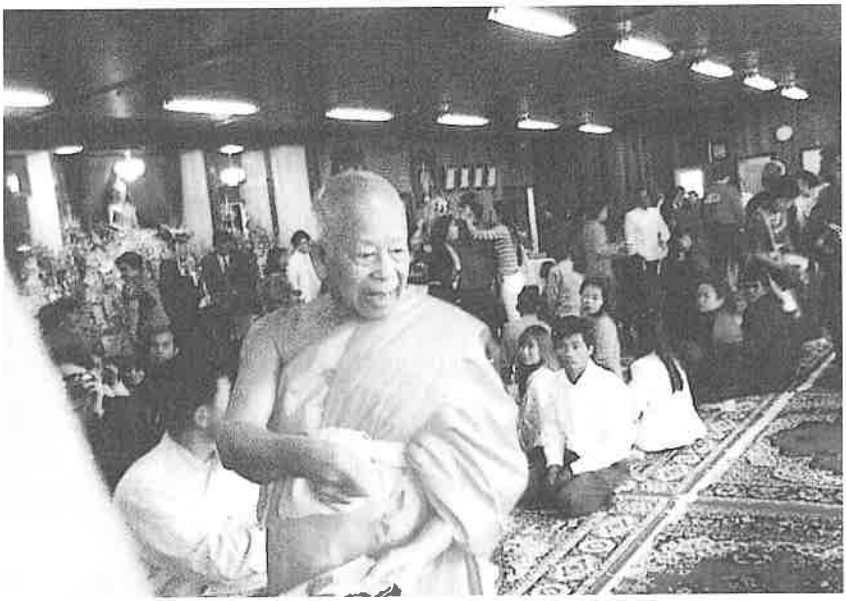


ンサー」には在家信者たちが修行僧に袈裟などを供養し、僧から法施を受ける。別院での供養会にはワットパクナムのプラ・マハージャマンガチャラ住職をはじめ、タイから来日した弟子や別院の常在僧ら約二十人の僧が出仕し、法要後、本堂前で「ヨック・チョーファー」の儀式が厳修された。

タイの寺院建築では完成までに三つの重要な儀式が執り行なわれる。第一が工事開始の際の「ワーン・ララーグ」、いわゆる定礎式。第二が日本の棟上げに相当する〝鬼瓦〟上げの「ヨック・チョーファー」。そして第三が本尊釈迦像の台座下に縁起のよい丸い物を埋める「ルック・ニミット」の儀式。

「チョーファー」は天を突き刺すような長いものを意味し、それに綱をゆわえてケーブル式に屋根の上へ上げる。マハージャマンガチャラ住職が三層の屋根の正面トップに取り付ける三本の「チョーファー」に金箔や香油を塗り、グライラーク大使夫妻、篤信者代表、式典に招かれた日本の曹洞宗善光寺住職・黒田武志師、日蓮宗本長寺住職・従野公徹師らが綱を引いた。「チョーファー」が空中をゆっくり上がって頂上に着くと、詰めかけた参列者の群衆から大きな歓声が上がった。

▲黒田住職も一緒に綱を引きました



大教師補任

善光寺黒田武志住職には、平成13年12月５日付を以て、曹洞宗僧侶規定第五十一条の規定に定められている大教師に補任され、14年２月６日赤紫恩衣被着を特許されました。

黒田住職の大教師補任は、日頃の求道接化と檀信徒の皆様方の力強いご支援の賜であります。２月28日には祝賀の宴が催されることになりました。

ご案内状

謹　啓

頌春の候　貴臺下におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、成寿山善光寺住職　横浜善光寺留学僧育英会理事長　黒田武志老師には、この度曹洞宗大教師に補任されました。また昨年留学僧育英会の多大なご業績により曹洞宗特別奨励賞も受賞されています。これは黒田老師はもとより善光寺檀信徒、関係者にとりましても、大きな誇りであり喜びであります。

さらに昨秋、ご寺族倫子令夫人は、ご自身の発願により観世音菩薩と太祖瑩山禅師とのご縁にまつわる顕彰碑を京都清水寺の境内に建立されました。

就きましては、ご老師の栄誉を称え、ご夫妻の今後益々のご活躍を記念し、左記により祝賀の宴を催したく存じます。

時節柄ご多用のことと存じますが、何卒ご臨席賜りますよう謹んでご案内申し上げます。

謹　白

平成十四年一月吉日

発起人

全国嶽山会　会長　西有寺　横山敏明
曹洞宗宗議会　議員　本瑞寺　洞外文隆
曹洞宗宗議会　議員　種徳寺　渡邊孝彦
神奈川県東部総和会　会長　貴雲寺　渡辺道春
神奈川県東部有道会　会長　海前寺　赤間喜芳
神奈川県東部嶽山会　会長　大林寺　鈴木義昭
神奈川県祖門会　会長　良長院　岡田哲道
神奈川県第二宗務所　所長　興禅寺　市川智彬
神奈川県第二宗務所第五教区　長　正翁寺　篁素明
駒沢大学総長　松田文雄
鶴見大学学長　高崎直道
駒沢女子大学学長　東隆眞
善光寺護持会会長　越石周平
善光寺事務局長　富永豊重
善光寺総代代表　熊谷豊太郎
総代一同

記

一　日　時　平成十四年二月二十八日（木）
　　午後五時三十分から受付
　　午後六時　　開　宴

一　会　場　横浜プリンスホテル　三階　桜の間
　　住　所　横浜市磯子区磯子三―十三―一
　　電　話　〇四五―七五一―一一一一

――慌ただしい日々の喧騒を忘れ、いま一度、我に帰る――

善光寺参禅会にご参加になりませんか

成寿山善光寺ではかねてから、参禅会を催しています。坐禅は日々の忙しい時間を忘れ、無の中から見失いかけていた自分を改めて見つめ直し、心を調え、さらに、新しい毎日のエネルギーの発露として、みなさまにも貴重な体験をお届けすることができるでしょう。

また、当日は少林寺住職井上寛道老師のありがたいご法話に触れると同時に、みなさまの疑問にお応えする質疑応答のお時間も用意しています。

これまでに坐禅の経験のない方、初心者の方のご参加もお待ちしています。

■当日のスケジュール

午後6時より随時坐

◎会場に到着された方から、随時坐っていただきます。

◎初めて参加される方には、この時間に作法進退を指導いたします。

6時30分～7時10分　坐禅　一炷（いっちゅう）

7時10分～7時20分　経行（きんひん）

7時20分～7時30分　小休…お手洗いなど

7時30分～8時20分　提唱（ていしょう）…席改め、ご法話

僧燦禅師（そうさんぜんじ）の『心信銘（しんじんめい）』

8時20分～9時00分　質疑応答…お茶

9時00分　散堂（さんどう）…解散

■会場：成寿山善光寺釈迦殿
■提唱：少林寺住職
　　井上寛道老師『心信銘』
■これからの日程
　平成14年２月８日・金曜日
　　３月８日・金曜日
　　４月５日・金曜日
　　５月３日・金曜日
　　６月７日・金曜日
　　７月５日・金曜日
　　８月２日・金曜日

少林寺住職　井上寛道老師

■坐禅ご希望の方は準備の都合上、
あらかじめ善光寺までご連絡ください。
お申し込みは　**電話045-845-1371（代表）**

提唱

坐禅

豆を撒いて、邪気を払う。

平成十四年度善光寺節分会

今年の善光寺節分会はちょうど日曜日の重なった二月三日に、善光寺釈迦殿で行なわれました。当日は「雪」という天気予報にも拘わらず、三百人を超える檀信徒のみなさんが参加。古来から伝わる季節の行事を通して、仏に祈ることの大切さを改めて考える一日となりました。

黒田老師の読経。その傍らでは善光寺檀信徒一人ひとりの平安が祈念されます。

節分の意味を考えながら

午前十一時、法要は福田孝雄老師による法話から始まりました。「中国から伝わった悪霊を追い払う行事が八世紀に宮中に定着、それが仏教的に転化して、豆を撒く、鬼の目を潰すことによって、積極的な行為として悪しきものを追い払い、さらに、悪しきものを追い払うだけでなく、それを善なる力に転換していくという考え方です。同時に豆を自分自身にあるものをたとえ、自らの中にある邪悪なものを追い払うこと」と節分の由来とその意味を、また、祈とうにさきがけて、「たとえ、その言葉の意味がわからなくても、音経を発することでこの空間が宗教的な空間となり、みなさまの信心が全身に行き渡り、聖なる世界へと誘います」とその意味をお話しいただきました。

続いて、檀信徒の代表でもある元防衛医科大学教授中村治雄先生は医師の立場から「生活の知恵として、豆の中には心臓病にかかりにくくしたり、心臓病にかかっても致命的になりにくい成分が含まれているので、健康のためにも豆を食べることをお奨めします」というお話がありました。

子どもたちに人気の赤鬼さん。

豆撒きの途中で黒田老師の発声による大拍手。みなさんも一所懸命にあわせます。

祭壇に飾られた80体の達磨は希望者の手に。

豆を撒いて一年の平安を祈願

黒田老師のお導きによる三百人を超える般若心経の大合唱は檀信徒の心をひとつに集めます。

「身近におられると気づかないのですが、黒田老師は大教師という曹洞宗でも数少ない存在だそうです」と語られる衆議院議員田中慶秋様、「檀信徒の心をひとつにしよう」と総代の熊谷豊太郎様、ホワイトボードまで使って節分の意義と残された夫々の人生の「生き方」などユーモアたっぷりなお話しをいただいた東郷敏氏。

そして、祭壇に飾られた八十の達磨が檀信徒のみなさんに配られると、赤鬼青鬼の登場です。「福はウチ、鬼はソト」。あらかじめ前に集まった年男年女や厄年の方だけでなく、参加したみなさんが枡に入った豆を撒きながら和やかに「鬼はソト」の合唱が行なわれます。途中、黒田老師の掛け声で全員の手拍子。その勢いにはきっと「鬼も一目散」でしょう。重い雨雲を吹き飛ばす勢いで今年もまた恒例の豆撒きは幕を閉じました。

おめでたい枡の上に飾られた達磨。

ご来賓のみなさん。

節分会の後には客殿で和やかな昼食。

上から福田孝雄老師、中村治雄先生、熊谷豊太郎様。田中慶秋様、東郷敏様。

育英会寄付者

中村　治雄殿
貞　昌　院殿
黒田　能勝殿
細井　　勉殿
黙　仙　寺殿
大　光　院殿
山下　玄道殿
滝沢　孝子殿
安藤　康哉殿
阿部　匡宏殿
高田　林産殿
瀧澤　武雄殿
荻野　篤志殿
島田毟久子殿
来馬　正行殿
石川　征一殿
谷口甘納豆殿
山北　　林殿
有泉　正雄殿
増山　静江殿
増井　喜代殿
バンコクプレジデント殿
大森　文平殿
江見　義文殿
高三　公一殿
岡田　充時殿
窪田　幸市殿
黒河内貞子殿
河野富美恵殿
福田　道子殿
珍田　玲子殿
吉村　　新殿

〈成寿賛助〉

高﨑　直道殿
貞　昌　院殿
安藤　康哉殿
柴田　秀晃殿
片山　一良殿
黒田　トシ殿
村上　博中殿
佐々木慈光殿
渡辺　照夫殿

黒田老師が大遠忌奉修の焼香師を拝命

――道元禅師七百五十回大遠忌参列のご案内――

平成十四年は曹洞宗の高祖であり永平寺をご開山された道元禅師様の七百五十回大遠忌にあたります。そして、この大遠忌を前に昨年五月から海外、また、各地区で大遠忌予修法要が行われていました。そして、いよいよ今年の三月より大本山永平寺で大遠忌奉修が行われます。

この度、善光寺堂頭黒田武志老師が大遠忌奉修の焼香師に拝命されました。

善光寺では黒田老師とともに、大本山永平寺で道元禅師の功績をたどりながら、心新たにその教えを学ぼうとお考えのみなさんをご案内する企画を立てさせていただきました。永平寺の参拝とともに黒田老師の導師の下でご法要に参列し、高祖道元禅師の心に触れるとともに、翌日は京都清水寺で当山婦人寄進の太祖瑩山禅師の碑をお参りする予定となっております。

七百五十回大遠忌という貴重な機会、どうぞ、奮ってご参列くださいますようご案内申し上げます。

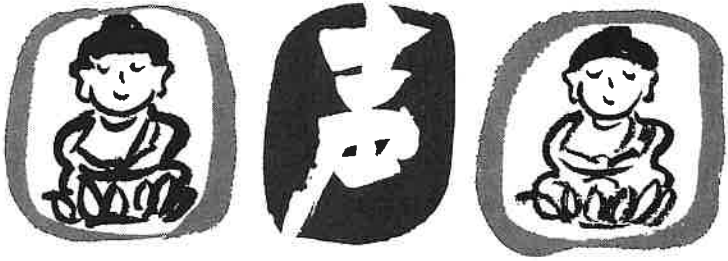
●募集要項

日時：平成14年5月23日～5月24日（1泊2日）
費用：60,000円（お一人様）

日程：
◎1日目（5月23日）
　羽田空港集合（8：40発）―ＡＮＮ（全日空）―小松空港（9：40着）―（貸切りバス）―大本山永平寺（七百五十回大御遠忌法要12：30～）―（バス）―山代温泉（泊）

◎2日目（5月24日）
　ホテル―（バス）―北陸・名神高速―（バス）―清水寺・螢山禅師の碑―（バス）―京都御所―（バス）―昼食―（バス）―京都（15：34発）―（新幹線）―新横浜駅（17：56着）

※ご案内の詳細をお送りいたしますので、ご希望の方は同封のハガキで、住所・氏名・電話番号・参加予定人数などをご記入の上ご返信ください。



特別奨励賞受賞 おめでとうございます

ヴァーレ禅堂住人
藤田　一照

曹洞宗特別奨励賞の受賞誠におめでとうございます。方丈様の長年にわたる浄財を投じての伝道活動がようやくむくわれ感慨無量です。

昨年、アメリカでは旅客機を使った同時多発テロで多くの人命が奪われるという未曾有の事件に続いて、アフガニスタンでの空爆、炭疽菌汚染事件など、世界の内に生きている存在感覚の根元をおびやかすようなことがつぎつぎと起こりました。ご心配をおかけしましたが、おかげさまでわれわれはいまのところ無事息災にしております。なにはともあれこうして新年のご挨拶をさしあげることができるということにまず感謝したいと思います。

実は我が家にも昨年暮れに大事件がありました。十二月五日の夕暮れどき、尚美が早紀と真澄を連れて車で帰宅途中、前を走っている車に追突して交通事故を起こしてしまったのです。車はだめになってしまいましたが幸いにも三人とも無事でたいした怪我はありませんでした。ただ衝突の

ショックでからだのあちこちに痛みが出てきましたがいまはだいぶ良くなりました。そこはしょっちゅう通る慣れた道だったのですが、ちょっとした油断で生き死にに関わるようなことが簡単に起きてしまうのだという厳粛な反省をさせられました。

早紀は今年の九月で十歳になります。われわれがおどろくほど英語が達者になり、すっかりクラスに溶け込んでいます。先生達にたいへんウケがよく、なかよしの大親友たちもいて、学校がほんとうに楽しくてしようがないといった感じです。とても本好きで英語のお話をたくさん読むのは結構なのですが日本語のほうもおろそかにしないでちゃんと上達してほしいものです。このくらいの年齢の子が読んだらいいような日本語の本をご存じでしたらぜひ教えてください。

真澄は今年の七月で六歳になります。昨年から早紀と同じ幼稚園に通い始めました。恥ずかしがりやで英語がまだうまくないのでちゃんとやっていけるかどうか、実は心配していました。さいわい担任の先生たち（男の先生と女の先生）が気に入ったみたいですし、年齢的に幼いせいかクラスメートにもけっこうかわいがられて（二学年合同の複式学級）、毎日元気に通っています。まだ自分の言いたいことを充分に表現することはできませんが他の人が言っていることはよくわかっているようですし、日本語のなかに英単語が交じる頻度がこのごろぐんと増えてきました。この調子でがんばってもらいたいと思います。

尚美は下の町のプレスクール（早紀と真澄がかつてそれぞれ二年間通ったところです）の手伝いを週四日しています。そこで働きはじめて二年になります。いまは手のかかる子

が何人かいてけっこう苦労していますが、きちんと収入の入る仕事を責任をもってやっているのだという張り合いを感じながら取り組んでいます。今年も引き続きその仕事をやれたらと願っています。

一照は、長いことかかってやっとのことで仕上げた『禅への鍵』という翻訳書が昨年二月に春秋社から出版されました。あまりにも仕事のペースが遅いのでとても収入源とはよべないものですがこの「道楽」は今後も継続したいと思っています。『禅への鍵』出版にあたりましては中外日報に一文をお寄せ下さり、本当にありがとうございました。今春『ダルマの実践』という二冊目の翻訳書が出る予定です。もう今までのようないきあたりばったりの「便利屋」稼業をしていたのではだんだん生活がたちゆかなくなり、そういう「道楽（ホビー）」ではなく今年はちゃんとした「仕事（ジョブ）」を探さなくてはなりません。この歳になるまでまともな定職についたことがないわたしには初めての「職探し」になります。もちろん禅堂の活動と両立できるようなものでなければなりませんのでかなり条件が限られてきます。十年前に結婚したことに続いて、これもわたしにとっては、一人前になるための必要なステップなのでしょう。

こうして四人四様の喜びと苦労を味わいそれぞれの課題を背負いながら、同じ屋根の下で笑ったり怒ったり泣いたり喜んだり落ち込んだりしてにぎやかに暮らしております。いろんな人達とのつながりに支えられて、われわれのような者でもどうにかこうして人間らしく生きさせてもらっていることをしみじみ有り難いと思います。今年も、一日一日を少しでもより深く生きていけるよう、みんなでこころがけていきたいと願っていま

す。

どうぞ今年がみなさまにとって実り多い年でありますように、そして心安らぐ日々が世界中の人々の暮らしにもたらされますよう、こころよりお祈り申し上げます。

明るい見通し

京都府
島崎義孝様

過日は前角老師の七回忌に参列させて頂き、まことに有難うございました。翌日早くに用事があったので、積もる話もそこそこに失礼しました。一泊ぐらいできたらよかったのですが、叶わず残念なことをしました。

私自身のことで恐縮ですが、明るい見通しがつき始めました。と申しますのは、福岡県太宰府に開設予定のさる大学から専任教員として赴任しないかと声を掛けていただいており、これまでのところ順調に話しは進んでおります。つい先日は学長に京都で面接。内容説明をしていただく機会を設けて頂き、いい感触を得てきました。経営母体は九州一円ではいくつもの学校を経営している学校法人の老舗だそうで、大学はこの学園の最上部の教育機関になります。

そのようなわけで、方丈様にご報告できますのをうれしく思っています。

メッタ・ハーミテージ

マレーシア
ハーミット・リンガム様

謹啓　ここメッタ・ハーミテージ（慈悲の穏棲所）にて健勝にて過ごしおります。

久しき間御無音に打ち過ぎましたが、黒田老師の御法愛は常にここに存在しております。老師の御慈慮は常に私の心中にあり、訪れる人々に対し御老師のマレーシア禅センターのメッタ・ハーミテージ

に対する御貢献を語り聞かせております。人々はその慈恩を心から感謝致しております。重ねて厚く御礼申し上げます。

老師より御寄付頂いた「貯水タンク」なくして、私どもは生活不能でありました。改めて深謝申し上げます。多くの人々がこの恩恵を受け、それ以上に私はその恩恵に浴しております。現在当所には三つの貯水槽がありますが、他の二つは二人のドクターと電機のデパートの紳士からの寄贈であります。高所にある当禅センターには低地の水源地から水を引くことができないので、2kWのポンプを2機備えてタンクに水を引いております。このポンプはアメリカの保険会社の役員から寄贈されたものです。この設備ができる以前は、私どもは水の供給に困惑していました。水道局が解決できなかった問題を、教主ブッダが解決して下さったものと信じております。

当禅センターに御寄贈頂いた仏教文庫に対し、改めて御礼申し上げます。私どもはこの文庫を利用して法を語り、坐禅に打ち込んでおります。仏法の御加護が黒田老師にさらに加わりますよう祈念致しております。

さて、私の小著の第二番目が刊行されましたので、その幸運を御報告申し上げます。表題は『瞑想と生活』というものですが、多くの人々がこの書を読んでくださることを念じております。五月七日のウェーサカの日に、中央銀行ネガラ・マレーシアの前理事クーン博士がこの禅センターを訪れ、この書を人々に御紹介下さいました。この日は大勢の人々が集まりましたので、すべての人に食事を供しました。それに次いで法の対話を行い、メディテーションについてのセッションを開きました。クーン博士は当センターの支援のことについて、今後

人々に働き掛けて下さることを約束して下さいました。その結果四人が月例として奉仕してくれることになりました。まだ十分とは言えないのですが、センターにとって良き出発であると思います。

放射線学の教授夫人がこの本を沢山大学生に寄贈して下さいました。坐禅の実践に役立つからと言って、ご自身もこの本を喜んで下さいました。私がこの本の対象として選んだのは十八歳から二五歳くらいの青年で、彼等の道徳心の涵養に最適のものであると思っております。もし本が好評であれば次ぎの本の刊行を予定しております。友人の中国人がこの本の中国語訳を行っておりますので、資金ができればそれを刊行するつもりでおります。本の刊行には身障者の方のお世話に預かっております。この功徳は必ずその人に報われるものと祈念しております。

この小冊子を献呈申し上げますので何卒宜しく御叱声、御教導賜りますようお願い申し上げます。禅の師の国日本をいつか訪れる日を夢見ていますが、何分にも時間があっても資金がないため、黒田老師の元に拝登することができません。老齢になる前に必ず拝登したいと思っております。

現在私は森の穏棲所に単身棲んでおりますが、そのためには勇気と自信とが必要であり、それが単身で留まる決断となっております。そして自分のことは自分でやらなければならない。私の世話をする人が誰もいないのですから。孤独と沈黙と静寂を享受しております。単身で弁道に励んでおります。普段の日は誰も来ることがないので法への信仰がさらに強められています。法の実現と理解が深められていることは、「内面への旅」(INNER JOURNEY)であります。

合掌

柔和な清らかさに思わず合掌

茨城県
植芝弘子様

先日は突然お電話を差し上げましたのに、和尚様のご指導を頂くことができまして誠に有難うございました。次男夫婦も嫁の母親も大変感謝致しております。

妊娠二十五週、身長三三センチ、体重一八三グラムの小さな小さな遺体に対面致しました時には、可愛く痛ましいという思いと共に、柔和な清らかさを感じまして思わず合掌致しました。病院からその日の夕方次男の家に連れ帰り、翌朝お坊様に読経して頂き、火葬場まで行って下さり、無事に荼毘に付すことができました。お骨は残らないかもしれないので硬貨二、三枚を入れるようにとのことでその様にしましたが、頭蓋骨はじめ細かい骨まで骨壺に収めることができました。和尚様もお経を上げてくださっているのでとても安心で心強い思いでございました。誠に誠に有難うございました。

二伸

この度は私共のために貴重なお時間を割いて下さり、暖かいお心をお掛け下さいまして本当に有り難うございました。「浄心嬰女」と名前を頂きお経を上げてくださり、お骨をお預けすることができましてようやく安心することができました。小さな魂がたくさんの仏様に導かれ護られて源の世界に帰ったのだと説明して下さったことからわかりました。「浄心」の名を我が身のお手本に心の浄化に努めねばと思います。誠に誠に有難うございました。厚く御礼申し上げます。

ファイトに敬服

愛知県　江川辰三老師

平素ご無音ご容赦、体調良好。先日『成寿』32号拝読、貴師のファイトには敬服します。奥様にくれぐれも宜しくご伝言下さい。

六月に十日間パリー訪問。先般スイスのピエール、モニカ夫妻等弟子丸一門に懐かしくお会いしました。

宗史に残る大偉業

東京都　山内舜雄先生

善光寺域の風光益々御清祥のことと拝します。貴師の各界におけるご活躍ひとえに感服致し居ります。海外留学生派遣の件だけでも永く宗史に残る大偉業と思います。

洞門の宗学は内面的に収斂する性格を有して全く国際的視野を欠いております。なんとかならないものか。曽ては忽滑谷禅学の如く世界に通用するものがあったはずなのに、及ばずながら「道元の近代化

過程」をまとめあげその道程を示す所存です。しかしそれも戦前までで戦後には及びません。大切なのはむしろ戦後半世紀の動向です。それにはまた貴師を始め関係御一統の力をお借りしない限り出来ないことです。老衲はこれまでのところを取りまとめ、土台だけは何とか形あるものとし上梓致します。

利生弘法のご活躍に敬意

横浜市大本山總持寺内
阿部寛志老師

『道元の二十一世紀』及び『成寿』をご恵送頂き誠に有難うございました。道元は在山の役寮に、成寿は役寮及び雲衲たちに配布、利生弘法のご活躍に改めて敬意を表します。

御聖業尊く拝し

東京都
真野龍海様

『成寿』夏季号ご恵送に与り有難うございました。謹んで御礼申し上げるとともに貴堂の益々の御隆盛を祈念申し上げます。御聖業尊く拝しております。

長い学びの上に生まれているもの

埼玉県
木村清孝様

『成寿』32巻をご恵贈賜りまことに有難うございました。今回は鶴見大学の特集ということで、教員の一人として、また宗門人の一人として大変有難くかつ嬉しく存じます。また先生のご文章「二十一世紀の使命」を拝読し現在の先生の数々のお仕事が長い学びの上に生まれているものであることがよく納得できました。これからの一層のご活躍を切に念じ上げる次第でございま

す。

二利御円満の様子拝読

福井県大本山永平寺内
金原東英老師

『成寿』32号をご恵贈賜り厚く御礼申し上げます。

二利御円満の様子ありがたく拝読させて頂きました。

御法体堅固切に祈りあげます。

原点を拝読

東京都
市川智康様

『成寿』32号恵与賜りまして有難うございました。いつもお心にかけていただき恐縮に存じます。「二十一世紀の使命」老師の原点を拝読し感銘致しました。

くれぐれも御法体おいとい下さいますようお願い申上げます。

興味深く拝読

東京都
林　博明先生

『成寿』32巻ご恵送賜り有難うございました。いつもすばらしいお言葉を教えていただき感謝申し上げます。「二十一世紀の使命」興味深く拝読させていただきました。感謝報恩の心で日常身近なことを実践し、多くの先人の歩んだ正しい道が、お釈迦様の心に通う生活であるように、日々努めたいと心得ています。

すばらしい発展をお喜び

新潟県
新井勝龍老師

『成寿』32号をご恵贈頂き誠に有難うございました。特集「總持学園」は私の先々代石禅禅師が貫首の折、「女人済度」の誓願により同園を創設されたと伝えられているだけに、それ以後のすばらしい発展を

どれ程お喜びかと感動しつつ、拝読させていただきました。またいつものことながら皆様の宗教活動の数々を拝覧させて頂き大変有難うございました。

良寛さまの禅

茨城県　竹村牧男様

このたびは沢山のお祝いをご恵送賜り、恐縮至極に存じます。ご厚情に心より御礼申し上げます。それにしても良寛さまという方は、本当に深い方だと思います。禅と仏教の核心をしっかりと把んだ方だと思います。小生の法華讃の理解は、まだまだ浅いものだろうと存じます。今後もずうっと良寛さまの禅に参じていくつもりです。

すぐれた教化活動

東京都　角家文雄先生

『成寿』32号をお送りいただき有難うございます。

私は毎号「留学僧育英会」の記事を楽しみにしています。今号の「育英会論文要旨」や「留学育英僧辞令交付式」を注意深く読みました。黒田老師の育英会事業は、仏教史、曹洞宗史に、「すぐれた教化活動」として特筆されるべき尊いお仕事だと心から敬意を表します。最近、奈良康明・東隆眞先生編『道元の二十一世紀』の中の黒田老師の論文「道元思想から見た現代社会へのアプローチ――海外留学僧派遣の意義」を感銘深く読みました。多くの人に読んでいただければと思います。

懐かしく思い出し

東京都　恩田通子様

『成寿』32号をご恵贈頂き誠にありがとうございました。

今号は總持学園の特集で、亡き佐藤俊明先生が總持寺の出版部長をしていらした時、恩田の版画を親しくお使い下さいましたことを懐かしく思い出しました。また佐々木先生の「現代中国の観音信仰」のご文章を拝読するのを楽しみに致しております。

尊いお仕事の将来のご発展のため、黒田ご夫妻がご健康にてお過し下さいますようお祈り申し上げます。

なつかしい思いで拝読

岡山県　山田弘子様

『成寿』をお送りいただきありがとうございました。今号のカラー特集が母校の鶴見大学でしたので、なつかしい思いで隅から隅まで拝読致しました。中でも学長の「鶴見大学に学ぶ学生諸君はどこか他の大学とちがう」と言われることをひそかに期待しているとの言葉に、毎日の生活を改めなくてはと身を引き締める思いです。

楽しい一時をおくらせてくれた『成寿』に感謝します。そして善光寺様の益々のご発展をお祈り申し上げます。

大変わかりやすく拝読

滋賀県　田中智誠様

寺報『成寿』夏季号と『道元の二十一世紀』をご恵贈下さり誠にありがとうございました。黒田住職の所収論文は道元禅師の祖録を引用して、育英会事業は「発願利生」の教えにそう菩薩願行と位置付け、その意義の重要性を述べておられ、大変わかりやすく拝読しました。

発願・発心の原点

福井県
小田興雲様

初めてのお盆行事も終り、ようやく先日ご送付頂きました『成寿』32巻を拝読しております。数年前御会した黒田老師の信念、思いを再び、体全体に感じております。宗派を越え、釈尊から全世界の宗教へ、そして再び釈尊の教えに帰す思い、誠に小生の発願・発心の原点であります。

「二十一世紀の使命」のお言葉は小生の真に願うところでもあり、感動致しております。今この小さな寺を御護りするにあたり、黒田老師の心意気を小生の願いに置き換えて、そして目標として頑張りたいと思います。誠にありがとうございました。

何かの符号

埼玉県
鈴木忠雄様

『成寿』をお送り戴きありがとうございます。さらに本日取り寄せました『道元の二十一世紀』にご老師の論述がございましたので、何かの符号かとも思い合わせております。さっそく拝読致したいと存じます。また清水寺の碑が令夫人のご寄贈と知り驚きました。取り急ぎ御礼申し上げます。

五回目の接心に参加

兵庫県
小川光生様

『成寿』32号ご恵送賜り有難うございました。益々の御精進拝見させて頂きました。昨年（平成12年）母を送り早半年が過ぎました。

七月一日～八日、二十八年ぶりにこの度は臨済宗系の長岡禅塾にて大接心に参加。何とか全七日を終えました。この八月には満七十七歳になり

ますので体力がやや心配でしたが、大いに自信を深めました。早朝三時半起床、九時までは禅堂で坐り、あと夜十時まで外で蚊に刺されながらの夜坐もあり、結構厳しい坐禅会でした。臨済禅は活動的で若い時の方が向いていたように思いました。ともあれ初めて故満義社長(当時六十八歳)に連れられ永平寺の臘八摂心に参加してから五回目の接心で、ナリスにご縁を頂いたお陰を感謝しております。

気宇壮大、迫力ある記事

兵庫県
東郷　公様

豊がお世話になります。先日は保春寺の落慶法要に際し、ご老師にお会いできまして有難いことでございました。善寶寺にも一泊し、豊の修行の場、修行の様子など直接見ることができまして、本当に安心しました。誠に意義深い山形への初旅でございました。

『成寿』32号、『道元の二十一世紀』拝見しました。気宇壮大、迫力ある記事、益々の御活躍を祈念してやみません。豊もまだまだ未熟者、どうぞよろしく御指導お願い致します。

自分の心を反省

横浜市
青嶋久雄様

『成寿』夏季号をご恵送賜り誠に有難うございました。先生の「二十一世紀の使命」を拝読し、自分の心を反省すると共に数々のご教導を賜りました。本当に有難うございました。

嬉しくまた感動して

横浜市
谷口なか様

『成寿』をお送り頂きありがとうございました。またこの度は、倫子様のお力で清水寺に石碑が建てられるご様子嬉しくまた感動しております。それに前平様のご様子、いろいろと楽しく読まさせていただきました。

心までゆきとどく援助

大阪府
川上与志夫様

暑さにめげないご活躍、うれしく思うと共に感謝致します。金だけ出す日本の援助の多い中で、心までゆきとどく援助が、送られてきた資料からうかがい知ることができます。どんなに喜ばれていることでしょう。私も私なりに尽くしている覚悟です。

禅センターの日々が懐かしく

富山県
遠藤博因様

先般は法要にお招きいただき、有難うございました。久し振りに前角老師のお弟子様方とお会いすることができました。禅センターで過ごした日々を懐かしく振り返らせて頂きました。

貴重な体験

東京都
寺田豪淳様

私は先日ニューヨークより無事帰国しました。現地にて私のまずい英語に加え、予想だにしない事件などもありまして、禅モナスタリーとの連絡にとまどってしまいましたが、黒田住職様よりの紹介ということで気持ちよく受け入れて下さり、四日間ほどの滞在が許可されました。短い期

間ではありましたが禅モナスタリーの空気に触れることができました。生活の中で、お亡くなりになった今でも語り継がれ深く敬っている人々より、前角老師の偉大さが強く感じられました。貴重な体験を有り難うございました。

素朴さと厳粛さが印象的

マレーシアより
伊藤博、宣様

日本滞在中は大変お世話になりありがとうございました。インド四大仏蹟廻りはあまり期待して行かなかったのですが、素朴さと厳粛さがとても印象的でした。またバングラデッシュは想像以上に発展しており、人情味はインド以上のものでした。とにかく無事ボルネオ島も廻りました。ブルネイとマレーシアのサバ州は共に回教徒が多数を占めていますが、穏やかでとても親切です。熱帯雨林や動植物（特にオランウータン）は見ものですが日本企業の進出により、森林がかなり荒らされているのは残念です。くれぐれもご自愛下さい。

時宜をえた洞察力ある文章

東京都
村田一夫様

暫く御無音に打ち過ぎ失礼致しておりました。取引先の書籍の取次店で、見本として入っておりました『道元の二十一世紀』が目に止まり、手にとって目次を見て方丈様の御名前が記されておりましたので、早速帰って拝読させていただきました。

「道元の思想から見た現代社会へのアプローチ　――海外留学僧派遣の意義――」

真に時宜をえた洞察力ある

見事な文章です。また何時か拝眉の機を得られますれば嬉しく思います。

ご厚情身に染みて有り難く

新潟県　佐々木慈光尼師

思いがけなくも数々の御品に恐縮致しています。益子焼の色彩新鮮な上品な仕上りに、信者の皆々様いいないなと手にとり、お菓子はどんなのがいいかなと人それぞれの思いをのせて喜んでいます。これからが楽しみです。御本はゆっくりと味読さして下さい。

今は珍しい貧乏寺に私はわびさびの極致と表現し笑いを誘うております。が子どもたちの不良、暴力、登校拒否や離婚等々、山の朝夕の空気の振動、静けさは自慢の一つ、これがこの人たちの蘇生される根本なのでしょう。

秋の風光は全山真っ赤に染まり、阿賀野川の舟下りは、小手をかざして絶景かなと感嘆する外なしと観光客へ語り、私は一人でバタバタ寺を動いているだけ。古で残されている将軍杉、薬師堂で観光寺になっていますが、唯それだけではございますが、どうかお時間をお取り下さいましてご来山下さいますようにお願い申し上げます。いつもながらのご厚情身に染みて有り難く合掌されるのです。

心の重荷が軽く

東京都　宝心様　康

昨日は突然早朝に電話して押し掛けるというわがままを受け入れて下さり、本当に有難うございました。お忙しい中を貴重なお時間を割いて下さったことを心より感謝致します。心のあまりのつらさに得度を受ける決心を先生に聞いていただいただけでも、心の重荷が軽くなった気がして

います。本当に有難うございました。

厳しい差定

ミャンマー
真野大成師

お土産をどうも有難うございました。ヤンゴンではお会いすることができず残念でした。

PA-AUK瞑想センターに来て一カ月余りが過ぎ、こちらの生活にもだいぶ慣れてきました。当瞑想センターはMAWLAMYINE市郊外の緑深い山の中にあり、僧俗合わせて常時三百人から四百人が修行をする大きな寺です。厳しい差定に明け暮れています。

いいことを積み重ねたい

山口県
荒木茂樹様

先般三七会ではお会いできて嬉しく存じました。お変わりなくご活動のお姿を拝し、感じ入っております。梅雨もよし、猛暑もよしです。なるべくいいことを積み重ねたいと念じます。ご恵送の『成寿』楽しく、有難く拝読致します。またの出会いを楽しみにしております。

三心会総会

川崎市
野田市朗様

黒田先生にはご健康でいよいよ聖務御励みのことお喜び申上げます。

三心会の折は特別にお助け下さって有難うございました。どうぞ一年に一回開かれる三心会総会にはお声をお掛け下さいますよう切にお願い申上げます。幸いにして頭の呼称以外には健康が与えられて元気でおります、感謝。三心会にしなければならないことも出来ないでおりますがお許し

下さい。

巡り合わせに感謝

東京都
佐藤誠司様

この度曹洞宗宗務庁刊行の外国人向け季刊誌『Zen Friends』の作成のお手伝いを正式にお引き受け致すこととなりました。非力ではありますが、何とか曹洞宗のお役に立つことができますよう、課題には全力で取り組む所存でございます。また私自身と致しましても、このお仕事を通して、再び仏教に向かい合うことができます。有り難いことだと、この巡り合わせに感謝致しております。

黒田理事長様と善光寺の方々のご活躍とご健康を心よりお祈り申上げます。

玉章に心揺さぶられ

東京都
上坂元一人様

『成寿』32巻を拝受致しました。只々深謝合掌。巻頭言「二十一世紀の使命」の玉章に心揺さぶられるままに一知半解、恥ずかしき身のままに〝今日いまこのとき生命恵まれて世に在る日にかかる玉章に説きくだされしご高教に接するの至福〟に感謝申し上げるべくペンを執りました。老師仰言の章句に即今出会い得ましたこと嬉しきままに――。

道徳修身教育の大切さ

茨城県
山口哲雄様

成寿を毎号ご恵贈下さり厚く御礼申し上げます。

世相の険悪日毎に厳しさを増し目を覆うニュースの毎日で暗い気持ちにさせられます。松下幸之助氏が生前、道徳修身教育の大切さを訴え続けておられましたことの意味が痛感されます。黒田師のご活躍

を切に期待しております。

育英会のますますのご発展

埼玉県
森　祖道老師

『成寿』32巻並びに奈良・東編著『道元の二十一世紀』をご恵贈賜り誠に有難く存じます。『成寿』を通して貴育英会のますますのご発展をうかがうことができますこと大慶に存じます。

奥様の発願に敬服

東京都
島津源之様

『成寿』誌をご恵送下さり有難う存じます。

奥様の発願に敬服致します。

八月に飯能の能仁寺の施食会に出席し、ご境内にありますす元上司の墓地にお参りいたします。

ご法体ご自愛専一にされますようお祈り申し上げます。

「出会い」に感謝、感激

東京都
浜田智祥様

『成寿』誌を拝受致しました。『修証義』に「人身得ること難し、仏法値うこと希なり」とありますが、動物や人間も、生きとし生けるものが強く輝く季節…。私が私として生かされ仏法にめぐりあえ、そして出会いの喜びに満ちあふれる全ての縁。私はこの「出会い」にいつも感謝し、感激し、微力ながら釈尊の教えを糧に歩を進めております。

「出会いという安らぎ」の中に自己を見出だし、参究していくことは私のこれからのテーマ。善光寺様の心よりのお便り、本当に有難うございました。

賀頌

黒衣到処禅
田饒成寿郷
武徳善光燿
志行千里翔

平成十三年七月

山田和雄

詩 二篇

小田原市 潮音寺 安藤康哉

不思議

風 吹けば
雲 おこり
片雲は 無心に遊び
悠々と 大空を去来する
こんな不思議に 出合うとは
雨 降れば
川 うるおい
流水は 自在にまかせて
方円の ありかに従いゆく
こんな不思議に 気付くとは
人はみな
永遠の いのち
億万年の 遺伝子をいただき
いまを 生かされ生きている
こんな不思議を 知ろうとは

祈る

人は
信じ、愛し、癒しあう
何かがなければ
孤独の海を
あてもなく彷徨する
むなしい　ただの小舟か
空漠とした　切ない想いに
うちしずむとき
人は
天空を見上げ
一途に輝く星たちの
聖なる光りのなかに
永遠のいのち　求め
ただ　祈る
あつき心
涙こぼれ
ひとり　祈る

留学育英生からのたより

現在の私の満ち足りた日々

鄭　貴霞氏（台湾）
第17回育英生

黒田武志理事長殿

日本へ留学して５年目になります。始めの４年は（外人ゆえに）日本の習慣に馴染むのに随分苦労しました。また私の年齢が68歳なので皆様は気がかりの様ですが、真剣に研究していると若い人達と少しも変わらないことに気がついたのです。

振り返って、私は小さい時から農、医、工、商と色々な経験を積んで来ました。台湾の田舎で生まれて日本語は母国語の様に小さい時から習いました。父は学校の校長で母は無医村の助産婦でした。私は長女ですが生まれて間もなく乳母に育てられ、不自由のない少女時代を過ごしたのです。

しかし終戦前、私が12、3歳であった小学4、5年の頃、台湾も戦争中は日本と同様に国家総動員で、若い男性達は皆出征しました。そのために農家は人手不足となり、私たち小学生も田植え、稲刈り、甘薯栽培等に駆り出されて苦労したのです。私の乳母の子も出征して、中国の有名な除州の戦いに参加して負傷をして還って来ました。

終戦後、私は有名な彰化市の高等女学校を卒業し、母の勧めで戦後新しく出来たアメリカ式の医事専門学校に入学し、その合訓第1回卒業生で護理、助産婦の資格を得て直ぐに病院に勤務する傍ら護理学校の護理技術の教員を兼ねました。その３年後に結婚して２女、２男を育て、８年間は専業主婦としてすごしました。

しかし私は次第に人生に対して疑問を持つようになり、苦悶の日々が続いていました時、道端で金剛経の説法をしていた、游宝蔵居士に出会い色々と仏教のことを教えられました。（去年の７月16日に私達は38年ぶり再会しました。）その後、勧められて文化大学教授印順法師に帰依し、法恵と言う法名を頂き私は在家仏教に帰依したのです。

その後、私は再び公務員に就職しました。しかしこの８年の職場の空白期は、すでに沢山の優秀な後輩が続出して、競争も激しく、私の華やかな立場は無くなっていました。時間の流れの無常を直に感じました。

そしてちょうどその時台湾の高度経済成長の発展時期で、私は簡単な訓練を受けたのち、縁あって自分で会社を設立して台湾の十大建設に参加し、事業や貿易を始め、早朝から真夜中まで働きました。そして仕事の関係で国から国へと廻りました。それはすべて自分で責任を負うことです。彼のイラン革命の起こる３ケ月前のことでした。そして世界の人々の差異、特にアフリカ、東南アジアの後進国の現実を見て、人間の生きていく苦しさ悲しさを無尽に感じました。

また1975年には建材をサウジアラビア等へ輸出して、道のないところにプレハブの仮住まいを建てて、道路工事にも協力したのです。

1982年アメリカによる台湾の移民解放政策によって、息子達も兵役適齢に達して出国出来るので、私達家族全員はアメリカに移民したのです。

そしてカリホニアの雲林寺で週２回密教を４年間と後に年３回の集中講義に参加しました。そこにはアメリカ各地から集まって来る在家の人達の外に、外国からも一緒に易経、風水や密教の研学と実際の修法が有り、また一緒に食事をし、余興として歌を唄ったりして楽しい時を過ごしました。現在アメリカ以外の国にも広がりつつあります。

そして別にミルブレイの曹洞宗禅センターで、本土のアメリカ人達と一緒に坐禅したとき、一番感動したことは食事の作法です。食後湯水で以て食器を洗い次回また使用することです。道元禅師の教えの作法が窺えます。

1983年アメリカでケヤホームを開設した後に、もっとアメリカ式に経営したいと Mission College へ研読に入ったのです。しかしその13年後に自分が良いことを一生懸命努力しても、現実に受け入れ

られないことに気づいて、自分の行為が大した意味を持たないと感じたのです。そんな現実的な行為よりも、もっと宗教の生命的意義の理解、その価値や経験を把握をしたいと考えはじめました。

それには伝統的な学究や実習が必要であって、正しい信仰と実践の面をもっと高めたい、そして実際に即したと思ったのです。

そこで私は経営していたケヤホームその他、一切を始末して中国、日本の旅に出かけて高野山へ行きました。そして５年前に、もう一度学校に入って勉強する事に決めたのです。

人生には決まった法則が無いのであり、危険を転化し、以進為退、以退為進とある様に、その時の自己判断によって方向を決める外はないと思います。

このいろいろな経験によって現実の移り変わり、とくにお金ができたときの人間性の変化を現実に見て、人は如何にお金持ちに弱いか情けないか、また反対に如何に高慢であるかを常に見て感じてきました。それは富でも貧でも心の持様であり、仏教で言う常に慈悲心を持って人に接する心掛けが重要であると思います。

病院では人間の生と死のケアーに直接携わり、本人と親族の苦と楽は人生において必ず経過するべき道であることを深く感じました。この苦と楽から解放されるためには常に無執着に生きる経験を習積する必要があります。

日本に来ていろいろ苦労はありましたが、時が経つにつれ、それらがすべて私を高度の勉学へと導いてくれたと思われます。勉強は楽しいです。今まで経験したことが自然と学問に繋がって、網の目の様に系統的に整理されて、とても興味深いと思います。

高野山では密教の得度をして護摩を修しました。３年前、師匠土生川正道理事長のご指令で梵文を勉強した時、チベット語と同時に2つの語学を習うことには懸念がありましたが、今日種智院大学密教学所長、北村太道教授の40年の結晶チベット語と梵語で原典を読むことを学ぶに当たって、とても役立ったのであります。

らなければ無事であることが明確に理解出来ました。そして日常において節約する習慣は養成すべきです。現在世の中は医薬や福利制度が十分に発達して、健康保持や生活には困らないです。

日本古代の文献を読むと、昔の人々は何の生活の保障も無く生きていたのです。私達は良い時代に生まれて安定した生活が出来ることに感謝するべきです。

過去に事業していたとき、また日本に来て仏教研究に入り、それから花園大学に入学したとき、更にこの博士過程への進学に至るまで、私は幾度も、危機に曝されながらいつもそれを乗り越えて来ました。それは自分自身の努力と周囲の善知識の導きと、ひとえに仏の加護を被っていたことであると、今私は一番深く感じてまた信じています。

それは禅宗の菩提ダルマが言う任運随縁であり、現在に至るまで私は無所有のままに、自分なりに生涯を通じて生きて来たつもりです。

もちろん私は何をするにも自分の総ての精神を投じて行う他に、経験によって分析する性格を持っていますが、とにかく何時も目に見えない何かが繋いでいてくれることを感じるのです。それは私が無執着でありながら、何事も良い方向に持って行く、機会を待つ、何時でも遅くないという考えからであろうと思います。

今は、偶然バス停で知り合った里親のお世話で良い借家に住むこともでき、黒田理事長殿のお陰で生活の改善も出来ました。これら総て善知識のご指導と自分の願求と仏の厚い加護によって今日の私が形成されたのです。将来は問わず、現在の私は心静かに季節の移り変わりを身じかに感じられるようになり、学期中、真夜中まで頑張る忙しいチベット語と梵文の原典研究を離れて、此の夏休みに和訳の密教教典を楽しく研読出来る充実した日々の暮らしに感謝しています。日本でいろいろと御指導して下さいました方々に心からお礼申し上げます。

合掌九拝

また西村学長の御指導によって、私は再び密教を本格的に学ぶことが出来るようになり、日本でなくてはできない研究が出来ましたことにおいて特に感謝に耐えません。

今回黒田理事長の御親切で此の拙文を書くに当たり、私は考えました。私を形成したのは38年前に遡る金剛般若経の教えすなわち無執着であったと思います。

私はこの38年来、この無執着を実行して来たのです。そして花園大学で初めて無執着が空であるのを知りました。それは私が過去３回も全財産を捨てたからです。

はじめのそれは義父が沒した時、私は財産分与に参加しなかったのです。そして自分で働きに出ました。それは財産に対しての無執着の実行でありました。そういう38歳の私に、いろいろな縁が結ばれて事業を創めることができたのです。

２回目はアメリカへ移民した後、歿った夫が私の買った台湾の3軒の家を1986年に売ったのです。その後１年足らずの間に物価が高騰して、せっかくの不動産が無意味になってしまったのです。これもやはり仏教の教える無常ですね。しかし無執着な私は苦に成らないわけです。最後の５年前に、私自身と友達の意見を総合して、自分ですべての財産を処分したのであり、このことは現在でも尚悔いていません。幸い、私の弟と息子が支持してくれましたので、それ故に安心して日本で勉強ができるのです。

そしてもっとも私を激励してくれたのは、アメリカの林雲大師から届いた4尺×８尺の大きな〝佛字のタンカ〟です。また大師は高野山へ３回も御来訪頂き関心を示して下さいましたことであります。

お金は天下の回り物であり、執着しても無常ゆえに永遠は無い。しかし私には支えがあり必要の時には自然に入って来ます。もちろんお金は多いのに越したことはありませんが、原則的には無理して作っても矢張り無くなると思います。

この点仏教が教える粗茶、淡飯、布衣は、実行すべきで、欲を張

Foreword

The chief priest of Zenkōji—Temple
Takeshi Kuroda

"Those who are benevolent will love people. Those who are courteous will respect people. Those who love people will beloved by others at all times, and thosewho respect others will be respected byothers at all times."

How beautifully this verse sounds. As you all know, the newborn princess was named Aiko and another official appellation Princess Toshi in a ceremony based on Imperial family tradition. The names were taken from Chinese verse by Moncius.It seemed to me that a precious virtue was given to remind us how to live. The words are very easy and familiar, but it is very difficult to practice their mind. You can love people at all times if you are benevolent and youcan respect people at all times if you respect your parents and ancestors. Those who love people will be loved by others and thoss who respect others will be respected by others. This is the providence of nature which shows the most beautiful and precious human state of mind. The mercy of Buddha, the love of Christ and the benevolence of Confucius, all these divine teachings of Saint, God and Buddha are consistent and tell us the human mind and how to live. The only word can show how we live and the most important foundation of human beings.

This only word is "Mercy", though there are many other teachings of Buddha. Rev. Dōgen said this word as "to find out life and death is the biggest problem to be solved for Buddhists" and taught us it is the beginning to understand four pains.

Recently seeing many unprecedented phenomena of the world, I feel misgivings that we are losing something important to our lives, companies, nations and the world. I am in deep grief that we don't understand truth fundamentally. It is natural we are confronted with not a few religious problem to understand new different cultural religions. We should go along with foundations toward truth. The belief is "to go back to Buddha through the founder", "wooden pestle shortens its life for people and those who know it are precious". I have the same mind. Last year was the first year of the new century, and unforgettable year for Zenkōji-Temple and us. We put up the monument to Rev. Keizan in Kiyomizu Temple in Kyōto and won the special award for Sōtō Sect, furthermore I am honored to be appointed Great Rev. of Sōtō Sect. I just thank you and try to do my best along with my given duty.

The 35th anniversary of Zenkōji-Templeis coming and after that the 50th. We should do our best for prosperity of Buddha in the world, for encouraging people dedicated to society and for happiness and peace of our supporters.

編集後記

▼『成寿』第33巻をお届け申上げます。昨秋は善光寺にとりましては、喜ばしいことが重なりました。黒田住職が12月に大教師に補任。また10月31日、曹洞宗特別奨励賞を受賞。11月15日には住職夫人黒田倫子が発願主で清水寺に瑩山禅師のお徳を偲ぶ顕彰碑を建立、その除幕式を行いました。これらはすべて檀信徒の皆様、ご支援下さる関係の皆様方のお蔭と、心から感謝申上げる次第でございます。

▼2月28日、黒田住職の栄誉と夫妻の今後の活躍を祈念する祝賀の宴がスリランカ大使、スリランカ大菩提会長タイ国ワットパクナム関係者ご出席のもと催され、皆様から祝福を戴くことになりました。

▼本誌の特集はグラビア・本文とも「瑩山禅師顕彰碑建立」といたしました。完成して改めて深い感動を覚えずにはおられません。清水寺様、大本山總持寺様のご慈慮に心からのお礼を申上げます。

▼大本山永平寺で5月に、道元禅師七五〇回大遠忌が厳修されますが、黒田住職が焼香師という大役を拝命いたしました。つきましては檀信徒の皆様もこの機会に黒田住職に随喜されますよう、ご案内をさせていただいております。

▼第18回善光寺留学僧が決定いたしました。ブラジル、ポーランド、韓国、中国から来日し、勉学と修行に励んでおられる方がたです。育英会が支援することで研究成果が得られれば何よりも嬉しいことです。また第19回の募集を始めましたので、詳細はお問い合わせ下さい。

▼佐々木宏幹駒澤大学名誉教授と久保田展弘先生から特別読物を、また仏師故錦戸新観氏のご息女節子様と小田原潮音寺の安藤康哉老師から詩をご寄稿いただきました。心から御礼申し上げます。皆様のご活躍を祈念いたします。

▼3月は春彼岸。善光寺の近くに駐車場の用意もできました。墓参とぜひ寺にもお立寄り下さいまして、ご先祖さまにご焼香いたしましょう。

成寿　第三十三巻
平成十四年二月二十八日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野中央一丁目十二番九号
電話　〇四五(八四五)一三七一
ＦＡＸ〇四五(八四六)二〇〇〇
印刷所　神奈川新聞社出版局

横浜善光寺